「けものが話し、石が歩いていたころのこと、不仕合せな者に思いやりのある一人の美しい仙女がいた――」(「仙女の恋」より)
なんと奔放で、詩情にあふれた書き出しであろうか! 読者は否応なく、無限にひろがるファンタジーの世界に誘い込まれてしまう。
本書は、フランスの各地で、人々によって語りつがれた民話の中から、幻想的なはなしを拾い、まとめたもの。あなたを、恐ろしくも美しい夢の国へご招待いたします。

カバー絵　ベルナール・ルエダン

フランス幻想民話集

植田祐次 訳編

フランス幻想民話集
植田祐次訳編

教養文庫
1047
D
597
¥440
(427)

現代教養文庫

1047

フランス幻想民話集

植田祐次訳編

社会思想社

現代教養文庫

1047

フランス幻想民話集

植田　祐次　訳編

社会思想社

フランス幻想民話集
‡
目次

恋人たち

悪魔

領主

求道者

恋人たち

†

心臓を食われた恋人

謝肉祭のある日の夕暮れだった。恋こがれる男が美しい娘にいった。
「うるわしい乙女よ、いつわたしを愛してくださるのです」
「わたしに金色の花をくださったとき、朝日に歌う花をくださったときに、わたしはあなたを愛しましょう」
「ごきげんよう、うるわしい乙女よ。聖フィリップの日（五月一日）の夕暮れに、あなたの家の戸口でどうかわたしをお待ちください」
聖フィリップの日の夕暮れに、美しい娘は自分を恋慕う男を家の戸口で待っていた。
「こんにちは、うるわしい乙女。これが金色の花、朝日に歌う花です。うるわしい乙女よ、おっしゃってください、わたしを愛していると」
「愛していますとも。それにしても、まあ、お顔の色が真青だこと」

「真青ですって、わたしに血の気がないのもそのはず。金色の花、朝日に歌う花は、百匹の狼に見張られておりました。狼どもはさんざんわたしに咬みついて、おかげでわたしは血の半分をなくす始末。うるわしい乙女よ、おっしゃってください、いつわたしたちが夫婦の契りを結べるかを」

「おやさしい方、あなたが青い鳥をくださったとき、人間のことばを話し、キリスト教徒のように考える鳥をくださったときに、わたしたちは夫婦の契りを結ぶことにいたしましょう」

「ごきげんよう、うるわしい乙女よ。聖ロックの日（八月十六日）の夕暮れに、あなたの家の戸口でどうかわたしをお待ちください」

聖ロックの日の夕暮れに、美しい娘は自分を恋慕う男を家の戸口で待っていた。

「こんにちは、うるわしい乙女。青い鳥を連れてきました。人間のことばを話し、キリスト教徒のように考える鳥を連れてきました。おっしゃってください、いつわたしたちは夫婦になれるかを」

「おやさしい方、わたしに鷲の王をくださったとき、鉄の鳥籠に閉じこめた鷲の王をくださったときに、わたしたちは夫婦になることにいたしましょう。それにしても、まあ、あなたのなんと悲しげなご様子」

「悲しげですって、わたしが悲しいのもそのはず。青い鳥が言うことに、人間のことばを話し、キリスト教徒のように考えるこの鳥が言うことに、あなたはわたしを愛していない」
「青い鳥、おまえは嘘をおつきだね。すぐにおまえの羽をむしり取り、生きながら焼いてくれよう」
「ごきげんよう、うるわしい乙女よ。聖ルカの日（十月十八日）の夕暮れに、あなたの家の戸口でどうかわたしをお待ちください」
　聖ルカの日の夕暮れに、美しい娘は家の戸口で待っていた。
「お母さま、お母さま、わたしのあの方は戻ってこない」
「娘よ、食卓にお着き。おまえのあの方は、夕食のあいだにきっとやってくる」
　夕食が終って、美しい娘は家の戸口で待っていた。
「お母さま、お母さま、わたしのあの方は戻ってこない」
「娘よ、おやすみ。おまえのあの方はあすの朝きっとやってくる」
　美しい娘は床についたが、真夜中にそっと起き上がり、家の戸口で待つことにした。
「こんばんは、うるわしい乙女。わたしはとうてい鷲の王の力に及びません。鷲の王を鉄の鳥籠に閉じこめて、あなたに贈ることのできる者をどうかお探しください」

「おやさしい方、あなたの胸にあいたその赤い穴はなんですの」
「うるわしい乙女、ここにわたしの心臓がありました。それを鷲の王めが食べたのです。わたしたちが夫婦になることはありますまい、永久に」
そうして恋こがれる男は、暗闇の中へと立ち去った。翌日、美しい娘はカルメル会修道院の尼となり、死ぬまで黒いヴェールを取らなかった。

ナイチンゲールを恋した娘

ある女にベッラドナという名の娘がいた。この娘の可愛らしさときたら、類まれだった。

この娘が生まれたとき、仙女たちがあらゆる種類の贈物をしてくれたが、その中でもとりわけ、娘が望みのものに変身できる魔力の贈物があった。

ある日、ベッラドナは母親にいった。

「ママン、わたし結婚したいの」

「まあ、なんですって。まだ十五歳にもならないというのに」

「結婚しなければならないの」

「いいわ、おまえがそうしたいのなら、お望みの人を言ってごらんなさい」

「毎朝、柘榴の木の上で歌っているあのナイチンゲールと結婚したいの」

「ナイチンゲールと結婚したいですって。いったいおまえは気でもふれたのかい、そ

れともわたしをからかっているのかい」
「本気よ。好きな鳥と結婚しなければならないの」
母親は気の毒にもすっかり途方に暮れてしまった。
「ねえ、いいかい、おまえ。おまえを幸せにしてくれる、やさしい、美しい、お金持の人を選びなさい。おまえが一緒に暮らしていける方と結婚しなさい」
「わたしの考えを変えようなどとしないで。わたしはナイチンゲールがいいの」
「ああ、おまえは木々の間を駆け回りたいのかい。その鳥のあとをどこへでも付いていくには、おまえは大きすぎますよ」
「わたしはナイチンゲールにだって姿を変えることができるわ」
母親はうまく娘を説得できないと悟ると、娘が何かに姿を変えて家を出ることを恐れ、娘を部屋に閉じ込めて鍵を二度回して錠をかけた。
ある日、母親が近在の祭に遊びにくるよう親戚の女に招かれたので、ベッラドナは屋敷の礼拝堂付司祭の手もとに預けられた。
母親が出かけると、娘はいった。
「司祭さま、やさしい司祭さま。門の前にあるあのきれいな柘榴の実を一つ摘ませてくれませんか」

「いいや、お嬢さま。あなたのお母さまが、あなたを勝手に外へ出すことをかたくお禁じになられたのです」

「では、わたしに食べさせるために、せめて司祭さまが摘んでくださいな」

「それなら、結構」

司祭はベッラドナのいる部屋の戸を開けた。

娘はすぐに心の中で言った。「蠅(はえ)になれ」

すると、たちまち娘は舞い上がり、家から出ていった。

いったん外に出ると、自分がしとやかな女であることを思い出して、またいった。

「ベッラドナになれ」

すると、彼女はふたたびもと通りになった。

それから娘は、愛するナイチンゲールを探して野原を駆けていった。

戻ってみて、ベッラドナの姿が見えなかったときの司祭の驚きようはたいへんなものだった。

「何に姿を変えたのだろう」と司祭はつぶやいた。

司祭はいたるところ探し回ったが、空しかった。

母親は祭から帰って、娘の家出にひどく腹を立ててみたものの、結局、冷静になる

より仕方がなかった。

司祭は家出娘を探しに出かけた。一日中歩き回っても娘を見つけられなかったが、ようやく川辺で休んでいる娘の姿を見つけた。

「ベッラドナ、ベッラドナ、こわがらなくてもよいのだ。お母さまはあなたを許してくださった」

娘は司祭を見ると、鰻（うなぎ）に姿を変え、川の中に飛び込んでしまった。

司祭は川辺に近づいて探したが、川の中をのぞき込むと、ぐるぐる泳ぎ回る一匹の鰻が見えるだけだった。ベッラドナの影すらなかった。

夜が近づいてきたので、屋敷に戻り、母親にいった。

「川のほとりでお嬢さまに会って話しかけさえしたのですが、わたしを見るなり不意に姿を消し、どこへ行ったのか分からなくなりました。鰻が一匹だけ水の中で遊び回っていましたが」

「それでは、その鰻が娘だったのです。もしあなたがつかまえていてくれたら、娘はもとの姿に戻っていたでしょうに」

司祭はまた出かけていった。

広い平野があり、それがベッラドナだということが分かった。

司祭が急いで駆けていくと、平原は人跡未踏の森林に変った。哀れな司祭はその中で道に迷った。
司祭はやむをえず屋敷に戻って、一部始終を話した。
「もしあなたが森の木の枝をつかんでいてくれたら、ベッラドナはあなたに付いて来ざるをえなくなり、わたしたちは娘を手もとに置くことができたでしょうに」
司祭は三度(みたび)、出かけていった。
ある村の入口に礼拝堂が眼に入った。そのすぐそばで一人の主任司祭が聖務日課書を読んでいた。
「つい今しがた、ここを若い娘が通るのを見かけませんでしたか」
「今はミサを行っているところでな」
「そんなことをたずねているのではありません。娘さんが通るのを見かけましたか」
「中にお入りなさい。まだ間に合う」
「おまえもおまえのミサも、悪魔にさらわれてしまえ」
司祭はベッラドナの母親の方へ戻っていった。
「あなたは何を見たのです」
「礼拝堂と、そのすぐそばで聖務日課書を読んでいる司祭を見ました」

「それでは、その司祭が娘だったのです。もしあなたが娘をつかまえていてくれたら、娘はあなたに付いて来ざるをえなかったでしょうに」

「あの司祭のもったいぶった態度ときたら……」

「お黙りなさい。あなたはなんの役にも立たない。わたしが自分で出かけます」

そういって、女は出ていった。

三日以上も歩いたあげくに、ベッラドナの母親は、娘が一本の木の下に坐って愛するナイチンゲールに話しかけているのを見つけた。

恋する美しい娘は発見されたと知ると、ばらの木に姿を変えた。

だが、今度ばかりは娘にも運がなかった。母親は花が満開に咲き乱れているそのばらの木をつかまえると、屋敷へと戻っていった。

戻る道すがら、ナイチンゲールが悲しげに歌うのだった。

《わたしに妻を返しておくれ。
　ふたりは永遠に結ばれている。
婚礼では、花嫁に付添う娘は雲雀、
いっかわらひわと百合の花が二人の立会人だった。

わたしに妻を返しておくれ。
　ふたりはたがいに恋しあっていた。
このひとの心とわたしの心はただひとつ、
このひとが死ねば、わたしも死ぬ》

しかし、ベッラドナの母親は耳を貸そうとしなかった。母親は、友だちの仙女からもらったある水で急いで娘の魔法を解こうとあせりながら、相変らず屋敷へ向かって歩いていった。

けれども、ばらの木は死にかかっていた。花びらが一枚、そして一枚、また一枚と途中で落ちた。それにつづいてほかの花びらも落ちた。母親が家に着いたとき、ばらの木はもうすっかり枯れ果てていた。

　ナイチンゲールは妻のあとを追って離れなかった。三日のあいだ、毎朝その鳥は悲しげに柘榴（ざくろ）の木の上で鳴いていた。

四日目になって、ナイチンゲールは歌わなくなった。彼もまた苦しみのあまり死んでしまったのだった。

マリア

マリアは太陽のように輝かんばかりに美しい娘だった。

その土地の若者たちは例外なくこぞって、できるものなら彼女を嫁にと望んだにちがいないが、娘は鼻であしらってだれひとりとして相手にしなかった。領主の息子が彼女に永遠の愛を誓っていたのだった。

けれども、美しいマリアの父親と領主デッラ・ロカとは、たがいに反目しあう仲だった。しかも二人の恋を知れば、娘の父親の落胆と不面目とから、娘の身に何ごとが降りかかるかしれなかった。

さて、ある晩のこと、真夜中にマリアは恋人が来てくれないかと窓に寄り添って待っていた。

どんなにかすかな葉ずれの音にも、どんなに小さい足音にも、彼女はびくっとするのだった。

やっと恋人がやってきた。
外套を風に翻しながら、彼は荒馬に乗ってきた。
「マリア、マリア、降りてきてわたしと一緒においで」
「いとしい方、すぐに行きますわ。ああ、なんてあなたは待たせたのでしょう」
「早く、早く。あすになれば、あなたはデッラ・ロカ城主夫人になるのだ」
マリアはそっと扉を開けた。父親や母親や、それに兄たちのことを思い出したが、とどまりはしなかった。もっとも、彼女の兄たちは自分たちの恥辱を埋合せするために、やがて死を求めることになるのだが。
騎士は広場にいた。
「マテオ、わたしはここよ。ほら、この通り、すっかり震えているけれど、心は喜びでいっぱいなの」
「急ぐんだ、鞍の後ろにお乗り。もうすぐ夜が明ける」
マリアはその言葉に従った。
パカパカ、パカパカ、進め、進め。森も平野も山々も、消え去るがいい。
パカパカ、パカパカ、悪魔は狡猾だから、美しい娘をたぶらかしてしまったのだ。
パカパカ、パカパカ、二人は墓地を突っ切り、風のように速く過ぎていく。

「ねえ、あなた、わたしはこわい。わたしのマテオ、ああ、寒い、ひどく寒いわ」
「ヒッ、ヒッ、ヒッ」
こうして二人はまたも狂ったように走りだした。
哀れなマリアは恐怖で狂わんばかりになって、気を失って地面に転げ落ちた。
悪魔は娘の長い黒髪をつかむと、地獄への疾走をつづけた。
彼らは稲妻のように断崖を通り抜けて姿を消したと思うと、平野に出て、また海の中に沈もうとする。
進め、ヒュー、ピシ、ピシ。ところが、馬は海中に入らない。改めて勇気をふるい起しているようだ。美しいマリアの体は波の中を引きずられていく。
鮫が彼女を襲う。大口を開けて、彼女の片方の脚をがぶりと食いちぎる。
ピシ、ピシ、進め。悪魔や魔女の仲間たちよ、喜ぶがいい。夜のしじまを鋭い悲鳴が炸裂する。
そのとき、もう一匹の海の怪物が哀れな娘の体を追ってしつこく付け回す。やがて悪魔がつかんでいるのは娘の首だけになった。
進め、進め。すると、馬の鼻の穴から炎がほとばしった。
騎士は雄山羊の尾と二本の角をつけて現われる。

恋人たち　22

進め、パカパカ、パカパカ。陽が昇るぞ、それ、進め。
彼らは海を渡り終えて、たどり着いた。
地獄の門は大音響とともに、ひとりでに開き、マリアと馬と騎士を通した。

許嫁（いいなずけ）

ある若者と娘がいて、長い間たがいに相手の心を得ようと求めあっていたが、結婚をしよう、死んでからも変らぬ愛を捧げあおうと約束した。

そんな約束が交わされてからほどなく、船乗りだった若者は旅に出て旅先で死んだが、可愛い恋人の方は若者の死を知らなかった。

ある晩、若者は墓を脱けだし、娘の親の馬小屋から一頭の雌の白馬を連れだすと、馬にまたがって許嫁を迎えに夜の暗闇の中を出かけていった。許嫁の娘は、そこから少し離れた農家にいたのだった。

死者は家の戸口にやってきて戸を叩いた。

「どなた」

「ご両親の代理でこちらの娘さんをお迎えにやってきた若者です」

「まあ、母さんが寄こしたのね」声の主がだれかが分かった娘はそういった。

「そう、ぼくたちの婚約の式は明日にひかえている」と死者は答えた。
娘は白馬の鞍の後ろに、若者の背を抱くようにして乗り、そうして二人は出かけた。
道すがら、若者は娘にいった。
「月がきみを照らしている。きみは死を道づれにしているのだ。怖くはないか」
「いいえ、あなたとさえ一緒なら、怖くなんかないわ」娘はそう言った。
若者は頭の痛みを訴えた。
「ハンカチを頭に巻いて締めるといいわ」と娘はいった。
若者がハンカチを持ち合わせていないと答えたので、娘は自分のものを貸し与えた。
若者はそのハンカチを鉢巻がわりにした。
二人は娘の家の戸口についた。娘は馬を下りて、戸を開けてもらうためにノックした。
「どなた」
「あたしよ、母さんが人を寄こして迎えてくれた娘じゃありませんか」
「人を寄こしたですって、だれのことかしら」
「あたしの未来の夫にきまっているわ。あたし、鞍の後ろで、あの人の背につかまって馬に乗ったの。途中であの人がハンカチの持合せがないと言うものですから、あた

しのを貸してあげたのよ。あの人はきっと、馬小屋であたしたちの白馬の馬具をはずしているはずだわ」

家人が馬小屋にいってみたが、許嫁の姿は見あたらなかった。そのくせ雌馬はびっしょりと汗をかいているのだった。恋人の姿が消えたと知ったとき、娘は恋人が死んだのだと覚った。そして、娘もまた死んでいった。

許嫁の若者の遺骸が掘りだされ、二人は一緒に埋葬された。若者の頭には、娘が与えた白いハンカチがのせられていた。

＝愛の残骸＝

もうずいぶん昔のこと、トロネの囲い地の下方に一人の仙女が住んでいた。太陽よりもみごとに美しいこの仙女はリッザネセ川に洞窟をもっていた。朝、彼女が下着を洗いに出かける姿が何度も見かけられたので、いつの間にか、仙女の髪の毛をうまくつかんだ者は彼女の夫となれるという噂が広まった。

ところである日のこと、仙女は洗濯をしようと思った。

彼女は川を出て、午前中いっぱいをかけて洗い、それから日なたに下着を干して石の上で休んだ。

ポーリ家の一人の男がたまたまそこへ通りかかった。彼は仙女の姿が眼に入ったので、こうつぶやいた。

「もしうまく仙女の髪をつかめたら、わたしにとって何たる幸せだろう」

そこで、男はそっと足音を忍ばせて仙女の方へ向かった。不意に黄金のようなブロ

ンドのその髪をつかんで、彼は叫んだ。
「とうとうおまえをつかまえたぞ。おまえはわたしのものだ」
「放してちょうだい。ああ、放して、お願いだから」
「だめだ、おまえはわたしの妻になるのだ」
「もしあなたがわたしのことを諦めてくれたら、考えられるかぎりのどんな宝物でも差しあげるわ。王さまにでもしてあげよう」
「いや、おまえはわたしの妻にならなければならない」
「あなたがわたしを征服したからには、ではあなたの妻になりましょう。でも、これをよく覚えておいてほしいの。決してわたしの素肌の肩を見ようとしないで。さもなければ、わたしはすぐに姿を消してしまうでしょう」
ポーリは仙女をオルミッチャの村に連れ帰り、盛大な結婚式を挙げた。
このときから仙女はふさぎ込むようになった。もう何ひとつ食べず、決して笑わなかった。
彼女が外出することはめったになかった。村を通るときにも面を伏せて、まるで恥じらっているようだった。
けれども、仙女は三人の男の子と三人の女の子をもうけ、自分の手で乳を与え、心

から子供たちを可愛がっていた。
ある夜、ポーリは妻にたずねた。
「ねえ、言ってくれないか、なぜおまえは下着を脱ごうとしないのだ。言っておくれ、きっと美しいにちがいないのに、その肩を見せないのはなぜなのだ」
「見てはなりません。そうでなければ、わたしはあなたのせいで死ぬことになるでしょう」
改めてこう禁止されてみると、夫の好奇心は今まで以上に煽り立てられた。
「この女のその肩のどこが変っているというのだ。何も変ったところがないではないか。わたしが力ずくで結婚したことにちょっぴり意趣返しをしているらしい」
そこで翌朝、妻がまだ眠っているのを見すまして、仙女の肩をはだけた。
鋭い悲鳴が聞こえ、女は気の毒にも眼に涙をいっぱいに浮かべ、夫に向かってこう話しだした。
「あなたはどうしてもわたしの肩を見たかったのね。いいわ。見てちょうだい。でもそれはあなたを不仕合せにするでしょう。ここにあるこの穴をごらんなさい。骨だらけでしょう。これはたった今あなたが殺したわたしたちの愛の残骸なの。あなたが不幸になり、わたしも不幸になるというのに、どうしてわたしの言うことを聞いてくれ

なかったの」
「ああ、悪かった、許してくれ」
「間もなくわたしの姿は見えなくなるでしょう。わたしたちには六人の子供がいます。言ってちょうだい、どちらを残したいの、男の子かしら、それとも女の子かしら」
「男の子の方がいい」
「では、男の子の方を取るがいいわ。でも、承知しておいて、あなたの血が絶えないかぎり、あなたの家系に三人以上の家長がいることはないでしょう」
そういうと、仙女は姿を消した。ポーリはひどく悲しんだ。彼は朝晩、何度もリッザネセ川の洞窟に戻ってみたが、妻にも娘たちにも会えなかった。
仙女の予言通りに、このとき以来、ポーリ一族の家系には、三人以上の家長がいることは決してなかった。仙女とその娘の子たちについていうなら、海峡を渡ってサルジニアに引きこもったのかもしれない。

仙女の恋

けものたちが話し、石が歩いていたころのこと、不仕合せな者に思いやりのある一人の美しい仙女がいた。この仙女はそれと同時に強力な魔女でもあった。けれども、彼女の住む洞窟を三日間しか離れることができなかった。もし一時間でも余計に外にいたら、仙女は一切の魔力を失うことになっていた。
ある朝のこと、この美しい魔女がその住処（すみか）から百里離れたところへ出て散歩をしていると、羊を牧場へ連れていく羊飼いに出会った。
その羊飼いがたいそう美しく、それにザンプーニアというフルートをとても上手に奏でるので、仙女はわれ知らず激しい恋心を抱いてしまった。
「美しい羊飼いよ、おまえは幸せなの」
「幸せですとも、美しいお方」
「ほしいものは何ひとつないの」

「ええ、必要なものはすべて持っていますから」
「美しい羊飼いよ、わたしのことを美しいとお思いかい」
「あなたに較べられるような女の人に会ったことがありません」
「もしその通りなら、わたしと結婚しておくれ」
「喜んでいたしますとも」
「結構だわ。おまえの指にこの指輪をはめなさい。そうすれば、わたしたちは結婚したことになるわ」
　羊飼いはすぐに言われた通りにした。すると、粗い布地の古びた衣服の代りに、たちまち彼は王子のようなみごとな衣裳を身につけていた。
「聞いてちょうだい」と仙女はいった。「わたしはここからとても遠くに住んでいるの。翼を付けた馬に曳かれる二輪馬車がここにあるわ。これに乗って行きましょう」
「母に会って最後の接吻をするのに、何日かぼくに余裕をくださいませんか」
「いいわ、でも、あまり手間どらないようにしてちょうだい。三日後にわたしは待っていましょう。この二輪馬車は、わたしが用意するお屋敷へひとりでに案内してくれるはずだわ」
　魔女はそれから羊飼いに接吻し、去っていった。

羊飼いも立ち去った。途中でその国の女王に出会った。女王は羊飼いをたいそう美しく思い、こういった。

「美しい殿よ、わたしの夫の王は亡くなりました。わたしの夫になってはくれますまいか」

羊飼いは一瞬考えた。女王は先ほど自分と結婚した女ほどには美しくないが、そんなことはどうでもよい。自分は王になれるのだ。そう思って彼は心を決めた。

「ええ、あなたの夫となることを承知いたしました」と彼はいった。

彼がそう言うと、魔法の二輪馬車と馬は姿を消し、若者は高貴な貴族から世にもみすぼらしい男になった。彼の美しい顔は身の毛もよだつほどの醜さに変った。

「この化け物は何者か」と女王はいった。「わたしの眼の前から追い払うがよい」

「あなたの夫です、女王」

「その男に棒で百叩きの罰を与えておあげ。そんなに醜いのだから、わたしの夫になれるはずがないわ」

しかし、女王がそう話すと、たちまち大地が揺れ、稲妻が雲を走り、二人の不貞な人間は彼らの足もとにぽっかり開いた深い穴に呑み込まれてしまった。

仙女が復讐したのだった。

『司祭とその恋人』

ビアンカという名の若い娘と若い僧はたがいに心から愛しあっていた。不幸なことに、哀れなビアンカはたまにしか恋人の僧に会えないでいた。もし兄が二人の恋を知ったならば、二人を殺すにちがいなかったから。

ところで、ある晩、ビアンカと僧は聖ヨハネ教会で逢引きをした。二人は真夜中に着いて二本の大ろうそくに火を点し、やさしく愛を語りあった。

「ビアンカ、わたしのいとしいビアンカ、この腕に抱かれに来ておくれ。わたしがどんなに愛しているか知っているね。わたしは永遠にきみに貞節でありつづけるために、聖職者になったのだ。わたしの父がきみ以外の女とわたしを結婚させようとしたからな」

「いとしい方、わたしだって愛していますとも。あなたのためにわたしは命を賭けているのよ。いまこうしてわたしがあなたの腕の中にいることを知ったら、兄はわたし

を殺すでしょう」
やがてサント＝リュシ修道院の大時計が一時を告げた。
「いったいどうしたのかしら。寒くて体が凍りそうだわ。………おお、こわい」
二本の大ろうそくが不意に消え、すべてが暗闇に包まれた。
そのとき、礼拝堂の奥で足音が聞こえた。
「ああ、あなた、こわいわ、助けて、わたしを助けて」
足音は相変らず近づいていた。
「だれだ」と僧はたずねた。
そのとき、爆発音が聞こえた。ビアンカがかすかな悲鳴をあげてばったり倒れた。
僧は恋人の兄だと分かった。
万事休すと思い、彼は逃げ出したが、殺人者は後を追ってきた。
彼らは密林を突っ切り、城壁を飛び越え、川を渡って走った。
僧は休息もとらずに絶えず逃げたが、後ろに相変らず恐ろしい敵の足音が聞こえるのだった。
ついに彼らは墓地の門にやってきた。
僧は進退きわまった。

不意に彼の前に一頭の馬が現われた。彼はその馬に飛び乗ると、風のように駆け去った。
ビアンカの兄は怒り狂って叫んだ。
「ああ、悪魔よ、せめてわたしの魂と力だけでもあの男に追いつけたら」
その瞬間に悪魔が現われた。
契約が決められ、二人は僧を追跡した。
僧は逃げた。彼が乗った死の馬は稲妻のように速かった。彼は一跳びで川を渡り、山の反対側にたどり着いた。
悪魔は気を落とさなかった。悪魔も馬をもっていた。それは彼の馬の中でもいちばん見事な馬だった。馬の鼻の穴から炎がほとばしり、四本の足は地面に付いていなかった。
追跡はしだいに激しくなっていったが、死の馬はまるで翼でも生えているように一向に追いつかれなかった。
けれども、悪魔はしつこく付きまとい、馬の腹に何度も拍車をかけると、馬はたけり立って物すごい勢いではね跳んで駆けた。
「元気を出せ、さあ、追いつくのだ」

いくつもの谷が飛ぶように去り、山や断崖は見る見るうちに、まるで魔法のように消えていった。
ようやく僧の姿が眼に入る。僧の馬はさすがに脚力が衰えて身を震わせていたが、やがてまたもや力を取り戻し、ふたたび疾走した。
また追跡が始まった。今度はいっそう激烈だった。
双方の馬はパカパカ、パカパカと音を立てながら、どこかに通じている長い道にそって走った。
ついに悪魔が勝った。悪魔は僧をつかんで地面に投げ倒した。
わずか数時間のうちにいつしかコルシカ島を一周し、聖ヨハネ教会に戻っていた。
「さあ、この男をおまえに引き渡そう。好きなようにするがいい」と悪魔はビアンカの兄にいった。
「憎い坊主め、なぜおまえは妹を辱めたのだ、なぜおまえの腕に抱かれた妹をおれに殺させたのだ」
「後生だから、許してくれ。わたしはとても愛していたのだ」
「容赦はしないぞ。死ね、この恥知らず」
そう言って、ビアンカの兄は僧の髪の毛をつかんで、礼拝堂の回りを引きずって歩

いた。

「お願いだ、後生だから」

「情けは無用だ」

こうして僧はむごい旅をつづけたあと、ついに彼のビアンカの遺骸の上に倒れて死んだ。

それと同時に、鋭い閃光が走り、大地は揺れ、そして悪魔は二人の恋人を殺した男をさらって姿を消した。

＝煉獄からの復讐＝

高慢な猟師リナルドはディスリナを誘惑し、そして棄てた。娘は自殺した。
ところである晩のこと、リナルドは狩りに出かけた。彼は石のうしろで待ち伏せ、獲物を待った。
やがて何やら白いものが現われるのが彼の眼に入ったが、それは彼がひそんでいる場所の方へゆっくりと進んでくるのだった。
「いったいあれは何だろう」と猟師は思った。
で、彼は銃を構え、相変らず進んでくるその得体(えたい)の知れぬものに向かって引金を引いた。
亡霊（たしかにそれは亡霊のたぐいだったから）は、依然として歩みを止めなかった。リナルドはまた発砲したが、やはりうまくいかなかった。
猟師はこわくなった。

「だれだ、わたしに何の用があるのだ。おまえがだれであろうと、返事をするがいい」
「卑劣な男、わたしはあなたに辱めを受けた女だよ」
「ディスリナか、おお！　神さま！」
「呪われた者よ、神の名を口にするでない。おまえはわたしを棄てたときに神を拒み、永久に神を拒絶したのだから」
　同時に、また別の幽霊が、それも一人また一人と現われた。
　相手はこぞって猟師リナルドに近づいた。
「わたしに何の用だ、何の用があるのだ、いまわしい亡者どもめ、わたしの心を恐怖で充たすとは。あっ、マリア、ルチア、フランチェスカではないか！」
「そうですとも、わたしたちよ、人でなし。おまえは自分がもうわたしたちのことを覚えていないからといって、わたしたちもおまえのことを忘れてしまったとでも思ったの」
「後生だ、お願いだ」
「卑怯者！　わたしたちに流させた涙を覚えておいでかい。おまえがわたしたちの心をずたずたに引き裂いたとき、わたしたちはおまえに情けを乞うたが、でもおまえは情け容赦しなかった」

高慢な猟師の手足はがくがくと震えて止まらなかった。
「そうだ、あの娘たちだ、あの娘たちに間違いない」
するとディスリナが口を開いた。
「ねえ、わたしたちに数知れぬ侮辱を加えた男、わたしたちを辱めたあと何度も殺したこの男には、どんな責苦を加えるべきかしら」
マリアがいった。
「わたしが母と二人きりでいると、この男がやってきて、その心と同じ偽りの言葉でわたしを誘惑したの。わたしはこの男に従い、母は苦悩のあまり死んでしまった。わたしは今夜をこの男の最後の夜としてくれるようにお願いするわ」
今度はルチアが話した。
彼女は頑是(がんぜ)ない乳呑児(ちのみご)をかかえていたが、その子は死んでいた。
「この男はわたしに結婚を申し込んだわ。ある晩、わたしを甘い愛の言葉で酔わせておいて、とうとう二人の婚約を決めてしまった。
わたしはこの男の腕に抱かれた。
その日から、わたしは二度とこの男に会うことがなかった。だって、この男は別な犠牲者を探しに出かけてしまったのですもの。絶望に駆られて、わたしはわれとわが

命を絶ってしまった、乳呑児を道連れに」
そういってルチアは、聞く者の胸をえぐるほどに激しくむせび泣いた。
「この男にどんな刑を宣告するの」男に棄てられたほかの女たちがたずねた。
「死刑よ」
ついでフランチェスカが前に進みでた。
「わたしは美しかったけれども、貧しかった。ある日この男が家に入ってきて、お金を差し出した。わたしは憤慨してお金をつき返した……でも、わたしはお腹が空いていた。何週間も、何か月もわたしは耐えた。毎晩この男はわたしの貞操を買うためにやってきた。ある日、飢えがこの上なく激しく、わたしは屈服した。でも、恥ずかしさで死ぬ思いだった。苦痛のあまり、わたしは家の窓から通りの舗道へ身を投げた」
「この男を懲らしめるのに何をお望み、さあ、何をお望みなの」
「この男の死を望むわ」
「では、あなた、ディスリナ、どんなことでこの男を責めるの」
「わたしの話は恐ろしすぎるほど恐ろしい。あなたたちでさえわたしを呪わずにはいられなくなるでしょう。でも、わたしもこの男の死刑を求めるわ」
こういった話が終ると、高慢な猟師リナルドは亡霊に取り囲まれた。そしてついに

亡霊たちは歩きだし、彼を引きずり、森や山や断崖を突っ切って駆け、ようやくマリアの家までやってきた。

何もかもが哀れで物悲しげだった。

「リナルド、覚えておいでかい、おまえがやってきてわたしを破滅させたあの日のことを。それ、あそこにベンチがある。おまえがあんなにもわたしに愛をささやき、そうしていく度もわたしをあざむいたのは、あのベンチの上でだった」

「ああ、覚えているとも」とリナルドはいった。

亡霊たちは彼のひげをむしり取り、顔を殴り、そして相変らず駆けに駆けてルチアの家にやってきた。

すべてが浮き浮きしているように見えた。食卓には、祝宴のご馳走が数多くのランプに照らし出されて並べてあった。

「リナルド、リナルド、わたしの父と母がおまえを待っていたのに、なぜおまえはわたしに永遠の貞節を誓い、祝宴が終ると、わたしを辱めたことを知りながら、わたしを棄てたの」

「さあ、返事をおし」亡霊たちはいっせいにいった。

だが、リナルドは顔を伏せ、答えなかった。

そこでもまた、彼は顔と頭を殴られた。それもじつに手荒に殴られたので、もう立っていることもできないほどだった。

「さあ、先へ進むがいい、まだおまえの旅程は終ってはいないのだから」

そうして彼らは、谷や山を横切り、河川を渡って駆けた。

ついに一軒のみすぼらしい家に着いた。

フランチェスカはそこに住んでいたのだった。

彼女はリナルドにいった。

「卑劣な男、なぜおまえはわたしの飢えを利用して、わたしの貞操を奪ったの」

そういってフランチェスカは、男の顔に唾を吐きかけた。それから仲間と一緒に、かつて自分が身を投げた窓から男を放り投げた。

しかしリナルドは死んではいなかった。

亡霊たちはまたも彼を引きずり、密林や森を抜けて風のように歩いた。

哀れな猟師の衣服はボロボロになり、彼の手や顔は血まみれだった。

そうして亡霊たちは、相変らず走りに走った。

「もうたくさんだ、勘弁してくれ、後生だ！」哀れな男は悲鳴をあげた。

しかし、娘たちの亡霊はこう答えるのだった。

「歩け、歩け。わたしたちに情けをかけてくれなかった男に情けは無用」
とうとう教会の広場にたどり着いた。それはリナルドが生まれた村の教会だった。
そこで、葉を落とした楡の大木を前にして、亡霊と猟師は輪になって踊り始めた。
たえ間なく、そして休みなく。
「許してくれ、勘弁してくれ」哀れなリナルドは力なくいった。
だが、彼のいうことは一向に聞き届けられなかった。
地獄の輪舞はいつまでも、相変らずつづいた。
「もっと早く。さあ、夜が明けかかってきた」
リナルドはもう歩いてはいなかった。彼は地面に一度もふれないまま、くるくる回っているだけだった。
とうとう彼はばったり倒れて死んだ。
マリア、ルチア、フランチェスカそれにディスリナはすぐに姿を消した。
娘たちはそれぞれに、広場に横たわった高慢な猟師の死骸を残して、墓に消えた。

＝生　首＝

もう百年ほども前のこと、一人の若い女が、鉱山の飯場に使われているポン＝ペアンの宿屋に、自分を下働きにやとってくれと申し出てきた。女は正直そうに見えたので、引き取られることになった。

その地方で見かけたことのないこの女はたいそう美しく、しかもその美しさは妖しいほどだった。黒い眼はきつく、輝きがあって、女に眺められると心の底まで読みとられるような気がするのだった。女はけっして笑わず、相手がだれであってもけっして冗談を言わなかった。過去のつらい思い出につきまとわれているようにさえ見えた。

女は、鉱山の会計係の心につよい印象を植えつけた。会計係は激しく女を恋するようになった。

彼は女に結婚を申し込んだ。下働きの女にとってそれが有利な縁談だったのに、最

初その女は縁談をことわった。青年はくじけずに、女にたいしてますます親切に尽したあげく、ついには女の抵抗を征服して結婚を決心させるように振舞った。
婚礼の日取りが決まると、婚約者の青年は慣習にしたがって親戚や友人たちのところへ出かけ、婚礼の式に招待した。
自分が心から愛していた美しい娘と結婚できるのだと思うと、青年は喜びで有頂天になっていた。で、一軒一軒家に入るたびに、すすめられる酒を飲み、花嫁の健康を祝って乾杯した。そんなわけで、彼は家に帰る途中、ひどく陽気になっていた。くぼみのある道を通っていると、丸い大きな石を踏みつけたので、思わずよろけた。
青年は笑いだしながら石ころにいった。
「おまえさんも、わたしの婚礼に招待してあげるさ」
ひどく驚いたことに、石ころが答える声が聞こえた。
「ご招待は承知した。かならずわたしがきみの結婚式に出席すると思っていてくれたまえ」
青年は笑うのをやめて身をかがめた。すると、石ころでなく生首が見えた。髪の毛が逆立ち、ぞっとするような恐怖が青年をとらえた。彼は一目散にポン＝ペアンまで逃げ帰った。

青年が村に着いたときには時間がおそかったので、家族はみな眠っていた。彼はひとりで寝室に入ったが、眠りが妨げられて翌日の朝方までまんじりともしなかった。だが、部屋に陽が射すのを見ると、悪い夢を見たのだという気がしてきて、生首のことは泥酔のせいにし、ついにはすっかり忘れてしまった。

結婚式のミサはブリュズで行われた。儀式のあと、みんなは町のあちこちの居酒屋に出かけてバターパンを食べ、ポン＝ペアンに戻ったのは食事だけが目当だった。

十月だったので、夜は早々とやってくる。祝宴が開かれることになっていた納屋に招待客が入ったころには、日はとっぷりと暮れかかっていた。大梁（おおはり）に取りつけた、煤（すす）のくすぶるいくつかのケンケ式ランプに火が点（とも）された。

下働きの女たちがスープをあふれるほどに注いだ鉢を運んできた。
新婦の前に置かれた鉢のふたを取ると、中から生首が出てきて、テーブルの上の大皿や小皿のまわりを飛び跳ねだした。

女たちは悲鳴をあげて逃げた。新婦は逆上して発作を起し、気を失った。居合わせた人々は新婦を部屋に運ばないわけにはいかなかった。新婦がつれ去られると、生首はたちまち消えたので、男たちはたがいにほっと息をつき、食卓に坐りなおした。人の好い女たちも、自分たちのところまでただよってくる料理の匂いに誘われて、男た

ちと一緒に食卓についた。

やがて一座の人々は活気づいた。というのも、抗夫たちは酒豪ぞろいだからだ。そのうちに歌も始まった。

十時ごろ、妻と一緒になっても友人たちの気分をそこねることがなくなったころ、新郎は寝室に戻った。

部屋はまっくらだった。彼はベッドの方へそっと進んでいき、いくつものごくやさしい呼名で最愛の妻を呼んだ。なんの返事もなかった。彼はもっと近づき、枕に手をやった。生き生きとした魅力的な顔がその枕の上で休んでいるはずだ、そう彼は想像していたのだ。

青年は恐怖のあまり後ずさりした。彼が手を置いたのは、生首の氷のように冷たい頭蓋骨の上だった。

「なにもこわがることはない」頭蓋骨が青年にいった。「きみにとっては、ここできみの探している女に会うよりは、このわたしに会うのがよいのだ。あの女は悪魔にとり憑かれているのだから。

あの女は、自分がきみを苦しめる原因をつくることなど考えもせずに、遠くへ発っていったのだ。

そうだ、あの人でなしは、もうここにはいない。あの女はわたしを避けて逃げだしたのだ。だが、わたしはあいつに追いつけるだろう。

わたしは、たぶんきみ以上にあの女を愛していただろう。わたしに身を任せたあと、自分の自由を取り戻そうという気になった、あの冷酷無情な人でなしをな。わたしが傍らで眠っているあいだに、あの女はなんのためらいもなく斧(おの)を振ってわたしの首を切り落としたのだ。

たくみに嘘をついて、あの女は自分の無実を信じこませ、その罪の処罰をのがれることができた。しかしあの女が切り落としたこの首は、女が最後の息を引き取るときまで追いつづけるだろう」

フィアンセの亡霊

それほど昔のことではないが、ある金持の美男子がいて、マリウッチャという娘を愛していた。
貧しいこの娘は長いこと男の熱心な言寄りを退けてきたが、しかしついに男の願いに負けて娘自身も男を自分の命以上にいとしく思うようになった。
マリウッチャとその恋人は永遠の愛を誓った。二人は死んだ後でさえも決して別れないと約束した。
しばらく経って、カルロ（これが娘の恋人の名前だった）の父親が息子にいった。
「息子よ、おまえも結婚する年頃だ。三十歳になるのだから、これ以上待つのはあまり賢明とはいえまい。わしはおまえのために、金持で美しい、要するにおまえが望みうるすべての長所を備えた女を選んでやった。その女と結婚するがいい」
「お父さん、ぼくがマリウッチャのものになると誓ったことはご存知ではありません

か」

だが、父親は息子の話などてんで意に介さずに、二度と娘に会わないと息子に決心させた。

マリウッチャは恋人の心変りを聞き知ると、すっかり沈み込んだ。傍目にも少しずつ娘が衰弱していくのが分かった。そうして娘は痩せ細り、ほとんどもとの彼女と見分けもつけにくいような有様だった。

ある日、娘はカルロに出会った。

「わたしのことをお忘れになったというのは本当なの。では、あの誓いもお忘れになったのね」

だが、カルロは聞こえないふりをして、構わず歩きつづけた。

数日後に、マリウッチャは死んだ。

墓地に墓穴が掘られたが、娘は何ひとつ所有するものがなかったので、木の十字架すら身につけていなかった。

間もなくカルロは結婚した。

彼は幸せだった。というのも、美しくて資産家の彼の妻が、彼をあんなにも愛していた哀れなマリウッチャのことをじきに忘れさせてくれたからだ。

ある晩のこと、夫婦が眠っていると、真夜中ごろに氷のように冷たい手が二人の眼を覚まさせた。
「そこにいるのはだれ、いったいだれなのだ」二人は死衣をまとった亡霊を眼の前に見て、思わず叫んだ。
「わたしよ」
カルロはぞっとした。その声に聞覚えがあったからだ。
しかし思い切っていった。
「だれだ、わたしって、だれのことだ。ぼくはおまえなど知らない」
すると、せせら笑う声が聞こえた。亡霊は死衣を脱ぎ捨てると、夫婦のあいだにやってきて寝た。二人は自分たちの体を凍らせるようなその冷たい骸骨にふれて身ぶるいした。
「何の用なの」と若妻はいった。「なぜあなたはわたしたちの眠りを乱しにくるの」
「わたしがほしいのは、わたしの夫。夫はわたしに誓ったわ、生涯わたしのものになろう、そしておまえが死ぬときはわたしも死ぬときだと。夫がわたしのもとへ来るのを忘れたので、わたしが夫のもとへ来たの」
この話は若妻の心を恐怖で充たした。彼女は片隅にちぢこまって亡霊にふれないよ

うにした。
マリウッチャは朝まで寝ていた。鶏が鳴くと、彼女は止むをえず出ていった。
カルロは司祭のところへ駆けつけ、自分の身に起ったことを話した。
「ベッドを祓い清めなければならない」と司祭は答えた。
そこで、すぐに彼は教会へ向かい、聖水を多量にもらい、家中に聖水をふりかけた。
夜がやってきた。司祭が請け合ってくれたにもかかわらず、カルロとその妻は十一時までまんじりともしなかった。かっきり真夜中になって、骸骨の手が二人の眼を覚まさせた。
「わたしの場所を明けてちょうだい。とても寒いの」
「亡霊よ、亡霊よ、わたしがあなたに何をしたかしら」と哀れな妻は叫んだ。「これからも長い間、あなたはわたしを恐怖で縮み上がらせにくるつもりなの」
「あなたたちがどこにいようと、わたしの夫を自分のものにするまでは、毎晩、同じこの時刻にやってくるでしょう。だって、この人はわたしのものになると誓ったではありませんか」
そうして、その夜もマリウッチャは鶏の鳴くまで寝ていた。
次の夜もまた亡霊はやってきて、前夜と同じようにうめき声を上げるのだった。

「場所を明けて、わたしの場所を明けて。とても寒いの」

今度も死者は二人の生きた人間のあいだに入り込んだ。死んだ女はカルロを痩せ細った両腕に抱き締めながら、こういうのだった。

「いとしい人、やっとあなたはわたしのものになったのね。これからもずっとわたしのものよ。わたしたちはもう決して離れることもないでしょう」

カルロは答えなかった。彼は死んでいた。

人々は彼をマリウッチャの墓に埋葬した。

そのときから、幽霊はもう真夜中に戻ってこなくなった。

悪　魔

†

コケットな娘と悪魔

昔、ずっと以前のことだが、エルキにアデル・ウールダンという名の娘がいた。貧しかったので、この娘は同じ年頃の若い娘のように晴着を持たず、つぎはぎだらけのスカートや、赤ちゃけた目の粗い糸で編んだ帽子や、擦りへった木靴を恥ずかしく思っていた。
ある日、ふだん以上に口惜しくなって叫んだ。
「わたしはどの集りにも出られやしない。わたしには着る服がないのですもの。ほかの娘たちと同じくらいに美しい晴着を着られたら、悪魔にだってこの身を任せるのに」
アデルは小さな家に一人住まいをしていたが、このときの願いをいつの間にか忘れてしまった。数日後、とっぷり日が暮れたころ、一人の紳士が娘の家にやってきて、暮らし向きに不自由はないか、何か欲しいものがないかとたずねた。あまり賢くなか

ったその娘は、家計の状態を残らず話し、汚い服しか持っていないことが恥ずかしくてならないといった。

「わたしがあなたにお金を差しあげよう。そうすればあなたは何不自由なく暮らせるだろう」とその紳士は言った。「わたしがこれに対してつける条件はただ一つ、わたしが貸したお金をあなたが返せない場合には、三年後にかならずわたしのものになると約束してくれるということです」

てっきり相手が三年後に自分と結婚したがっているのだと思った娘は、大喜びでこの契約に同意した。

娘には不足するものが何ひとつないようになった。彼女は望み通りに、畑を耕すための鋤、いく樽ものリンゴ酒、何枚もの麻布、縞の入った美しいスカートを持っていた。欲しいものがあれば、例の紳士にそれを頼むだけで充分だった。紳士はとっぷり日が暮れたころ、娘の家に毎晩やってきた。

娘がたいそう貧しいことを知っていた近所の娘たちは、にわかに彼女が裕福な暮しをし始めたことに驚き、そのために娘がどんなことをしたのかと不思議に思っていた。

ある日、そんな娘たちの一人が彼女をたずねて来ていった。

「アデル、道具を貸してくれないかしら」
「だめよ、貸せないわ」と娘はいった。
「あの道具はあなたのものではないの」
「いいえ、わたしのものよ。でも、貸すわけにはいかないわ」
「だれがくれたの」
「いいこと、あなたには話すけれど、だれにも言わないでちょうだい。わたしには、美男子で、その上わたしの望みのものを何でもくれる恋人がいるの」
娘は、いろいろな物がぎっしりと詰まった戸棚や、あらゆる色の葡萄酒を詰めた大箱を見せた。
「でも、その方の姿を少しも見かけないわね、そのあなたの紳士とやらを」と近所の娘は言った。
「あの人は夜にしか来ないからよ」と娘は答えた。
近所の娘は秘密を守ると約束したくせに、自分が見聞きしたことを話したくてむずむずしていた。たちまち村全体がその話を知った。若者たちは夜になってウールダン嬢の家に出かけてみようと話し、たそがれ時に娘の家に入っていった。だが、若者たちはそこに長くはいなかった。屋根裏で、家がつぶれるのではないかと思われるほど

の猛烈な物音が聞こえたのだ。若者たちはこわくなって急いでそれぞれの家に帰った。

翌日、その若者たちが前夜の冒険談をほかの若者たちに話すと、話を聞いた者たちは彼らをからかっていった。

「おまえたちはお人好しの頓馬野郎だ。屋根裏で遊んでいる猫一匹に胆をつぶしたのだからな。来週の日曜日、聖セバスチャンの集りにおれたちと一緒に来るよう、ウールダン嬢を誘ってみなければならない。そして夜になったら、おれたちみんなで彼女を家に送りとどけてやろうではないか」

若者たちは娘を集りに連れていき、彼女にアーモンドを買い、リンゴ酒やコーヒーの代金を払い、それから夜になって娘の家にやってきた。

「アデル、ほんの一杯だけ葡萄酒をくれないか。きみをあちこち連れて回り、一日中なにかとおごってあげたのだから」

「わたしの恋人からだれにもあげてはならないときつく言われているの。でも、あなた方はとてもわたしに親切だったから、一びんだけ探してくるわ」

娘が屋根裏に通ずる階段の戸口までいくと、すぐに戸が開いて男が階段を下りてきた。男はひと言も口をきかないまま、若者たちに戸を指さした。しかもその眼が恐ろしかったので、若者たちは急いで外に出た。中庭の中央に来たとき、アデルがまるで

殺されるような悲鳴をあげるのが聞こえた。若者たちは、てっきり男は悪魔にちがいないと思った。そこで彼らは、エルキの教区司祭を探しにいった。だが、司祭はたった一人で悪魔と戦いたくなかったので、翌日自分と話しにくるよう娘に話すことを若者たちに勧めた。
「司祭さま、どんなご用ですか」娘はやってくると、そういった。
「あなたの恋人は何者なのかね」
「あの人のことは何ひとつ知りませんし、あの人にそんなことをたずねたこともありません」とアデルは答えた。
「ある男の人がわたしに会いに来ました。その人は欲しいものを何でもわたしにくれるのです。そうしてその人は、三年たったらわたしを自分のものにすると言いました」
「あなたはその男と契約を結んだのだね」
「ええ、で、その人は毎晩、屋根裏からやってきます」
「ああ、屋根裏からくるだと」
「ええ、中庭に面した扉からは決して入ってこないのです」
「その男は毎日あんたと何をしているのかね」

「わたしと寝ています。でも、わたしはそれがあまり好きではないのです。あの人は爪が鋭くて、わたしをひっかくのですもの」

「可哀そうな娘だ」と司祭は叫んだ。「あんたは悪魔に身を任せたのだ」

「ああ、とんでもない、司祭さま」

「いや、そうだ。いつかあんたは、晴着が手に入ったら、悪魔にだって身を任せると言ったことがあるね。そいつはあんたの言葉を文字通りに受け取ったのだ。あんたはもうだめだ。あんたを悪魔の爪から助け出すには、どうしたらよいだろう」

「ああ、今晩は家では寝みませんわ」

「いや、家に帰らなければならん。そいつはここには来ないだろうから。今日はまだあんたを助けられない。だが、そいつの足がどんなふうになっているかを注意して見るのだ」

「足には注意したことがありません。でも、あの人の手の爪が鋭いことはよく知っています」

ウールダン嬢は、夜になって恋人がやってくると、間違いなくその足を見た。娘は指でその足をさわりさえした。すると、足が奇形であることが分かった。

男は娘にいった。

「ルシアンだな（それは司祭の名だった）、おまえにわたしの足を見るように命じたのは」

そういって、男は娘を殴り始めた。そして、もし娘が家にだれかを来させるなら、不幸な目に会うぞと言った。

ウールダン嬢は、朝になるとさっそくすべてを司祭に話した。そこで司祭は、夜になると娘の家へほかの二人の僧と一緒にやってきて、袈裟（ストラ）を悪魔の首に通した。だが悪魔は聖堂区の袈裟を残らずめちゃくちゃにし、二人の僧を殴った。もう残っている袈裟は一つだけになった。それは聖者だった年若い助任司祭の袈裟だった。悪魔はそれを引き裂くことができなかったので、娘は救われた。しかし、悪魔は立ち去るときに、家の半分を持ち去っていった。そのときから、家の建てなおしが行われたが、石を積むようなことはしなかった。

ウールダン嬢が救われたとき、司祭はいった。

「こんなことは二度と繰り返さないようにするがいい。もしおまえが一度ならず二度までも悪魔に身を任せるなら、おまえはいつまでも悪魔の爪につかまったままでいるだろう」

娘たちにつきまとう悪魔

ロワール河下流にあるデルヴァルという小さな里を去ってレンヌの方へ来ると、「赤い丘」の名が付いたかなり急な丘を下ることになる。右手の、この丘の中腹にはロビネと呼ばれる小さな村がある。

ところで、まだ五十年以上にはならないが、そのころロビネの村娘たちのダンス好きは度を越していた。娘たちはあるときはこの家で、またあるときはあの家でといった具合に、日曜日の夜になると、いや週に数回になることもあったが、集まってきては夜中の一時をかなり過ぎる時刻まで気晴らしをするのだった。

村の若者ばかりでなく、近在の若者までもこのお祭騒ぎにやってきた。

ある晩のこと、だれもが驚いたことに一人の美男子がやってきて、自分も踊りに加えてほしいと頼んだ。男がいとも鄭重（ていちょう）に頼むので、娘たちは拒まず、そのうちに先を競ってその男と踊りたがる始末だった。それほど男は好感がもてたのだ。

その日以来、男はお祭騒ぎがあるとかならず姿を見せた。その男が何者なのか、どこからやってきたのか分からなかった。だがたいへんに陽気で快活なので、だれもが口車にのせられてしまった。そのうちにその男と踊る娘たちは仕事を好まなくなり、楽しみのことばかり考え、男に気に入られるように身を飾った。

娘たちの幾人かは故郷を去って二度と戻ってこなかった。それでもなお、その見知らぬ男は村に来つづけ、とりわけジャンヌという名の娘のそばに付き添うようにしているのだった。ある晩二人がゲラン小母さんの家で一緒に踊っていたとき、小母さんは部屋の片隅で膝の上に小さな子供をのせて坐っていたが、二人の男女が前へ進むたびにその子が悲鳴をあげることに気づいた。この奇妙な事実に小母さんは驚いた。

悪魔が、幼児つまり物心のつかない小さな子供に近づくと子供は泣きだすものだ、小母さんはそんな話を前に聞いたことがあった。そこで小母さんは、男の足を注意深く眺めた。というのも、悪魔は気ままに形を変える（変身する）ことができるが、その一方の足はかならず奇形（きけい）であることも、小母さんは知っていたからだ。

ダンスを踊っている男の長ズボンのすそに叉（また）になった足を見たとき、小母さんの恐怖がどれほどであったか想像してもらいたい。小母さんがそのことを数人の若者に気づかせると、若者たちは一言も言わずすぐに家を出て、馬に乗ってフージュレの司祭

を迎えに全速力で立ち去った。デルヴァル村の司祭が不在だったからだ。

幸いに司祭は真夜中よりほんのわずか前にやってきた。司祭は袈裟(ストラ)を着て、聖水がいっぱい入った灌水器(かんすいき)をもっていた。踊っていた娘たちの驚きを尻目に、司祭はすぐに中に入り、手でジャンヌを抱いている見知らぬ男の方に歩み進み、聖水をふりかけた。悪魔は（というのはその男こそ悪魔だったからだ）、怒りと苦痛の叫びをあげ、それから片隅にうずくまった。

「あんたがたは、どんなふうにしてこの男の姿を消したいと思うかね」と司祭はいった。「風か、雨か、それとも煙にして消えてもらおうか」

「雨はいけねえよ」とだれかが叫んだ。「おれ、溺れてしまうから」

「風もだめですよ」と家を踊りの場所に提供していた小母さんが言った。「あたしの家が吹き飛んでしまうからね」

「では、煙になってもらうとしよう」と司祭は答えた。そして悪魔に聖水をふりかけると、悪魔はあとに硫黄(いおう)のような臭いを残して、煙突から煙になって消えていった。

話によれば、ジャンヌはさらに三回ダンスを踊ると、力つきてしまったという。

若死したこの娘の腕には、フージュレの司祭に聖水をふりかけられた折に悪魔が引掻いた爪のあとが残っていた。

フージュレの医者

グラン＝フージュレの住民は客をもてなすことをあまり好まず、御上(おかみ)に仕える役人が嫌いだったから、まして彼らのいうよそ者、つまり土地にきて住みつく見知らぬ人間を好まないのは、いわずと知れたことだった。いつだってそんな具合だった。

昔、ついぞ見覚えのない一人の青年がフージュレにやってきて、医者として住みついた。それは奇妙な訛(なまり)のある、背の高い金髪の青年だったが、家の中に引きこもって暮らしていて、だれとも知合いになろうとしなかった。

彼は、一階に二部屋、二階に二つの個室がある一軒の小さな家をすぐに借り受けた。冬になると、その青年の姿を見かけることはほとんどなかったが、夜中にずっと寝室の明りがともっているのが見えるのだった。夏には、ドイツ製の大きなパイプをくゆらし、教会の鐘楼の回りを飛ぶ燕(つばめ)を眺めながら、戸口のところで木のベンチに腰を下ろしていた。その視線は鳥から離れなかった。鳥は彼の心に遠い故郷の思い出を

呼び起すようだった。

たまたまだれかが青年に声をかけても、めったに返事をせず、まして人と言葉を交わすようなことは決してなかった。通りがかりの賑やかな場所よりも、わざわざ奥まった土地に埋もれた村を選んだことを、どう説明したらよいのか。それこそだれにも分からないことだったし、また思い切ってたずねることもできないことだった。

青年は一通の紹介状もたずさえてこなかったから、だれにも紹介されたことがなかった。主人よりも冷やかな召使が家事や料理を切盛りし、馬の世話をしていた。主人は、診療の用を足すのに馬をかわなければならないと思ったのだ。

ところが、用を足すといっても、彼が診療することはまずなかった。というのも、彼はあまり病人のもとに呼ばれなかったからだ。けれども、人々は彼のことを物知りで腕のいい医者だと噂していた。

その当時、フージュレには年老いた開業医もいた。この開業医は外科医の資格しかもっていなかったが、診療をほどこしていた。実は、この老人は刺絡しか行わず、下剤しか処方しなかったのだが、学のある医者に診せても死んでいたかもしれない多くの病人を直すには、それだけで充分だった。この老医者は、動物の方がわれわれより動物的でないと主張していた。

「犬を見るがいい」と彼はいうのだった。「病気にかかったと思ったら、犬は食べなくなり、寝ているではないか。もし人間が犬をまねたら、医者なしですませられるだろうに」

＊＊＊

若い医者は退屈で仕方がなく、気力も失せかけていた。そんなある晩のこと、石切場の落盤事故で片足を砕かれた職人を診療して、若い医者がごく遅い時刻に家へ戻る途中で、いまではすっかり開墾されているが、モレルの広い荒野を横切った。サント＝アンヌ＝シュール＝ヴィレーヌのコミューンにあるその荒野で、火のともったおびただしい数の小さなランプが眼に入った。ランプは互いに離れていくつかのグループを形づくっていた。青年は馬を止め、もっと注意深くその不思議な光景を観察した。物音ひとつ聞こえなかったのに、いつしか馬に乗った男が彼のわきにやってきていった。

「びっくりしているな、お若いの。あれがどういうことかをきみに説明したら、きみはもっと驚くだろう」

「あなたはだれです」

「そんなことはどうでもよい。あの光はみなこの土地の住民たちの霊魂なのだが、わたしときみの眼にしか見えない。里や村がこの周辺の聖堂区の中で配置されている通りに、霊魂はこの荒野に配置されているのだ。ランプには人々の名が刻まれ、光の強さの度合は人それぞれの生命力を示している。さらに、それぞれがあと何年、何か月、何日、何時間生きていられるかを知らせる表示もあるのだ」

「もう一度おたずねしますが、あなたはいったい、だれなのです」と医者はくり返した。

「きみに答えずにいることもできるのだがな。なぜなら、わたしはきみがなぜ故郷を棄てたか、その理由をたずねないのだから」そういって男が鋭い視線を投げかけたので、青年は身震いした。

「要するに、きみがそれほどわたしを知りたがる以上、わたしは魔王だと言っておこう。しかし、魔王といっても親切な悪魔なのだ。元気のないきみを見て同情し、きみの役に立ってあげようとやってきたのだ。

わたしのランプを使ってこの地方のあらゆる住民の寿命が分かれば、きみはたちまちにして金満家になれるだろう。いいかね、考えてみるがいい。死にかかった患者に

はきみが命を保証するし、余命いくばくもない気の毒な連中のことはきみの同業者に任せておくのだ。きみは昼も夜も休む暇がないだろう。
さあ、あそこを見たまえ、そう、あそこだ、小刻みにふるえるあの光は、いまにも息を引き取ろうとしているブレアレの居酒屋の主人なのだ。急に虚空(こくう)へ光が消えたろう。老人の魂がこの世を去ってしまったのだ」
一群の夜鳥が不気味な叫び声をあげながら、荒野の真中から舞い上がった。すばらしい光彩を放って輝くランプがいくつかあった。それは、まだ長い歳月を生きられる、力強くたくましい若者たちの魂だった。
若い医者は魔王にいった。「近所に住む人々の隣に自分のランプを探しているのですが、見つからないのです。どうしても見当らないのです」
「そうだ、きみはそれを見ることができない。きみの寿命をきみに教える権限はわたしにないのだ。他人の寿命を教えることはできるが、きみの寿命は教えられない。
このランプは、この荒野に立てば毎晩きみの眼に見えるはずだから、ここへやってきてランプを見るがいい」
「で、その代りにあなたは何を要求なさるのですか」医者はたずねた。
「なにも、いや、なにも要求しないに等しい。わたしを満足させてくれるために、き

みが診療を頼まれたすべての患者の欠点と悪癖をメモしてくれるだけでよい、ただし正確にだ」

「あなたはわたしにみじめな仕事をさせるのですね」

「断るのはきみの自由だ」

「いえ、お引受けします。わたしは急いで金持になる必要がありますから」

「それは結構。だが、約束だけは細心の注意を払って果すのだ。さもなければ、きみに不幸なことが起るだろう」

「きっと務めを果しましょう」

＊＊＊

医者が死にかけた貧乏人を生き返らせ、金持の治療を断ると、みんなは医者を名医だと考えた。じつに長いあいだ蔑んだあとで、こんどは彼に向かってありとあらゆるばかばかしいことがなされた。彼の召使ですら、この地方の権勢家たちの親切と好意の的になった。

医者の家には贈物があふれたが、医者は成功を収めたのに今までになくうかぬ顔をしている様子だった。

医者はけちになり、大嫌いなこの地方を早く去ることができるように金銀を貯めこんだ。モレルの荒野の夜の旅は、考えるだけでも彼をぞっとさせた。悪魔との出会いを思い出すと、恐怖で身の毛がよだつ思いがするのだった。

心がふさぎ込んで、つい彼は約束した通りに正確にメモをとることを忘れてしまった。いや、ひょっとして彼のランプの油が燃えつきたのだろうか。とにかくある晩、彼は自宅に戻らなかったのだ。

ちょうど冬だったので、一晩中雪が降っていた。雪が解けて、彼の死体ははりえにしだの茂みの下で牧童たちに発見された。不幸な医者は片手にひどく奇妙な形の、未知の金属製のランプをもっていた。

医者の召使はおそらく主人の財宝をもって行方をくらましたにちがいない。というのも、召使の姿は二度とフージュレでは見かけなくなったし、打ち棄てられた家には何ひとつ見つからなかったからだ。

十字架の護符

その日は美しいマリウッチャと領主のマテオの婚礼が行われることになっていた。四方八方から人々は駆けつけていた。というのも、花嫁となる娘は美しかったし、花婿となる騎士も美男子だったからだ。

祝宴の席の両側にはまた、資産家で有力者の縁者たちがずらりと並んでいた。客を迎える準備は万端とどこおりなく整えられていた。雪よりも白い一頭の若い雌牛、二頭の羊、十二匹の野兎、百羽以上のやまうずらが殺されたのだった。

騎馬行進用の馬も用意され、あとはミサにいくための紡錘竿を待つだけだった。

だが、ふいに、恐ろしい不吉な悲鳴が平野から聞こえた。

「サラセン人だ、サラセン人だ」

法螺貝のコロンボとペリーチョが谷間に響き、だれもが戦闘準備にかかった。

戦いは熾烈だった。だが、敵は多勢だったので、多くの愛国者を殺戮した。

哀れな、不幸なコルシカ島よ、ついに村々は焼き払われ、平野は荒され、娘たちは奴隷となって連れ去られた。

マリウッチャが涙に暮れていたヴィッツジアネッロの村にも、サラセン人がやってきた。

もう抵抗する者がいなかったので、彼らは勝手気ままに掠奪し、自分たちが持ち去れないものは傷つけたり壊したりした。

マリウッチャの美しさがサラセン人の首領の眼にとまった。そこで首領は自分の愛妾にしようと彼女をさらった。

哀れな娘がどんなに涙を流し、嘆き悲しんでも、その体以上に黒い蛮族の首領の心はみじんも憐みをもよおさなかった。

サラセン人たちは船に戻る途中で哀れなマテオに出会った。彼は敵に受けた傷のせいで辛うじて体を引きずって歩いていたが、死に場所を求めて一本の木の下で立ち止まった。

マテオは敵にさらわれた婚約者を見ると、いくらか力を取り戻した様子で、剣を半ば抜きかけて身を起したが、すぐによろめいてばったりと草の上に倒れた。

サラセン人たちはこの不幸な男には眼もくれなかった。もういくらも生きていられ

るはずがないからだった。で、彼らは構わず歩きつづけた。
「ああ、人でなしめ」と哀れなマテオはつぶやいた。「消えかかった命を賭けて戦うわけにもいかない。だが、奴らの手から彼女を取り戻してくれる者がいたら、この魂をくれてやってもいい」
　そのとき、悪魔が彼の前に姿を現わした。
「本心からそうおっしゃるのですね、マテオさま。もしあなたをもと通り健康にして差しあげ、明日は一人のサラセン人もここにいないようにして差しあげたら、あなたの魂をこのわたしにくださいますね」
「マリウッチャ、マリウッチャ」
「よろしい、あなたに婚約者を返して差しあげよう。その代りあなたの魂はいただきますぞ」
「あのひとを救ってくれ、そうすれば望みのものをなんでも取ってよい」
　サタンがマテオにふれると、マテオの傷はたちどころに癒（い）えた。
　それから、二人が木陰にいるその木を悪魔がゆすぶると、木の実が一つ落ちるごとに、堂々たる勇敢な騎士が一人ずつ立ち上がるのだった。
　たちまち騎士は千人以上にもなり、全員が結束してサラセン人と戦い、相手を完全

に壊滅させた。
もう一人の敵もいなくなると、マテオは戦友たちに感謝しようと後ろを振り向いたが、いるのはただマリウッチャ一人だった。
長い間その領地では喪に服した。多くの人々がこの戦いで死んだからだ。しかし悲しみも少しずつ和らいでいったので、マテオはもう一度、恋人との結婚について考えた。
村の教会の鐘がふたたび二人の婚姻を告げた。だれもがまた駆けつけた。ただ、人々は晴着の代りに喪服を着た。
結婚式が始まった。
そのとき、大ろうそくが鋭い輝きを放ち、同時に強い硫黄の臭いが教会の中に入り込んできた。
それから、マテオが最愛のマリウッチャの指に結婚指輪をはめようとしたとき、大地が揺れ、大ろうそくの火が残らずいっせいに消えた。そして悪魔が現われ、マテオの髪をつかむと、祭壇の回りを三度引きずり、生贄(いけにえ)を連れて不意に姿を消した。
居合わせた人々はだれもが恐怖のために石と化したようだった。ある者は、マテオが大罪を犯したのだといい、ほかの者は、マテオが魂を悪魔に売ったために悪魔がこ

の機会をとらえて彼をさらっていったのだといった。
マリウッチャは気を失って倒れ、大理石のように冷たくなり、死んでしまったように見えた。
すぐにみんなが彼女を取り囲み、考えられるかぎりの手当を惜しみなく施した。世にも敬虔な祈りが唱えられ、あれこれと非常に手をつくしたので、ようやく彼女は生き返った。
しかし彼女にとって、生きていることが重荷だった。マテオがいないのにどうして生きなければならないのか。不幸なこの女は絶望の淵に沈んでいた。
彼女の代母は仙女だったが、その仙女も遠方からやってきて慰めた。さっぱり効き目がなかった。
そこで仙女はマリウッチャにこういった。
「おまえは地獄までも夫を探しに行く勇気をお持ちかい。もしそうならば、泣くのはおよし。なぜなら、おまえは夫を救い出して、もっと長く彼と幸せに暮らすことができるのだから」
「マテオ、マテオ」
「さあ、ここに十字架がある。この護符のおかげで、おまえは何の不安もなく旅をす

ることができるだろう。
では、用心するがいい、途中でおまえに話しかけてくるどんな声にも返事をしないように気をつけるのだ。さもないと、おまえは即座に死ぬだろう」
マリウッチャは十字架を受け取ると、なくさないように懐ふかくしまい込んだ。そうして、地獄への道を行く代母のあとに従った。
三十日と三十夜も旅をしたあげくに、二人はマリウッチャの前にどんな人間もまだ見たことのない森のはずれにたどり着いた。
すると仙女はいった。
「これ以上遠くへ案内するわけにはいかない。行くがいい、そしてかならずわたしの忠告を思い出しなさい」
やさしい妻は、ほんの申し分けほどに小道が通っている森の中をずんずん歩いていった。
この森には、草も花も、一羽の鳥すらいなかった。それでいてあらゆる種類の声が聞こえてくるのだった。
そんな声の一つがマリウッチャにいった。
「美しい人、どこへ行くの。わたしたちと一緒においで、さあ、おいで。そうすれ

ば、青空よりも汚れのない泉の水を飲む鳥や、あなたの手をなめにやってきてどこへでも好きなところへ案内してくれるけものたちにすぐ会える」
マリウッチャは答えなかった。
「そんなに急いで行かないで。わたしたちと一緒においで。そうすれば、あなたは仙女の女王となり、扉がひとりでに開く魔法の宮殿に住めるでしょう。いらっしゃいな、そうすれば、三十頭の翼をもつ馬に曳かれた金の四輪馬車が手に入る」
マリウッチャは答えなかった。
すると、妖精の一人が彼女の代母の姿と声を真似た。
「いいかい、何もこわがることはないのだよ。わたしはおまえを助けにきたのだから、わたしとなら話してもかまわない」
しかし、マリウッチャはこうした策略には用心していたので、黙ったままでいた。
長い間、じつに長い間、彼女は歩いた。
ようやく広い河の岸辺に着いたときには、休息しないわけにはいかなかった。
おお、聖母さま、いかに多くの男や女や子供たちがこの波にさらわれてそこにいたことか。
そういった不幸な人々は残らず地獄へいったのだ。

その河の反対側の岸辺では、あらゆる種類の醜悪な魔女たちが踊っていた。しかし若い娘を見ると、たちまち姿を消して、青色や金色の絹の衣裳をまとったすてきな女に変身した。

その中の一人がこう話した。

「ねえ、どうしてその岸辺で足をとめているの。こちら側へいらっしゃい。一緒に踊りましょう。わたしたちが迎えに行きましょうか。愛らしい人、返事をしてちょうだい」

そこでマリウッチャが十字架を取り出して河の水にふれると、水がさっと二分されて彼女は河を渡った。

彼女がしばらくてくてく歩いていくと、黒一色の広大な宮殿に着いた。

扉はどれも青銅で作られていて、なかでもひときわ大きな扉には次のような文句が書かれてあった。

《この扉の敷居は決して二度とは越えられぬ》

そのとき、昼間は死んでいる地獄に堕ちた人々が、マリウッチャが歩いたのとは反対側の道からやってくるのが見えた。

「なんということだろう、あの人たち全部が呪われているなんて」と彼女は思った。

それから彼女はその不幸なすべての人々に混じって、地獄へ入っていった。
そこには、ぞっとするようなことがいくつもあった。幾人もの男が大きな竈の中で焼かれ、子供たちは大きなフライパンで焼かれ、そうして女たちはその乳房を嚙む蛇に乳を与えているのだった。
哀れなマリウッチャは四方八方にいとしい夫の姿を探したが、悲しいことにどこにも見つからなかった。
しかし、自分の縁者や友人でも、それと見分けのつかなかった人たちがどんなにたくさんいたことか。そこに彼女の叔父の神父がいたと思うと、もっと遠くに彼女の従妹、ここには領地の領主といったように、ほかにも多くの知った人々がいた。
しかしそれ以上に彼女がぎょっとしたのは、サラセン人たちが受けている責苦を見たことだった。
彼らは重い鎖につながれ、禿鷹が彼らの心臓を引き裂きにやってくるのだが、心臓はかならずもとの状態に戻るのだ。
ついにマリウッチャは、煮えたぎる熱湯の雨がたえず降りつづく場所にやってきた。
その場所で、はじめて彼女は最愛のマテオを見つけ出した。
悲しいことに、マテオを見分けられるのは彼女ひとりだった。というのも、彼はひ

どく変っていたからだ。
　妻を見ると、マテオは震えた。
「何と、おまえではないか。いったいどんな罪を犯したのだ、わたしが知っていたときにはあんなにも汚れのなかったおまえが」
　マリウッチャは夫に答えなかった。彼女は自分のあとから付いてきてくれという仕草をした。
「でも、わたしが鎖につながれていることが分からないのか。ああ、どうしておまえと一緒に来てほしいと言うのかね」
　マリウッチャがその不幸な男の手足に巻きつけてある鎖に十字架をふれると、たちまち鎖は切れた。彼女は夫の体を引きずりながら、七つの頭をもつ龍に守られた扉へ二人してたどりついた。
　彼らの姿を見ると、怪獣は炎を吐き、恐ろしい吼え声を発した。
　マリウッチャはこわくなった。思わず彼女は夫の腕の中にとび込んでいった。
「ああ、助けて、助けてちょうだい」
　彼女が口を開いたので、魔力も切れた。
　たちまち猛り狂った嵐が二人の不幸な人間を襲い、二人は安らぎも休息もない、永

遠の渦巻にまき込まれてしまった。
　この貞節な夫婦はけっして救われることはあるまい。というのも、そのためには、だれかもう一人の若い娘が二人を迎えに地獄へ来てくれなければならないが、悲しいかな、地獄の門は餌食（えじき）を外に逃げさせるためには決して開かないからだ。

妖術師見習

ある晩、ピエール・アタンはフロットマンヴィルからグレヴィルへ帰っていた。雨は降っていなかったが、雲が低く垂れこめていて、月明りはなかった。

フロットマンヴィルの荒野の丘の麓にやってくると、突然上の方で大きな音が聞こえた。それはまるでさまざまなけものが争いあっているようだった。狐や犬いたちやその類(たぐい)の動物がいた。全速で疾駆する馬の足音のようなものも聞こえた。彼は恐ろしかったが、近づいてみた。不意に音が止んだ。もう何も見えず、何の音も聞こえなかった。彼はもとの場所に戻り、歩きつづけた。彼はあまり落ち着いてはいなかった。噂によれば、この荒野のはずれでは炎を吐き出す皮の剝げた雄牛を見かけることもしばしばというではないか。

それに、彼は谷を通らなければならなかった。人の話では、道の上に高い垣根のようなものを作っているぶなの木の間から、口から炎を出す仔牛が頭を出し、ぞっとす

るような唸り声をあげることもあるそうだ。
彼は荒野のはずれを通りすぎたが、何も見えなかった。いつの間にか谷の一部を渡り、真中を流れる小川の中を歩いていた。彼は危険を脱したと思いかけた。そのとき何かが木の枝を伝わって落ちてくるような物音が木々のあいだから聞こえた。空に稲妻が走ったので、彼は少しほっとした。こわごわ近づいて、いま落ちてきたものをのぞいてみた。なんとそれは素裸の男だった。
「そこで何をしているのだね」
「ああ、ピエール・アタン、おまえか。おれを売らないでくれ、頼む」と素裸の男は言った。
「こんな真夜中に、何をしてるんだ」アタンはいった。彼は相手の声に聞覚えがあった。
「猟犬はどこにいる」
「お願いだ、ピエール、ここでおまえがぼくに会ったことはだれにも言わないでくれ」
「でも、どうしてここにいるのだ。察するところ、よいことをしに来たのではないな」
「よくも悪くもないことさ、それは間違いない。しかしこのことをだれにも言わないと誓ってくれ」

「その前にまず、おまえがここにやって来たのはよからぬ思惑があってではないと誓うがいい」
「誓うよ」
「よし、では、おまえの名は人にいうまい。だが、われわれの最初の祖先アダムの身なりをして、その木の間でなにをしようとしていたのか言うがいい」
「いいとも、夜宴に出かけるところだったのさ、おまえには言わなければならないから言うが、荒野の高地で催される悪魔の夜宴なのだ。おまえは向こうから来たな。通りがかりになにか物音が聞こえなかったか」
「ああ、喧嘩をするけものたちが立てているような馬鹿に騒々しい音が聞こえた」
「それだ。夜宴へ行くのにけものに姿を変える者たちがいるのだ。連中の中には、おまえの知っている者もいる。その名を言ったら、おまえはさぞ驚くだろう」
「で、そこでなにをするのだ」
「踊ったり、歌ったり、遊んだり、酒を飲んだりするのさ。きれいな女の子もいるから、面白い遊びを考える。おれは人から聞いたことを言っているだけだ。そこに行ったことはないからな。きょう、はじめてそこに行くところだったのだ」
「でも、悪魔も来るのか」

「もちろん。だがだれにも害は加えない。そこでは大いに気晴らしをするらしい」
「それにしても、おまえはなぜ素裸になっているのだ」
「これが制服なのさ。虫のように素裸にならなければならないのだ。そうでないと、飛んでいけないからな」
「ここへは飛んできたのか」
「つまり、飛ぼうとしたのさ。だが、だめだった。飛び上がりたかったのだが、木の枝に落ちたというわけだ。分かるか、飛ぶには、油脂を体に塗らなければならないのだ」
「どんな油脂だ」
「むろん、人からもらったものさ」
「だれからもらった」
「それは言えない。言わないと約束したからな。なんでも洗礼を受けずに死んだ子供の油脂らしい。おれにはなにも分からないのだ。森に着いて、おれは綱を引張り、そう、この近くだ、このぶなの木の生垣に隠しておいたのだが、探してみよう。そのあとでおれは体に油脂をこすりつけた。《木の葉の上を垂直に》と叫んで跳ぶのだと教えられた」

「それからどうした」
「それから、空中に跳んだ。だが、呪文を間違えてしまったのだ。《木の葉の下を垂直に》と叫んだので、木の葉の上の代りに下の枝に落ちてしまった」
「で、もうおまえは舞い上がれないのか」
「だめだ。もう油脂がないから。油脂がなくなれば、これ以上進むことはできないのさ。今晩はおしまいだ」
「おまえは自分が浅ましい罪を犯したことが分からないのか。魔術師が奇跡を行う学者であることはおれにも理解できる。彼らは自然の秘密を知っているのだから。だが、妖術師にまで身を堕とすのは理解できない。なぜなら、おまえは悪魔の夜宴で奴らの尻に接吻するのだから」
「何のことやら分からないな」
「おまえほどに分別があり賢い人間が、どうしてそんなことができるのだ」
　妖術師見習は、自分が脱ぎ捨てたところに衣服を見つけた。ピエール・アタンは彼を自宅に連れ帰り、二人そろって眠った。奇妙なことに、翌朝、妖術師見習の男は自分で一晩中眠っていたと言い張り、何ひとつ思い出せないというのだった。

領　主

†

＝フルート＝

昔、二人の息子をもつ王がいた。ある朝、夜明けの時刻に、王は息子たちを部屋に呼びよせていった。
「わたしも年老いたので、もう王でいるのがいやになった。わたしは森に、黄金の小枝とオレンジの実を隠しておいた。おまえたちのうちでそれを見つけたものが、わたしの後継（あとつぎ）となるのだ」
二人の兄弟は遠く遠く、はるか遠くへ、森を横切って黄金の小枝とオレンジの実を探しに出かけた。二人は長い間、じつに長い間探してみたが、何ひとつ見つからなかった。
日が沈んだとき、二人の兄弟はいった。
「そろそろ夜だ。もう探すのは無理だろう。父の館（やかた）に戻らなければ。でも、何ひとつ見つからなかったと言えば、父上はどうなさるだろう」

二人は館の方へと戻っていった。しかし、とぼとぼと戻っていると、二人の兄弟のうちの弟の方が、柏の木のくぼみに黄金の小枝とオレンジの実を見つけた。

そのとき、兄はなにをしただろう。弟を剣の一突きで刺し殺し、柏の木のくぼみに弟の死体を隠したのだった。そしてなにくわぬ顔で、王のもとへ行って黄金の小枝とオレンジの実を差しだした。

「息子よ、弟をどこに置き去りにしてきたのか」と王はいった。

「父上、弟は野獣どもの餌食（えじき）になってしまったのです」

そこで、王は兄を後継にし、自分の代りに王とならせて、太陽のように美しい王女と結婚させた。

この王女は一人の姫を産んだ。姫が七歳になりもの心のついたころ、森に散歩に出かけた。それは昔、姫の祖父が黄金の小枝とオレンジの実を隠した森だった。柏の木のくぼみに、姫は雪のように白い白骨を見つけた。姫がそれでフルートを作ってもらうと、フルートは歌いだした。

「かわいい姫よ、わたしを吹くがよい。そうだ、あなたなら上手に吹けるだろう。森へわたしは出かけた、黄金の小枝とオレンジの実を探すために。兄はわたしからそれを奪い、わたしを殺し、そうして柏の木のくぼみにわたしを隠したのだ」

姫は館に戻った。姫の祖父と父は食卓についていた。
年老いた王がフルートを吹くと、フルートはこう歌いだした。
「父上よ、わたしを吹いてください。そうですとも、あなたはみごとに吹くことができます。森へわたしは出かけました、黄金の小枝とオレンジの実を探すために。兄はわたしからそれを奪い、わたしを殺し、そうして柏の木のくぼみにわたしを隠したのです」
新王がフルートを吹くと、フルートは歌いだした。
「兄よ、わたしを吹くがよい。そうとも、あなたなら上手に吹くことができます。あなたと一緒に、森へわたしは出かけました、黄金の小枝とオレンジの実を探すために。あなたはわたしからそれを奪い、わたしを殺し、そうして柏の木のくぼみにわたしを隠したのだ」

青ひげ

昔、オーヴェルニュの山上に、いくつもの大きな櫓(やぐら)を設けたみごとな城があった。跳橋(はね)を通らなければ中に入れず、その上に跳橋は素早く吊(つ)り上げられるので、この地方では城内に入った者のだれ一人として出てきたためしがないともっぱら噂されていた。世間ではその城を呪いの城と呼んでいた。

この地方の人々は城の近くを通らないようにし、それにまた城の領主にうっかり出会うのをこわがっていた。領主というのはたいそうな力持の大男で、たいそう邪悪な男だったが、城を出るときにはかならず鉄製の鎧(よろい)を身にまとい、黒馬に打ちまたがっているのだった。彼は青い光沢のあるふさふさしたひげを生やしていた。そのため、彼は青ひげとしか呼ばれなかった。彼はいつも一人きりで、彼の友人らしい人間をついぞ見かけたことがなかった。

女たちはとりわけ彼に出会うことを恐れていた。それというのも、この男は自分の

気に入った女がいれば見境なく城につれ去り、つれ去られたら最後、女は二度と村には戻らないと噂されていたからだった。

ところで、ある日のこと、バリエ爺さんの娘の美しいカトリーヌは森に枯枝を拾いにでかけた。その日、娘はとてもうれしかった。その土地でだれよりも美男子の、だれよりも心根のやさしい若者と婚約したばかりだったからだ。二人の婚礼は取入れのあと行われるはずだった。娘は歌をうたいながら、森のすぐ手前をトロワ＝ソリテールの小道まで、邪悪な青ひげのことなどほとんど考えもせず歩いていった。枯枝の束を作り終えて、そろそろ父親の家に戻る仕度にかかっていると、突然、目の前に青ひげが現われた。青ひげは娘をつかまえ、馬上の自分の前に乗せると、急いで城に帰った。彼は娘を、絹や金銀で蔽（おお）われた家具のある部屋につれていった。

「これは全部おまえのものだよ、カトリーヌ」と青ひげは娘にいった。「なぜなら、三日後にはおまえはわたしの妻となるのだから。婚礼の仕度をするがいい。おまえの晴着を作る布地はここにある。何ひとつとして使い惜しむことはない。わたしたちの婚礼の日にはおまえに美しい花嫁になってもらいたいからな。城内の礼拝堂にいって祈るのはかまわないが、逃げだそうなどとしてはならない。そんなことはむだ骨というものだ。跳橋は上がっているし、櫓は高くそびえ、それに堀も深い。それ、犬の吠

えるのが聞こえるだろう。あの犬がおまえを襲ったら、まちがいなくおまえをむさぼり食うはずだ。その上、おまえは父親の家からうんと遠くにいるのだから、一週間かかっても家にたどり着くことはできないはずだ。だから、おまえが疲れ果てて死ぬか、そうでなくとも、わたしの方でおまえを見つけ出して殺せるだけの時間の余裕があろうというものだ」

哀れな娘が父親のもとへ、婚約者のそばに戻してくれるよう頼んでみたが、すべては空しかった。青ひげは、これから遠くへでかけて司祭を探し、その司祭に自分たちの結婚を取り行わせたあと殺してしまうのだと言い残すと、娘を置き去りにしていった。

カトリーヌはすっかり怯えていた。というのも彼女は、青ひげがいく人かの妻を迎えては婚礼の数日あとにどの妻も殺してしまったという話を、何度も聞いたことがあったからだ。娘がさめざめと泣いたのも当然だった。あれほど愛する婚約者にもう二度と会うこともあるまい。

「お祈りをして、結婚ではなく死出の旅の用意をしよう」と娘はいった。彼女は皓々と光る礼拝堂にいった。大ろうそくには残らず火がともされていたが、祭壇の前で三つの大きな石つまり三つの墓が目に入ると、さすがに娘はぎょっとして、ひどく怯え

た。

カトリーヌは跪き、祈り始めた。けれどもその祈りは涙と嗚咽で途切れがちになるのだった。不意に「可哀そうなカトリーヌ！」という声が聞こえた。すると、すぐにまた二番目の声が「可哀そうなカトリーヌ！」と言い、三番目の声がひどく悲しげに「可哀そうなカトリーヌ！」とくり返した。同時に三つの墓を蔽っていた石が持ち上がった。

「わたしのことをそんなに同情してくださるなんて、あなたがたはいったいだれですの」と娘はいった。

死衣をまとった三人の女が墓から出てきて娘に答えた。

「わたしたちは青ひげに殺された三人の妻です。もしあなたが首尾よく逃げ出せなければ、あなたが四人目の妻になるでしょう」

「でも、どうして逃げることができるでしょう」とカトリーヌはいった。「跳橋は吊り上げられているし、櫓は高くそびえ、それに堀も深く、あの犬がわたしをむさぼり食うでしょう。父のもとへ行く道にしても、とてもとても長い道のりですから、一週間かかってもたどり着くことはできますまい」

「青ひげがわたしを締め殺したこの綱をお取り」と最初の妻がいった。「そうして、

城壁にそって滑り下りるがいい」
「青ひげがわたしを毒殺したときのこの毒薬をお取り」と二番目の妻がいった。「犬にこれを投げ与えれば、犬はむさぼり食ってばったり息絶えるでしょう」
「青ひげがわたしを殴り殺したときのこの太い棒をお取り」と三人目の妻がいった。
「長い旅をするのにこれで体を支えるがいい」
そうして三人は口をそろえてこういい足した。
「お急ぎ。青ひげが戻ってきたら、あなたは殺されるでしょうから。幸運を祈っているわ、カトリーヌ。さようなら」
そう言って、三人の妻はそれぞれの墓にまた入った。
カトリーヌは毒薬と綱と棒をつかんだ。中庭で彼女は、自分に襲いかかろうとする犬に毒薬を投げた。犬はそれをむさぼり食い、即死した。娘は綱を結びつけ、城壁にそって滑り下りた。
野原に下りるが早いか、カトリーヌは駆け出した。それほど、彼女は呪いの城から遠ざかろうと気がはやっていたのだ。しかし、やがて疲れてきたので、棒を杖代りにした。娘は長い道のりをてくてく歩いたあげくに、父親の家に戻った。父親は炉端で泣いていた。というのも、てっきり娘は狼に食われたものと思っていたからだ。

ひと月後に、カトリーヌは婚約者と結婚した。二人はたいそう幸せで、たくさんの子供をもうけた。彼女は二度と森へは行かなかった。しかし彼女が聞き知ったところによると、青ひげは城に戻って娘がいないので腹を立て、娘を城につれ戻してうんと苦しめたあとで殺すつもりで、娘を追跡したという。

三か月もの間、青ひげはその地方一帯を走り回り、いたるところ娘を探したが空しかった。ついにある日、青ひげの死体が見つかった。それはちょうど、青ひげがカトリーヌに出会った場所だった。青ひげを殺したのは妖怪狼（ルー＝ガルー）だという噂だった。それからずっと後になっても、トロワ＝ソリテールの小道では、夜になると唸（うな）り声とすすり泣きが聞こえた。その地方の住民たちは、雌鶏（めんどり）が鶏小屋にいるころ、つまり日暮れを過ぎると決してそこを通らなかった。

青ひげの城があった場所には、長い間、妖怪や幽霊が出没した。それは邪悪な領主に殺された女たちや司祭たちだと噂された。

四季精進日の夜

昔、竃のように黒く、道のように古く老いぼれた未婚の女がいた。女は年老いるほど、それだけ自分が若く美しくなっていくと思い込んでいた。この女には、バルテルミーという名の召使がいた。二人そろって森の真中にある大きな城に住んでいたが、その城には蝙蝠やみみずくが群がっていた。けれども、この老嬢は地下の穴倉にスペイン金貨の詰まった樽を七つも持っていた。毎朝、彼女は朝日に当ててその金貨を乾かすのだった。

ある朝、いつものように彼女が仕事に精を出していると、黒馬に乗った一人の美しい貴族がたまたま通りかかった。

「こんにちは、お嬢さん。何をなさっていらっしゃるのですか」

「美しい殿、亡父の資産を朝日で乾かしているのです」

「お嬢さん、みごとな資産ですな。しかし、娘さんのあなたはそれ以上にお美しい。

わたしを夫にしてはもらえませんか」
「美しい殿、お引き取りください。どうかお引き取りください。そして精進日の夜にもう一度わたしを迎えにきてください」
一年後の真夜中に、美しい貴族は城の門を叩いた。
「もし、お嬢さん、起きてください。わたしたちが結婚する時がきました」
「美しい殿、お天気はいかが」
「お嬢さん、外はひどいどしゃ降りです」
「美しい殿、お引き取りください。まだ結婚するわけにはまいりません」
また一年が過ぎて真夜中に、美しい貴族はまたも城の門を叩いた。
「もし、お嬢さん、起きてください。結婚する時がきました」
「美しい殿、お天気はいかが」
「お嬢さん、外はひどいどしゃ降りの雨。雷鳴の轟きは耳をつんざくばかり」
「美しい殿、お引き取りください。まだ結婚するわけにはまいりません」
また一年が過ぎて真夜中に、美しい貴族はまたも城の門を叩いた。
「もし、お嬢さん、起きてください。結婚する時がきました」
「美しい殿、お天気はいかが」

「お嬢さん、外はひどいどしゃ降りの雨。雷鳴の轟きは耳をつんざくばかり。雄牛の角も折れよと烈風が吹き荒れています」
「美しい殿、お引きください。まだ結婚するわけにはまいりません」
また一年が過ぎて真夜中に、美しい貴族はまたも城の門を叩いた。
「もし、お嬢さん、起きてください。結婚する時がきました」
「美しい殿、お天気はいかが」
「お嬢さん、外はひどいどしゃ降りの雨。雷鳴の轟きは耳をつんざくばかり。雄牛の角も折れよと烈風が吹き荒れ、拳ほどにも大きな雹が所狭しと降っています」
「美しい殿、これこそ精進日の夜。急いで結婚せねばなりません。これ、バルテルミー、起きるのだ。おまえの白い雌馬に鞍をおき、馬勒をつけよ」
一時間後に、花嫁衣裳の老嬢とバルテルミーと美しい貴族は、馬を駆って森を横切ろうとした。雨はどしゃ降り、耳をつんざくほどに轟く雷鳴、風は雄牛の角も折れよと吹きすさみ、拳ほどにも大きな雹が所狭しと降っていた。

《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭打て、鞭を、
おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》

「はい、お嬢さま」

《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》

「バルテルミー、何とすてきな天気だろう」

「はい、お嬢さま」

《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》

「バルテルミー、見えるか、森のあの明りが」

「はい、お嬢さま。あれは、あっしたちを追ってくる狼の群れで。奴らの眼は闇夜に光ります」

《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》
「いいえ、ちがう、バルテルミー。美しい殿がわたしのために飾らせた照明だ。なんと殿はお金持、なんとおやさしい殿の思いやり」
「はい、お嬢さま」
《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》
「バルテルミー、聞こえるか、森に響くあの叫び」
「はい、お嬢さま。あれは飢えて吼える狼なんで。お気をつけなすって」
《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》

「いいえ、ちがう、バルテルミー。美しい殿がわたしのために歌わせる歌声だ。なんと殿はお金持、なんとおやさしい殿の思いやり」

《それ、行け、バルテルミー、鞭打て、鞭を、
　おまえの雌馬に鞭打て、鞭を》

そのとき、狼が老嬢とその馬に襲いかかった。バルテルミーは剣を抜いたが、美しい殿が押しとどめた。

「バルテルミーよ、あのけだものどもに好きなだけ食べさせるのだ。今後のおまえに不自由な思いはさせぬ」

狼の群れが満腹して去ると、美しい貴族はいった。

「バルテルミーよ、馬を降りて、老婆と馬の体の何が残っているか見るのだ」

「お殿さま、老婆は金の片脚を残しておいでで。雌馬の奴は金の蹄鉄(ていてつ)のほかにダイヤモンドのびょうを残していますぜ」

「バルテルミーよ、それはみんなおまえのものだ。早く拾うがいい。そして出かけよう」

二人は老嬢の城に戻り、そこで豊かに、幸せに暮らした。

妖怪狼(ルー＝ガルー)になった領主

ロワール河はその辺りではまだ細い小川でしかないが、この川がくねくねと曲って麓を流れている丘の頂上に、モンシュック城の廃墟がある。この城のくすんだ塔は、昔は二十里四方を見下ろしていたのだ。

モンシュックの領主たちについて、とりわけ彼らが犯した残虐行為や農民に対する彼らの非情さについては、今なお語り草になっている。農民は代々の領主、ことに最後の領主を思い出すと思わず身震いする。というのも、この領主はその数々の罪の罰を受けて、妖怪の野獣に変身させられたからなのだ。とにかく、ずいぶん長い間、爺さんのそのまた爺さんが話したころほどに遠い昔から、老婆たちが夕食後の集(つど)いで話して聞かせていたことは、こんな話だった。

この領主は旅人や商人を脅(おびや)かして金品を奪い、農民を殴り、理由もなく、みせしめだと称して彼らを吊(つ)るし、時には女子供を的(まと)にして面白がった。金持だと睨(にら)んだ相手

の足を火あぶりにしたり、若い娘たちをさらって殉教者に仕立て上げたりもした。その大胆不敵さと残忍非道ぶりは、自分より力の弱い貴族に対してすらとどまるところがなかった。近在の貴族の家族（この家族は今もこの地方に住んでいる）の美しい娘をさらい、髪の毛をつかんで吊るし、娘の抵抗を罰するのだと言って、ゆっくり時間をかけて苦しめ抜いて殺した。

ある日、この地方の住民たちは、モンシュック男爵がいなくなったことを知った。しかし同時に、この土地の人々の間で不思議なある動物について漠然とした噂が広がり始めた。その動物は、仕事に手間取って帰りの遅れた旅人を襲い、家畜に飛びかかって大量に殺しまくったというのだ。

やがて、多くの人々がその動物を見たと言いだした。それは狼より大きな動物で、眼から稲妻のような光を放ち、口からは炎と煙を吐き出していた。そいつは風のように速く遠く離れた場所を駆けめぐるので、数里離れたところにいても同時に姿が見えるのだった。たちまちのうちにこのけものは、人間や動物を食いつくし、とりわけ女子供をしつこく追い回し、家畜の番をしていた若い娘たちをさらって、この地方を荒廃させた。

地方の人々は土地からこの厄病神（やくびょう）を追い払うために、九日祈禱やさまざまな祈りに

すがった。猟師たちはこの超自然的な相手には弾丸も通じないということを知っていたので、だれ一人として妖怪に立ち向かっていく者もいなかった。そのため、何年もの間この恐ろしいけものはこの地方を荒し回った。

この動物の気に入りの場所はヴルーソットの森という森の中央の四つ辻だった。そこには、今でもこの土地でラ・クレー＝デ＝リュナと呼ばれる二本の大きな街道が通っている。問題のけだものはそこで旅人や帰りの遅れた農民を待ち伏せていたのだ。

大胆に森に入り込む樵夫(きこり)たちは、木の下に散らばっている子供の手足を見つけることがあった。そしてこの地方の住民たちの間では、生き物の肉のかけらとか、首や腕や衣服や子供の片足やらが見つかったのは森の中のあの空地やこの四つ辻だったといえるほどに、伝説はあざやかにまだ記憶に残っている。今でも、妖怪に苦しめられた家の名が口に出されるのだ。

ところで、ある夜のこと、仕事を終えて家路についていた一人の老樵夫が、自分の住む小屋の方で鋭い悲鳴を聞いた。彼が急いで駆けつけてみると、自分の娘が怪獣につかまり、怪獣は娘をつれ去ろうとしていた。樵夫は跳びかかって、斧の一撃でけものの腰を打ち砕き、重傷を負わせた。

ところで伝説によれば、この怪獣がもたらした被害とモンシュック男爵の残虐行為

とはほぼ同じ性質であり、妖怪狼（ルー＝ガルー）だったそのけものは傷つくと、にわかに男爵その人に変り、消え入るような声で樵夫にこう言ったという。

「わたしに一撃を加えてくれて礼を言う。それというのも、わたしは自分の犯した罪の罰に、永久にこの姿でさまようべく呪われていたからだ。自由の身になるには、だれかキリスト教徒が手を下してわたしの血を流してくれる必要があった」

こう言って、彼は息絶えた。

しかし、信仰をもたない人々、自由思想家、ユグノたちは、樵夫に一撃を加えられた妖怪狼というのも、つまるところは力と大胆不敵さにおいて際立った一匹の老いた狼でしかなかったのだ、しかもこの狼の豪胆さは大革命直前の飢饉によって引き起されたものにすぎないと言っている。

不信心な領主

ベル＝ヴィル（美しい町の意）城と呼ばれる古い館（やかた）に、昔、身分が高く権勢を誇る領主が住んでいた。この領主はドール教会の保護者としてたいへんな特権をほしいままにしていた。司祭は領主に聖水と香を捧げるばかりでなく、このブーシャルドさまのご到着を待たなければミサを始めてはならなかった。ところがこの領主は、みだりに領主権を行使することもしばしばで、非常に遅れてきたり気まぐれな時間にやってきたりするのだった。その上、老いぼれ司祭の仕事は断食することであり、土百姓などは目をくれるだけの値打ちもなく、善良な神様はどうかといえば、待たせておいても一向に退屈なさらない、などと言い張った。

ある日のこと、ベル＝ヴィルの領主がいつもの限度とわがままさ加減をはるかに越えたので、司祭はてっきり城の主人が来ないものと思い、ミサを始めた。突如、大きなざわめきと罵（のの）りと脅迫が聞こえた。恐ろしいブーシャルドが、予期しなかったほど

に猛り狂い、教会へ急ぎ足でやって来るのだった。
彼は、狼狽して打ち震えている群衆をかき分け、自分の通る道を明けさせると、祭壇へ突進し、聖なる供儀（くぎ）を捧げはじめた司祭を短刀で刺し殺した。老司祭の血は聖なるパンと聖盃にはねとんだという。
この恐ろしい犯罪が罰されずにすむわけがなかった。突如、それも同時に、一筋の稲妻が雲を引き裂き、雷が炸裂（さくれつ）するとともに、神殿泥棒へリオドロスの生まれ変りのこの男に落雷し、その体を焼きつくして灰にしてしまった。不思議なことに、このように雷が大罪人を粉砕したのは、一月の公現節（くげんせつ）の日だった。
これで事が終ったのではなかった。というのも、教会を出てみると、天の炎に焼きつくされたあの不敬な人非人の城が跡形（あとかた）もなく消え去っていたからだ。かなり傑作な彫刻がほどこされていた城門を除けば、何ひとつ容赦されていなかった。
城門の彫刻は、あの邪悪な領主の娘が贖罪（しょくざい）を祈願してドール教会に運んだが、それは今も残っている。

『神罰』

グレヴィルの村には、海へ注ぐ小川がそれぞれに流れている三つの谷がある。二つの谷の間には高地があって、海を見下ろす絶壁となって終る。

シェルブールの方から来ると、最初に地形の凹んだところがエビランの谷で、昔は妖精の気に入りの場所だった。

二番目の凹みはカテの谷で、サント＝コロンブの洞窟の付近にまで達している。

三番目がヴァル＝フェランで、ドゥエ＝デュ＝ムーランという所で海に接している。この最後の谷がもっとも森林が多く、またもっとも未開の谷なのだ。そこには伝説も絶えない。

この谷は深い。東側の山の中腹に、巨木が屹立（きつりつ）する中に人家がぽつんと建っている。その背後と脇に急勾配の庭と畑があり、谷に水車小屋がある。

それはまったく絵のように美しい景色だが、しかし世間からすっかり孤絶してもい

る。そこからいちばん近い家ですら、千メートルも離れているのだ。水車が動いて、上から落ちる水が大きな音を立てて車を回すときには、どんなに大声で喚(わめ)いても聞きとれないにちがいない。

この土地にやってきて住みついたド・リクメ氏という人の身に起ったことがまさにそれで、時代は十八世紀も中ごろのことだった。彼は斧で殴り殺され、しかもその同じ斧が水車小屋で粉ひきを殺害するのにも使われた。それは真昼の惨劇だった。みんなは野良仕事をしていた。物音を聞いた者はだれもいなかった。いや、少なくとも、物音を聞きつけ、強盗殺人者の姿を見た者がいたのに、だれひとりとして口をつぐんでひと言も語らなかったのだ。

困り果てた末に、謎の犯罪をあばくのにしばしば用いて効果をあげていたある方法に頼ることになった。

日曜日に、この地方のすべての教会で、証言命令書が説教壇から読み上げられた。証言命令書には、事実が詳しく述べられていて、犯罪の主謀者や犠牲者やあるいは目撃者に対して自分の知っていることを申し述べるよう神の名において勧告し、これに背く者は罰され、重罪破門を蒙ることになると記されていた。

この証言命令書は、信者たちを恐怖で震え上がらせるにふさわしい手の込んだやり

方で、日曜日ごとに三週つづけて読み上げられた。三度目の朗読が終ると、司祭は犯罪の主謀者たちに最後のおごそかな勧告を行ったあと、手に持っていた大ろうそくを地面に投げ棄て、その上を歩きながら火を消そうとした。

「すべては終った。破門する。犯罪の主謀者、申し立てをしなかった目撃者は、教会から放逐されるものとする」と司祭は言った。

司祭がこの破門を申し渡したとき、グレヴィルには深刻な恐怖がみなぎった。だが、だれひとりとして身動きもしなかった。殺人者たちは教会にいなかったのだ。けれども聴衆席には、犯罪にこそ加担していなかったが、心ならずも目撃者になったある男がいたのだった。もしこの男を眺めていたら、このときの男の蒼ざめた顔色から真実を見抜くこともできただろう。だが、だれもこの男を見なかった。で、男は教会を出ると落着きを取り戻し、他人の注意を惹くようなことはしなかった。

この男はグリオミノという名の農場の召使だった。彼は小麦の中に寝床をこしらえ、いつもそこで寝ていた。

ある夜（それはクリスマスの夜で、動物たちが家畜小屋で膝を曲げて眠るころ、真夜中のミサの最中だった）、この召使が眠っていると、突然、背中に何やら重いものが飛びかかってきたような気がした。彼は立ち上がり、戸を開けると、不意に、自分

沼や谷や湿地や茨ややぶを突っ切って走った。止まることもできず、自分で進む方向を定めることもできないまま、ある逆らいがたい力に駆り立てられて前へ進んでいった。四つ辻にやってきたとき、鞭で七回もしたたかに打ちのめされたような気がした。四つ辻にくるたびにそんな感じがした。しかもそれでいてだれの姿も見えなかった。眼に見えない敵が彼を殴るのだった。

男は何人かの顔見知りの者とすれ違った。自分の方では見覚えがあるのに、相手は彼のことを分かってくれなかった。男は相手に話しかけようとするのだが、喉に声がつまってひと言も言葉にならなかった。それから、出会う人々もめったにいなくなった。彼が走らされている道は人気がなくなり、通りにくくなっていったので、ほとんど人通りがなくなった。

グリオミノはヴェールボワ家の召使だった。彼に話があったので、もう一人の召使が朝早く彼を探しに納屋にやってきた。探す相手が見つからないのに驚いたが、もっと驚いたことに、すぐそのあとで男は、くたくたに疲れ切り、両手を血まみれにして、頭まで泥だらけの様子で戻ってきた。

「どこから戻ったのだ」ともう一人の召使は言った。「まるで神罰でも受けたような

恰好じゃないか」
「その通りだ……秘密を守ってくれるか」
「もちろん、守るとも」
「よし。おまえのお察しの通り、おれは神罰を受けてきたのだ。破門の効き目はこの通りさ。聖母お潔めの祝日まで、これからの一か月、おれはこの有様でいるのだ。絶対にひと言も洩らしてはならんぞ。だれにも分からないようにしておくのだ。だが、おまえ、もしおれにひょっこり出会ったら（だって偶然でなければならないのだからな）、自分がどうしなければならないのか分かっているな」
「ああ、おまえに飛びかかり、その両眼のあいだから血を出させる必要があるんだろう」
「一滴でも血が流れると、おれは助かる。ただ、うまくやってくれよ。うまくやってくれなければ、おれの罰は二倍にふやされるからな」
「ははあ、そうだったのか。神罰を受けているのが何人かいるんだな。なぜなら、ついさっき、おれはこんな話を聞いたからだ。
　グレヴィルとナックヴィルのあいだにある四つ辻で、先週一人の下男が上等な毛織物の服を見つけ、それを取っていった。だが、つぎの日の夜、ある声に目が覚めた。

その声は下男が見つけた場所にその服を戻せと命じていた。下男は服を戻した。そこで彼を待っていた男が《これを戻してよかった。そうでなければ、わたしの代りにおまえが走るところだった》と言ったというのだ」
「それは、暑すぎたので、もっとたくさん走るために服を脱いでもよいと許されたためだ。それに、おれに罪があるとしても、おれの罪はだれよりも軽い。おれだけが罰を受けるのは不公平というものだ」
「では、おまえはヴァル＝フェランの秘密を知っているのか」
「そうだ、知っている。現場から遠くないところに居合わせたのだ。おれは何もかも見てしまったのだが、それを言うだけの勇気がなかった。今でもまだその勇気はない。いつだって貧乏人はお偉い方々の愚かな行いをじっと耐え忍ぶばかりなのさ。おれ以外の人間が罰されると聞いたら、おれは嬉しくなる」
　この召使は罰を受けたが、だれの名も洩らさなかった。したがって、ド・リクメ氏の殺しの犯人たちがだれだったのか、正確には決して分からなかった。これが、この地方で申し渡された最後の証言命令書となった。それは一七七〇年のことである。

レナルド伯爵の財宝

　コルシカ島の住民がマウル人と戦っていたころ、リッツァネセ付近の悪魔の洞窟に財宝が隠されていた。
　この財宝はレナルド・ダ・フォッツアーノ伯爵のものだったので、伯爵はサラセン人との戦いに出かける前に悪魔を呼び寄せて言った。
「知っての通り、わたしはこれまでかならず約束を守ってきた。だから、今度もわたしの言葉を疑わないでくれ」
「どういうことなのかね」と悪魔が言った。
「この宝なのだが、わたしの帰還までこれを保管し、サラセン人であれだれであれ、わたしから奪おうとする者からこれを守ってほしい。その代償に、どんなことを要求するかね」
「これの半分をいただこうか」

「半分だと、だめだ。しかし、もしこれを守ることに同意してくれるなら、わたしが今日殺すはずの百人のサラセン人の魂をおまえに進呈すると約束する」
「承知した」とサタンは言った。「ただし、もしあんたが死ねば、あんたの宝を永久に管理することになるが、それは困る」
「よろしい、その場合には、これこれの条件でこれを他人に渡してもかまわないとしよう……」
伯爵と悪魔は小声で何やらひそひそと話合った。
レナルドは鎧（よろい）を着て、愛馬テロールに打ちまたがり、伯爵の旗下に馳（は）せ参じた領地の若い家臣を残らず従えて、サラセン人を襲った。猛烈な殺戮（さつりく）だった。五時間ものあいだ、敵を殺し、容赦なく惨殺した。
レナルド伯爵は一人で、約束した百人以上のサラセン人をサタン殿のもとに送った。
だが、不幸にして彼は瀕死（ひんし）の重傷を負ってしまった。
息を引き取る前に、レナルドはその忠実な友ブッカネラを呼んで言った。
「わたしは間もなく死ぬだろう……お願いだ、わたしの子供の父親になってくれ、頼む……ああ、息がつまる……少し、水をくれ」

なぜだか分からないが、そのときかすかなせせら笑いが聞こえた。

水を飲むと、伯爵は話をつづけた。

「わたしは悪魔の洞窟に財宝を隠した……それを探しに行ってくれ。だがそのためには、真夜中にライ麦のパンを作らなければならない。しかもそのパンの中には、子供の心臓と、サラセン人の男の脳みそと、墓地の中の共同墓穴の底で火をともした大ろうそくのかけらを混ぜ合わせて煮たものが入っていなくてはならないのだ。

そのあとで、財宝を運んでくれ、その場所はわたしの……」

せせら笑う声がまた聞こえた。そうして、額に二本の角を生やし、二本の山羊の足で立っている一人の小男が現われた。

それは悪魔だった。そいつは伯爵の髪をつかむと、一瞬喜びの叫びを上げて逃げ去っていった。

伯爵の死後、サラセン人は勢いを取り戻し、収獲物や樹木や畑にあるものすべてを残酷にも焼き払った。

窮乏は極度に達した。

ブッカネラはレナルド伯爵の財宝を思い出し、それを探しに出かける決心をした。

それにしても、どうすればよいのか。まだライ麦の粉は少し残っていた。大ろうそくに火をともすために共同墓穴に下りていくこともできただろう。ただ、子供の心臓はどこで手に入れるのか。

ところで、そんなころ、ブッカネラの妻が出産した。

そのために彼はひどく憂鬱になった。というのも、この窮乏の時期に夫婦二人で暮らすことすらむずかしいのに、子供が一人ふえた今となってはさらにもっとむずかしくなるからだった。

サラセン人がたえずくり返し荒し回るために、飢餓はますますひどくなっていた。葡萄酒や油や小麦粉はおろか、人の口に入れうるものは何ひとつとして残っていなかった。

二日のあいだ、この家族は飢えに耐えた。三人とも無残に死にかけていたとき、じつに恐ろしいことだが、父親の頭にふとおぞましい考えが浮かんだ。

しかし神が彼に同情し、哀れな子供は死んだ。

ブッカネラ（彼の霊魂など悪魔にさらわれてしまえ）は自分の息子を取り上げ、妻には埋葬しにいくと言って墓地に運んだ。

一人になると、この不届きな男は子供の胸を切り開き、心臓をもぎ取った。

それから、彼は何くわぬ顔で家に戻った。
この間、ブッカネラは茂みの背後にせせら笑う声を聞いた。
それは悪魔で、嬉しさのあまりもう満足げにもみ手をしていたのだった。
家に着くと、ブッカネラは妻に言った。
「ライ麦はあるかね」
「穀物袋の中にはもう一握りしか残っていないことは、よくご存知のはずではありませんか」
「結構だ、おまえは寝るがいい」
哀れな妻は不平も言わず、夫に従った。というのも、夫がこわかったからだ。
妻が寝るとさっそくブッカネラは教会の中に入り、祭壇から大ろうそくを取って墓地の方へ歩いていった。礼拝堂に着くと、彼は共同墓穴の揚蓋（あげぶた）を持ち上げ、そっと梯子（はしご）を降りた。
下に降りて、火打ち石を叩き、火花を出すと綿屑に火がついた。
大ろうそくにはこうして火が点（とも）ったが、しかし火はすぐに消えた。
ブッカネラはやりなおした。大ろうそくはきまって火が消えるのだった。七度目にやっと火はついたままになった。

浅ましい男は震えながら、やっとの思いで上によじのぼった。彼の手足はすっかり冷えきっていて、おまけに足がよろめいてうまく体を支えていられなかったからだ。くたくたになりながらも、何とかうまく墓地の出口までたどり着き、生きた心地もしない有様で家に戻った。

彼が地獄の料理を始めたのはそのときだった。火を点(とも)し、少量の水を熱し、それから自分の子供の心臓と墓地で火を点した大ろうそくのかけらとを、乳鉢(にゅうばち)の中でこねた。

その恐ろしい仕事が終ると、ブッカネラはライ麦の粉と前日に殺したサラセン人の脳みそとをそれに加えた。

それから全部をよく混ぜ合わせてパンを作り、灰の中で焼いた。

「やっとできた」パンが焼き上がると、彼は叫んだ。「これで、とうとうわたしも金持になれるぞ」

そこで、彼は息をはずませ、じりじりした気持を抑えながら、悪魔の洞窟の方へ、財宝が隠されている場所へと進んでいった。

午前一時に彼は着いた。

ブッカネラが黒いねばねばした血のしたたるパンを取りだし、それを洞窟にふれさ

せた。
　たちまち悪魔が現われた。
「何の用かね」
「おまえが守っている財宝がほしい。レナルド伯爵がおまえにそれを求める役目をわたしに命じたのだ」
「わたしたちが話した通りのパンを作ったのかね」
「そうだ」
「よろしい。わたしと一緒に洞窟に入るがいい」
　ブッカネラは悪魔のあとについていった。悪魔はまるでとても陽気な人間のように、ぴょんぴょん跳びはねながら歩くのだった。
　こうして二人はずいぶん長い間歩いていき、崖の淵に出た。その断崖の底にレナルド伯爵の財宝があったのだ。
　すると悪魔はたずねた。
「パンを持っているかね」
「持っているとも、ここにある」
「あんたがちょろまかさなかったかどうかを見るために、ためしにその中に入れたも

のをすっかり言ってもらおうか」
「子供の心臓を入れた」
「ヒッ、ヒッ、ヒッ」
「共同墓穴で火をともした大ろうそくのかけら、サラセン人の脳みそ、それにライ麦の粉を少々」
「大いに結構。しかし、あんたが手に入れた心臓はだれの子供のものなんだね」
ブッカネラは蒼ざめ、口ごもった。「そ、その子……は、それは……わたしの子だ」
「ヒッ、ヒッ、ヒッ、申し分ない。あんたは必要条件をすべて充たした。よろしい、さあ、崖の下の深い淵に降りて気に入ったものは何でも取ればよい。あんたの眼に見えるものは残らずあんたのものなのだから」
「でも、どうやって下に降りろというのだ。梯子はないのか」とブッカネラは悪魔に言った。
悪魔は即座に梯子をかけたが、ブッカネラが断崖の底に着くが早いか素早く引き上げてしまった。
ブッカネラは大きな袋を持ってきていたので、その袋の中に金貨やダイヤモンドや

ルビーやそのほかたくさんの宝石を詰め込んだ。それというのも、レナルド伯爵は並はずれた戦士だったためにサラセン人から多くのものを奪い取っていたからだ。
袋が一杯になると、ブッカネラはさらにポケットに金を入れ、それから嬉しそうに満足して上に昇ろうとした。が、梯子が見つからなかった。
恐怖が彼をとらえた。そこからもう決して出られないと悟ると、彼は泣き始めた。それを見て、悪魔が言った。
「ほほう、ブッカネラさま、どうなすった。泣いてなさるのかね。ご子息の心臓を砕いて粉になさったのを拝見したあとだから、てっきりわたしは、あなたさまにそれほど感じやすい心臓がついているわけがないと信じていましたがね」
浅ましい相手の男は答えた。
「梯子をかけてもらえまいか、お願いする。梯子をかけてくれたら、財宝の半分を差しあげよう」
悪魔は笑いだした。
「ブッカネラさま、あなたは気前のよい方だ。ヒッ、ヒッ、ヒッ」
「ああ、上に登らせてもらえないか。梯子をかけてくれたら、お好きなものは何でもあげよう」

「好きなものは何でもだと」
「そう、誓ってもよい」
サタンは梯子をふたたび下ろした。ブッカネラは袋も持たずにすぐに上がってきた。彼には袋を持ち上げられなかったし、それに悪魔が苛立つのがこわくもあった。
上に着くと、彼は悪魔に言った。
「わたしに何をお望みかね」
「あんたは何でもと約束したね」
「その通り」
「よろしい、わたしはあんたの魂がほしい」
そしてたちまち悪魔は、ブッカネラをつかまえて絶壁の下の深い淵に突き落とした。
哀れな男の体はくるくる回転しながら落ち、頭は岩にぶつかって打ち砕けた。そうしてこのようにして、わずかな金と引きかえにわが子の心臓を粉にしてこね上げてなお恐れなかった人非人は、この世から追い出されたのだった。

求道者

†

〝行者と羊飼いの娘〟

年老いた行者が森の奥にこもって暮らしていた。行者は森の中で草の根や野生の木の実を食べ、若いころのふしだらな行いを償ってたいていは祈りながら時を過していた。ところが、若い羊飼いの娘が毎日その森のはずれにやってきては、羊の番をしながら聖母マリアの聖歌をしょっちゅう歌うのだった。娘の声がじつに澄んでいるので、老人はついわれを忘れてその声に聞き入り、祈りの文句の続きが分からなくなることもあった。そこである日、老人はいまいましげに叫んだ。
「ここからはるか遠く百里離れたところで会ってみたいものだ、わたしの祈りをいつも乱すあの若い羊飼いの娘めに」
その日夕方になって羊飼いの娘が家に戻ってみると、雌羊が一匹足りなかった。たぶんそれは、娘がいつもよりたくさん歌を歌い、家畜をよく見張らなかったからだった。主人はその娘をお払い箱にし、二度と顔を合わせないように、うんと遠くへ、自

分から百里離れたところへ行ってしまうように言い渡した。

気の毒な娘はどこへ行けばよいのか分からないので、運を天にまかせて行き当りばったりに、家々の戸口から戸口に立ってもの乞いしながら歩いていった。

そのころまでは、行者はしばしば守護天使の見舞いを受けていた。天使はひとり暮しのところへやってきては話をし、忍耐するように行者を励ましてくれていた。ところが、そのときは八日間も天使が来てくれなかった。で、老人は淋しくなって、いったいどうしたわけかといぶかっていた。ようやく九日目になって天使がやってきた。しかし、いつもと違ってにこやかでなく、厳しく不満げな様子だった。行者は、どうしてこんなにも長いあいだ自分を訪ねに来てくれなかったのかとたずねた。

「あなたが誤ちを犯したからだ。神さまはあなたに不満をもっていらっしゃる」

「いったいどんな誤ちを犯すことができたというのです、祈りと瞑想に自分のすべての時間を使っているこのわたしに」

「不機嫌になったとき、あなたは自分から百里離れたところで若い羊飼いの娘に会いたいと願った、羊の番をしながら一日中聖母マリアさまの聖歌を歌っていたあの娘のことだよ。あなたの願いは叶えられるだろう、哀れな娘は主人に暇を出されたのだから。娘は、家々の戸口から戸口へともの乞いしながら、百里行かなければ歩き止める

まい、あなたが望んだ通りにな。これからあなたはこの庵を去り、徒歩で、しかも娘同様に世間の情けにすがって生きながら、娘を探しに行かねばならない。あなたが娘に再会したとき、はじめて神さまはあなたをお許しになるだろう。そのときあなたは死に、神さまはあなたをおそばへ呼んでくださるはずだ。というのも、もうあなたは充分に悔いたことになるだろうから」

「でも、どの道を行けばよいのです。娘はどの方角に向かったのですか」

天使は答えずに姿を消した。

老人は苦しみに打ちひしがれ、杖をもって行き当りばったりに出かけた。しかし彼には四方八方あらゆる道を勝手に歩き回らせることにして、話を羊飼いの娘に戻そう。行者にはまたあとで会うはずだから。

気の毒な羊飼いの娘は、さんざん苦労と不幸を重ねたあと、百里の道のりを歩き終ると、ようやくある金持の未亡人の家に着いた。未亡人は娘の不幸にひどく心を動かされ、また娘のやさしさ、美しさ、信仰の篤さがたいそう気に入ったので、手元においで使うことにした。

この未亡人に一人の息子がいたが、この息子は娘に恋するようになり、娘と結婚したがった。だが、母親と一族はこの縁組に同意するのを拒んだ。それというのも、自

分たちが金持であるばかりでなく、名門の貴族でもあったからだった。若者は一向に意に介さなかった。それほど彼は恋に夢中だったのだ。で、彼は娘と結婚した。しかし母親も一族の者も、だれひとりとして結婚式に立ち会わなかった。若者は母親の家を出て、父方から継いで所有していた小じんまりした古い館に妻と引きこもらなければならなかった。

一年後に二人に息子が生まれた。愛らしい子だった。親族一同に洗礼には立ち会ってほしいと頼んだが、やはりだれも来てくれなかった。一族とそういった関係でいることは、若い夫婦にはたいへん辛かった。二人はそれまでにも増して愛し合っていた。二人は情け深く信仰も篤かったので、その地方のすべての貧しい人々や不幸な人々を慰め、救いの手を差しのべてやった。若妻は相変らず聖母マリアを特別に信仰し、どんな天気でも一日も欠かさずに、彼女が聖母マリアに捧げた城館内の礼拝堂に参っては祈っていた。

子供は健康そのもので、いかにも利発そうに見えた。その子がいるので二人は幸せだった。子供が三歳になり、ますます美しさと上品さを増すので、つねに一族と和解したいと望んでいた父親と母親はふと思いつき、息子を紹介する目的で昼の正餐会に親族を招待することにした。（親族というのは夫の方の親族に限られた。というの

も、妻の方の親族のことは考える必要がなかったからだ。）さすがに今度は、親族の方も来ることを約束した。

約束の日の朝、食事の用意がなされているあいだ、母親はあとでは行けなくなるのではないかという心配から、いつものように聖母マリアにお参りに行った。だが、ああ、戻ってみると、家は喪に服し涙に暮れているではないか。留守中に大変な不幸が起っていたのだ。息子は台所で遊び回っているうちに、煮えたぎるミルクがいっぱい入った釜の中に落ちて、すでに死んでいた。母親はこの恐ろしい知らせを聞いて、悲鳴をあげ歎き悲しむ代りに、諦めてこう言うだけで満足した。

「息子を授けてくださったのが神さまなら、息子をわたしからお取り上げになったのも神さまなのだわ。神さまの聖なるみ名に祝福がありますように」

それから子供の亡骸をかかえてやさしく抱きしめ、食器棚に子供を置くと、まるで何の不幸も起きなかったようにひたすら食事の準備にかかりきりになり、家の召使たちにも自分にならうように言った。

招待客たちがやってきて子供に会わせてくれと頼んだ。母親は、いま子供は寝ているので食事がすんで会ってもらえまいかと答えた。一同は食卓についた。会食者たちは陽気で満足していた。だれもがこの和解を喜んだ。

食事が終る少し前に、若妻は屋敷の中庭で待っている貧しい人たちにも分け前を分配してあげようと、下に降りていった。ふだんから知っている貧者たちのみんなに与え終ったとき、白いひげを生やし、杖をついて腰をかがめ、辛うじて立っているといった一人の老人（それほど疲れきっているように見えた）が、入口の敷居にやってきて跪いた。で、彼女はその老人にもほかの人々と同じように分け与え、体を起すように言った。しかし老人はこう答えるのだった。

「奥さま、今朝あなたが食器戸棚の中におしまいになった料理を一目見なければ、わたしの心は休まることがありますまい」

「食器戸棚の中に食物をしまったりはいたしませんでしたよ」と彼女は答えた。

「後生です、お願いですから、食器戸棚まで行って、今朝あなたがその中におしまいになったものをわたしに少しだけ見せてください」

奥方は、見知らぬその男のたっての頼みに驚いて、食器戸棚まで行ってみた。戸棚を開けると、元気いっぱいの子供の姿が目に入った。子供は笑いかけながらみかんを母親に差し出すのだった。歓喜と幸福のあまり呆然となりながら、母親は両腕の中に息子をかかえ上げ、もの乞いの老人に子供を見せに走った。老人は子供を抱き、そしてすぐに死んだ。

その老人こそ年老いた行者だった。老人の罪のあがないは終った。神に許され、老人の魂はそのとき天国へ昇っていったのだった。

このあと、母親は会食者一同に息子を紹介した。子供は笑いかけながら、相変らず手にみかんを持っていた。みんなは喜んで子供を抱いた。それから母親は、子供の死のこと、子供が生き返ったこと、それに行者の訪れなど、起ったことを残らず話した。

不幸とともに幸福の、つまりは一切の原因だった老人の遺骸はいとも鄭重に葬られた。それ以後、一族全体はたいそう仲睦まじく、また神を畏敬しながら暮らした。

死なねばならぬ

昔、この世のだれも及ばないほどに偉い、たいそう博識な学者がいた。ローマで大いに学問を修めたあと、彼はもう一度だけ母親に会いたくなった。母親はすっかり年を取っていて、はるか遠くの村に住んでいた。
学者の名はグランテスタといった。ある日、彼は旅に出た。長いあいだ歩いたころ、彼は一人の哀れな老人に出会った。老人はたずねた。
「どこへ行きなさるんだね」
「それがおまえに何の関わりがあるのだ」
「あんたがわしと同じ方角に行くなら、道連れになりたいのでな」
「おまえのような哀れな乞食と一緒に歩けるものか」
「わしは老ぼれで、あんたは若い。わしが歩くのに手を借してもらいたい」
「わたしはおまえの召使ではない。歩こうと、ここにいようと、わたしに何の関わり

があるのだ。わたしが学者グランテスタであることを知らないのか」
「ああ、知っているとも、馬鹿なうぬぼれや」と、たちまち美しい若者に変身した乞食は言った。
「しかし、知っておくがいい、あんたの学問はあんたに何の役にも立たないだろうということをな。あんたは貧乏人を嘲り、年寄りを軽蔑した。よろしい、それでは言っておこう。あんたは不死ではないし、あんたの名前などのちの世にはかすかにも記憶されていないだろう」
「何だと」と学者は叫んだ。「何ということを言ってくれたのだ。このわたしが死ぬだと。どんな賢い者たちよりはるか上に到達したあとで、まるで世にもみじめな人間のようにこの世を去るというのか、このわたしが。いや、おまえの判決をおめおめと承知してなるものか。たった今からわたしは、決して死ぬことのない、すべてが永久に存在する土地を求めて駆けめぐることにする」
「グランテスタよ、あんたは死ぬだろう」
しかし学者は、もう相手の言うことなど聞いてはいなかった。彼は何週間も何か月間も、相変らず駆けに駆けていった。
ようやく彼は高い山々に囲まれた土地に着いた。夜になると、緋文字で書かれた次

のような文句が見えた。《ここでは決して死ぬことはない》と。

「見つけたぞ」と学者は叫んだ。「あれほど願っていたこの土地をついに発見したのだ。これでわたしは不死の身となった」

彼は嬉しそうに、この祝福された国を褒め始めた。土壌の豊かさもさることながら、おだやかな風土もそれに劣るものではなかった。

何日も、何か月も、何年もの歳月が過ぎ去った。グランテスタは幸せそのもので、自分を不死だと信じていた。

ところがある朝、彼はものすごい嵐に眼を覚ました。

いつも静かな美しいこの谷で、樹木が風の力を受けてよじれ、真黒な厚い雲が空に渦を巻いているのが見えた。まるで地球が全滅するようだった。

急に風が止み、空は晴れ上がり、太陽はふたたび燦々と光を降り注ぎはじめた。

グランテスタがこの突然の変化にまだ驚いていたとき、はるか遠方に形の定かでないものが稲妻のように速く自分の方へ近づいてくるのがふと眼に入った。

そいつは身の毛のよだつような怪物で、鷲の翼、ライオンの頭、虎の足をもっていた。

怪物は大きく翼を広げ、まだ肉がぴくぴく動いている死骸を爪でしっかりとつかみ、

こちらへやって来ようとしていた。

グランテスタの近くにくると、怪物は舞い下り、そのくちばしの中に一粒の砂を呑みこんで、やってきたときと同じ速さで姿を消した。

学者は驚いてたずねた。

「わたしの心に恐怖を投げこんでいくとは、恐ろしい怪物よ、ここに何をしにやってきたのだ。それに、今おまえが盗んだ一粒の砂はどういうことなのだ」

彼がこう言い終るか終らないうちに、大きな岩が答えた。

「あの怪物は破壊の仕事をやりとげ、この山々のかけらを世界の隅々に散らそうとしてやってきたのだ。ここでは、今はまだ雲にまでそびえているあの山々が麓の広い平野と同じ高さになるときにはじめて、すべては滅びるだろう」

「えっ、なんだと。では、ここではすべてが永久に存在するのではないのか」とグランテスタは驚いて叫んだ。

「そうだ、永久にではない。しかし、何も心配することはない、幸運な死すべき人間よ。おまえの眼が光に対して閉じるまでには、何百万、何千万年もの歳月が過ぎていくだろう」

「それだけでは、わたしにとって充分ではない。わたしは永遠がほしい。多少とも長

い寿命なんていやだ。もしあの山々がいつか消えていくのならば、人生なんてわたしにとって何の意味があるのか」

そこで、彼は山を越え谷を渡って、またもいつまでも歩き、走り、逃げていった。グランテスタはこのようにしてさんざん長いこと旅をつづけたあげくに、海よりも大きな広大な湖の岸にたどり着いた。

この幸福な岸辺ほどに美しいものを夢見ることは決してできない。花々はいっそう咲き乱れ、美味な果実をたっぷりつけた木々は折れそうなほどに撓んでいた。

この土地を歩き回っているうちに、グランテスタは柏の巨木を見いだした。この木は一つの町全体も陰になるほどに大きかった。

彼がそこで、このたくましい自然への感嘆の気持に充たされていると、かん高い声が聞こえた。巨木の枝がこう話しているのだった。

「死すべき卑しい人間よ、図々しくもおまえはいつからこの土地を踏んでいるのか、一切が世界と同じくらいに揺るぎないこの土の上を」

「傲慢な柏の木よ、では、ここにあるすべてのものは不死なのか」

「そうだ」

「ほほう。それでは、わたしはおまえなど少しもこわくないぞ。おまえはわたしの命

を奪うことができないのだから」

彼がこう言うか言わないうちに、恐ろしい物音が聞こえた。

空は稲妻に貫かれ、彼の頭上には長い帯状の黒雲が現われた。すさまじい嵐が起り、大地は揺れ、一瞬のうちにこの美しい国も荒れ果ててしまった。

グランテスタは恐ろしくなった。彼が懇願するような視線を空に向けていると、そのとき炎の渦のただ中に、見るも恐ろしい一羽の黒鳥が旋回しながら、湖の岸辺にいる彼から少し離れたところへ舞い下りてくるのが見えた。

その鳥がくちばしで一滴の水を飲み、飛び立つ気配を見せたとき、学者はこう話しかけた。

「おまえが何者かは知らないが、だれよりも不幸な人間に答えてくれ。この谷のすべての動物の中でおまえだけが、なぜこの水を飲むのか言ってくれないか。それにまた、なぜおまえの到来はこれほどまでに恐ろしい仕方で予告されるのか、なぜなのだ」

「わたしは死の使者だ。千年ごとにわたしはこの海から一滴の水を奪いにここにやってくる。ここにあるすべてのものは、すっかり水が乾いた日にはじめて滅びるだろうと書かれてある」

「では、あの巨木は嘘をついたのか。あの木の奴は、この土地に住む生き物には永遠

が約束されていると言っていたではないか」
「いや、あの木は少しも嘘をついていない。わたしが一滴ずつ、しかも千年ごとに盗まなければならない水はとてつもない量なので、自分は不死だと信じてもかまわないし、人をだましたことにはならないのだ」
「だが、おまえの最後の旅が死の印となるような瞬間がやってくるだろう」
「そうだ」
「何だ、このおれは死にたくないぞ。おまえの力を認める気などさらさらない。教えてくれ、おまえが訪れることのできない場所、すべてが永久に存在するような土地はあるのか」
「あるにはある。だが、どこにそれがあるかは言えない」
「自分で探し当ててみせるさ」
そこで、グランテスタはまたも旅に出た。
彼が魔法の湖の岸を発ってからいく日いく夜が過ぎたか、もう数えられないほどだった。そんなときのある夜、この哀れな学者は一人の美しい婦人に出会った。その婦人は彼にたずねた。
「どこへいらっしゃいますの」

「決して死ぬことのない国を探しています」
「もしそこへあなたを案内してさし上げると言えば、ついていらっしゃるかしら」
「喜んで行きますとも」
　翼のある七頭の馬に曳かれた華麗な四輪馬車がたちまち現われ、グランテスタと仙女（なぜなら、彼が出会ったのは仙女であったのだから）は空中に姿を消した。
「強力な魔女よ、わたしをどこへ連れていくのだ」
「あなたは決して死ぬことのない国を探しているのではなかったの」
「もちろん、その通りだ」
「では、そこへ行きましょう」
「わたしがあれほど追い求めてきた国は、では地上にはなかったのだね。その国に行きつくには空を駆けめぐらなければならなかったのか」
「そうですとも。わたしがあなたを助けに来なかったならば、あなたは決してその国を見ることはなかったでしょう」
　グランテスタと仙女は、ついに決して死ぬことのない国に着いた。
　そこには、おだやかで知力にあふれたあらゆる種類の動物がいた。ほんのわずかなそぶりを見せても、動物たちは駆けつけてくれるので、この魔法の国のどんな場所に

も案内してもらうことができた。
長い間、グランテスタと仙女とは幸せに暮らした。歳月が流れたが、学者には自分がまだごく若い青年のように思われるのだった。
しかし、ふとまた彼は自分の母親のことを思い出し、母親に会いたくなった。
仙女は彼の計画を思いとどまらせようとしたが、むだだった。グランテスタは相変らず旅に出たがった。
「いいわ」と、ある日魔女は言った。「では、この翼のある馬にお乗りなさい。これはわたしが持っているすべての馬の中で一番すぐれた馬なのですよ。この馬なら、早くあなたを地上に連れていってくれるでしょう。連れていくにまかせ、そうしてあなたのお母さまをお迎えして、早くここへ戻っていらっしゃいな。でも、気を付けるのですよ、もしすぐに死にたくないのなら、決してこの馬を下りないように注意することです」
グランテスタは馬にまたがり、風のように素早く旅に出た。
三日三晩かかって彼は地上に着いた。そこまで来れば、あとはもう連れていかれるがままになっていさえすれば、自分の村にたどり着くはずだった。ところが、彼は自分の村だと分かるまでにひどく苦労した。それほど村は一変していたのだ。

彼は母親の消息をたずねた。だれ一人として彼の母親を知らなかったので、彼に答えられる者がいなかった。
「何だって、グランテスタの家だって」と人々は言うのだった。「この地方には、そんな名の家族はいなかった」
「しばらく以前にたいそう世間の評判になった、この村出身の大学者のことを覚えていませんか」
「ご冗談でしょう、あなた。そんな人物が実在したことはないよ」
グランテスタはすっかり打ちしおれて、仙女に会うためにまたもと来た道を引き返した。
彼がどんどん進んでいくと、ある夜、山の裏手で七頭の馬が重い荷を積んだ荷車を曳こうとして難渋（なんじゅう）しているのが眼に入った。
グランテスタがその重い車に近づくと、車が轍（わだち）にはまり込んでそこから脱け出せないでいることが分かった。
「もし、その馬上のお方、わたしに手を借してもらえますまいか」と御者が言った。
「さもなければ、あなた以上に親切なだれかを待ちながら、ここで一夜を明かさなければなりません」

「いいとも」グランテスタはそう答え、それ以上に深く考えもせず、馬を下りた。
だが、彼が地面に足をつけるかつけないうちに、手に鎌をもった死神の骸骨が横にいた。死神は甲高(かん)い声で叫んだ。
「とうとうおまえをつかまえることができたぞ。ずいぶん長いこと、おまえを追い回してきたのだ。おまえを追って擦(す)りへらした靴の残骸を見るがいい」
そう言って死神は、形がなくなりかけた靴をうずたかく積んだ車を見せた。
「わたしに旅をつづけさせてくれ。おお、死神よ、わたしがおまえに何をしたというのだ」
「おまえがわたしに何をしただと、この不届き者。わたしの力を見くびるのが最大の侮辱でないとでもいうのか」
「後生だから、許してくれ」
「いいや、おまえはあまりに長生きしすぎた。今こそ死ぬときだ」
情け容赦のない鎌が哀れな学者の上に振り下ろされ、グランテスタは永久に世を去った。

〝袋に入れ！〟

ニオルの陰気な不毛の山奥に、昔、父親と十二人の子供が住んでいた。
飢饉が襲ったとき、父親は息子たちに言った。
「子供たちよ、この家にはもうおまえたちに食べさせるパンがない。世界を旅して回るがいい。そうすれば、生計を立てる手立ても見つかるだろう」
この話を聞くと、足の不自由な末息子が泣き出して言った。
「ぼくは足が不自由だ。暮しを立てるといってもどうしたらいいのだろう」
「涙を拭くのだ、もう泣くでない。おまえの兄たちがおまえを一緒に連れていってくれる。もしパンの一切れでも見つかれば、きっとおまえのことを忘れないだろう」
翌日、十二人の兄弟は決して離れ離れにならないと固く約束したあと、旅に出た。
けれども何日か歩くと、長男が十人のほかの弟たちに言った。
「ちびのフランチェスコはおれたちの足手まといだ。こいつはこのまま道に放ってお

こう。だれか心やさしい人が通りかかって、きっと情けをかけてくれるだろう」
こうして弟は置いてきぼりをくった。意地悪な兄たちは足の不自由なフランチェスコを見棄て、途中で出会った人々のだれかれにもの乞いしながら道をつづけた。
そんなふうにして彼らはボニファチオにたどり着いた。そこで、岸につながれた小舟を見つけたので、サルジニアへ渡ろうと思い、さっそくその小舟を奪った。そこへ行けば飢饉も大したことがあるまいと思ったのだ。
だが、海峡の真中で大嵐が起きて、小舟は岩にぶつかって粉々に砕け、十一人の兄弟は溺死した。
一方、足の不自由なフランチェスコは悲しみと疲労におしひしがれ、見棄てられた場所で眠り込んでしまった。
そこに住む仙女は一部始終を見ていた。足の悪い気の毒な弟を助けてやりたくなり、仙女はこの弟の眠りを利用して足を治した。それから、老婆の姿になると、重い薪の荷物の上に腰を下ろし、いかにも身を休めているような振りをした。
フランチェスコは眼を覚まし、自分がみんなと同じように歩けるのに驚いた。脇にいる老婆の姿がふと眼に入ったので、たずねた。
「お婆さん、ここを偉いお医者さまが通りませんでしたか」

「なぜそんなことを聞くのだね」

「そのお医者さまが、ぼくが眠っている間にこの足を治してくれたので、その親切にお礼を言いたいからです」

「それは本当かね。いいとも、実はそのお医者さまというのはこのわたしなのだよ。ここにはわたしだけが知っている何本かの草があって、病気の足をすっかり治すにはその草を足にこすりつけさえすればよかったのさ」

フランチェスコは喜びを抑えることができなかった。彼は親切な女の首に跳びつき、有頂天になって抱きしめた。それから感謝の気持を表わすために、老婆の重荷を担ごうとした。

だが、何という驚きだったろう。彼がそのとき見たのは老婆ではなくて、想像しうるかぎりの世にも美しい若い娘だった。

その若い娘はダイヤモンドで眩(まばゆ)いほどに輝いていた。ブロンドの長い髪が娘の肩を蔽っていた。娘のドレスは金の刺繍(ししゅう)のある青い絹で作られていて、そのかわいい靴は大きな星の形をした二つの宝石の下に見えなくなっていた。

フランチェスコは感嘆の気持でいっぱいになり、思わず娘の足もとにひれ伏した。だが、仙女はこう言った。

「お立ちなさい。わたしはおまえが恩知らずでないことを知って嬉しい。二つだけ願いごとを言いなさい。わたしがすぐにもそれを叶えてあげよう。それというのも、わたしはこのクレノ湖の仙女の女王だからです」
　若者はしばらく考えて答えた。
「自分の望みのものが何でもたちどころに入る袋が欲しいのですが」
「結構ですよ。願いごとはもう一つ残っている」
「つぎに、ぼくの意志通りになる棒をお願いします」
「いいでしょう」
　そう言って、仙女はフランチェスコに袋と棒を残して姿を消した。
いま自分の身に起ったことを喜びながら、若者はその袋と棒をためしてみようと思った。空腹だったので、彼は叫んだ。
「やまうずらの焼肉よ、この袋に入れ」
たちまち彼の願いは聞き届けられた。
フランチェスコは喜びで夢中になって、さらにパンと葡萄酒のほかに、すてきな食事をするために必要なものを残らず頼んだ。
　それから彼は、翌日にはマリアナへ着けるように旅をつづけた。

た。

そこには、コルシカ島とイタリアの大賭博師が残らずやってくることになってい

フランチェスコは金がなかったので、頼むことにした。

「十万エキュを袋の中に入れてくれ」

すると、すぐに袋の中に金が入った。

ところで、その当時、マリアナの町はたいそう悪魔の気に入っていた。悪魔は美少年の姿に変身して、みんなの心をトランプに引きつけていた。若者たちに賭け金がなくなると、悪魔は破廉恥な行為を行わせては若者たちの魂を買い取ってしまうのだった。

サント＝フランチェスコ殿下が莫大な富をもって当地にご到着になったという噂が、またたく間に広まった。

すかさず悪魔は変装して、彼に会いにやってきて言った。

「殿下、こちらへ参上いたしましたことをお許し願います。しかし、賭博者としてのご名声がお高くていらっしゃるため、お会いしたいという欲望を抑えることができなかったのでございます」

「あなたはお世辞がとても上手だ」とフランチェスコは言った。「というのも、わた

しは賭博師ではないのだから。だから、あなたから手ほどきを受けられるものと信じている」

悪魔はこの訪問に満足して立ち去ったが、あまり素早くなかったので、悪魔の山羊足をうまく隠しおおせられずにフランチェスコに見られてしまった。

「ははあ、サタンがぼくを訪ねたのだな。今にぼく以外の者に話しかけた方がよかったということを思い知らせてくれよう」

彼はわくわくしながら、またすてきなご馳走を自分のために注文した。

数日後に彼は賭博場へ出かけた。

そこへ行くと、だれかが一人の若者を指さした。その若者は財産を失って、今しがた絶望のあまりわれとわが胸を突き刺したところだった。

だれもがこの悲惨な出来事を気の毒に思っていたが、悪魔だけはひそかにほくそ笑んでいるのがフランチェスコにすぐ分かった。

けれども、その不運な若者の死体は埋められ、賭けがつづけられた。

遊び方を知らなかった殿下は、第一日目には巨額の金を失った。彼は破産したと思われた。だが、まったく違っていた。なぜなら、自分に必要な金を手に入れようとすれば、例の袋に命令しさえすればよかったからだ。

二日目も、そして三日目も同様だった。
悪魔はこんどこそ本当に彼が破産したと思い込み、さも同情するような素振りを見せながら、こう忠告した。
「殿下、この三日間で身代(しんだい)を著しくお減らしになられたにちがいありません。でも、そのおつもりになれば、このわたしのおかげで、お失いになった財産の半分を取り戻せます。ただし、もちろん、ある条件つきですが」
「どんな条件なのだ」
「わたしがお教えする若い娘に暴行を加えるという条件です。あなたほどにお金持で風采(ふうさい)の立派なお方には、きっと娘も長くは抵抗すまいと思います」
「ああ、サタンめ、ぼくに忠告しようというのか。よし、この袋に入れ」
正体が見破られたと知ると、悪魔は不快げな顔をしたが、従わざるをえなかった。
悪魔が中に入るが早いか、フランチェスコは棒に命じた。
「袋の中のものを殴れ」
棒は立て続けに殴った。それもすさまじいほどに強く殴ったので、悪魔は悲鳴をあげ、罵(ののし)った。
「外に出してくれ、外に出してくれ」

しかし棒は相変らず殴りつづけた。
「外に出してくれ。止めろ、さもなければ死んでしまう」
「へえ、何が困ったというのだ。ははあ、さてはおまえはまだ足りないのだな」
棒は殴りつづけた。ようやく、三時間もの殴打のあとでフランチェスコは言った。
「もういい、今日のところはそれで充分だ」
「わたしを自由にしてくれる代りにどうしろというのだ」と悪魔はたずねた。
「よく聞け。第一に、賭博場でおまえの罪によって自殺した人々を一人残らずすぐさま生き返らせなければならない。第二に、あの若い娘は、おまえが辱めさせようとしたからにはきっと貞淑で善良な娘にちがいないのだから、娘の平安を決して乱さないと誓わなければならない」
「その通り誓う」と悪魔は言った。
「では、外に出るがいい。しかしよく覚えておくのだ、わたしがその気になれば、おまえをつかまえられるということをな」
悪魔は約束に背く気は毛頭なかった。悪魔が地の底に姿をくらますとすぐに、顔面蒼白の、熱に浮かされたようにうつろな視線をただよわせた若者たちがぞろぞろと現われた。

「いいか、きみたちは賭け事で大損し、絶望のあまり自殺した。ところで、今日わたしはきみたちを生き返らせる能力を発揮することができたが、明日はもうそれもできないだろう。命を助けてやったのだから、二度と賭け事をしないと約束してくれ」
「ええ、誓います、誓いますとも」
「よろしい、ここに一人当り千エキュのお金がある。行っておまえたちのパンを稼ぐために働くがいい」
若者たちは大喜びで、ある者たちは喪に服している家族のところへ行ったが、世界を旅するために出発した者たちもいた。というのも、彼らの過去の不行跡がもとで彼らの肉親は死んでしまっていたからだ。
このあと、フランチェスコは自分の村に帰りたくなった。父親はどん底の不幸を味わっているにちがいなかった。
途中で彼は、絶望して腕をよじらせている一人の若者に出会った。
「ほほう、ねえ、きみ。しかめ面をしてみせるのがきみの仕事なのかね。そうだとしたら、そのしかめ面の一ダースをいったいいくらで売っているのだい」
「ご親切な方、わたしは笑う気になれないのです」
「それはまた、なぜだ」

「わたしたち家族の唯一の支えである父が柏の木の上から落ちて、腕を折ってしまったのです。わたしは医者を呼びに町へ駆けていきました。でも、医者はわたしたちが貧しいと知ると、腰を上げようとしませんでした」
「何だ、ただそれだけのことか。気を鎮めるがいい」
しかし若者は相変らず泣きつづけているのだった。
「気を鎮めるようにと言っているのだ。きみの父親はかならず医者に診てもらえる。きみが迎えに行った医者は何という名かね」
「パンクラース先生です」
「よし。パンクラース先生よ、この袋の中に入れ」
するとたちまち、一人の男がその不思議な袋の中に飛び込んできた。主人の命令通りにまたもや棒は激しく動き始めた。
若者が医者の悲鳴におどろいて逃げだしかけたとき、フランチェスコは棒を止めた。
「学者先生、あなたがその手足をこすり合わせられるように、ほんの少しだけ余裕を与えてあげましょう。なぜなら、肉の小さなかたまりにならなければ、この袋からは出られないのだから」

「お願いだ、勘弁してくれ。このわたしがこんな罰に値するような何をしたというのだ」

「よくも図々しくそんなことをたずねられるものだな、この罰当りめが。では、この若者をもう覚えていないというのか」

「許してくれ、後生だ」

「おまえが他人に同情しなかったのだから、わたしもおまえに同情なんかしないぞ。棒よ、殴れ」

するど、医者がおびえて泣き叫ぶので、フランチェスコは言った。

「棒よ、止まれ。

お医者さん、外に出してあげたら、この気の毒な若者の父親を治療すると約束するかね」

「ああ、約束するとも。治療でも薬でも金でも、何だってあげよう」

「よろしい。では、外に出るがよい」

不届きな医者は袋から出てきたが、立っているのもやっとといった有様だった。それほど医者は疲れ果てていた。

しかしフランチェスコは構わず医者を歩かせた。

村に着くと、医者が病人に熱意をこめて尽したので、もう治癒は疑いなしと見たフランチェスコは一刻も早く父親に会いたいと思い、旅をつづけた。

数日歩いて、彼は飢饉のひどい郷里にたどり着いた。

さっそく、フランチェスコはどの客もびた一文払わずに食卓で食事のできる食堂を建てた。袋は相変らず彼に、素晴らしくおいしい料理と飛び切り上等の葡萄酒を授けてくれた。

これは食糧欠乏の間つづいた。ふたたび豊作になったとき、このままでは怠け者を力づけることになり、またその結果、ニオルの住民たちに役立つつもりがかえって不利益を蒙らせることになるのではないかと思い、フランチェスコはもう何ひとつ与えようとしなかった。

ところで、フランチェスコが幸せだったと思うなら、とんでもない間違いだ。それどころか、彼は兄たちに会えないのでたいそう悲しかった。というのも、彼は兄たちのひどい仕打ちを恨んではいなかったからだ。

フランチェスコは十一度くり返して言った。

「ジョヴァンニ兄さん、この袋に入れ。パオロ兄さん、この袋に入れ。

……………………………………………………………………
……………………………………………………………………」

ところが、その都度、悲しいことにその袋には半ば腐蝕した骨の山しか入ってこないのだった。こうなれば彼の兄たちが死んだことは疑いなかった。そう思うと彼はひどく悲しくなった。

フランチェスコの父がこんどは死んだ。それに彼自身もたいそう年老いた。それにしても、死ぬ前にもう一度クレノ湖の親切な仙女に会いたかった。彼は旅に出て、はじめて仙女に出会ったあの場所にやってきた。そこで彼は待ちつづけたが、仙女はさっぱり通りかからなかった。彼はもういちど姿を現わしてくれるように親切な女王に懇願したが、なんの効き目もなかった。けれども、彼は仙女に会わないうちに死にたくなかった。

そのとき、死神がたまたま通りかかった。死神は片手に黒い旗をもち、もう一方の手に鋭利な鎌をもっていた。死神はフランチェスコのそばにやってくると言った。「ところで、爺さん。生きるのに疲れたか。おまえは充分に山々や谷間を駆けめぐったな。もうみんなと同じことをして、わたしと一緒にくるときではないか」

「ああ、死神よ」と老いたフランチェスコは答えた。「わたしはおまえを祝福する。

そうだ、いかにもわたしは世の中を見てきたし、世の中がどんなものかをすっかり見てしまったので、何事にも満足している。だが、おまえに身を委ねる前に、大切な人に別れを告げねばならないのだ。わたしに一日だけ時間をくれないか」
「爺さん、用意はできたか。おまえの魂がサラセン人の魂のように死んでほしくなければ、祈るがいい。そしてわたしのあとについてくることを考えるのだ」
「お願いだ、たったの半日でいいのだから」
「だめだ」
「せめて一時間でも」
「一瞬たりともだめだ」
「おまえがそれほど非情なら、仕方がない。この袋の中に入れ」
死神は身震いし、その骨がすべてぶつかり合ったが、しかし結局、死神も相手に従わざるをえなかった。
同時に、クレノ湖の仙女の女王がフランチェスコの前に姿を現わした。仙女ははじめて会ったときと同じように光輝き、同じように若かった。
老人は仙女だと分かると、足もとにひれ伏した。だが、仙女は言った。
「おまえはわたしが授けた能力を悪用しなかった。その袋と棒とを、おまえはよいこ

とをするためにしか使わなかった。その心がけにわたしは報いてあげたいと思う。何をお望みか」
「わたしはもう何も欲しくありません」
「老人よ、富、健康、若さが欲しくはないのか」
「いいえ、わたしはただ、コルシカ島が幸福で、この島が二度とサラセン人に荒されなければよいと、それだけを願っています」
「それはすべて叶えられよう」クレノ湖の親切な女王はそう答えると、すぐさま姿を消した。
　善良なフランチェスコは火を赤々と燃やし、冷え切ったその手足をほんのしばらく暖めた。それから死神を自由にしてやると、ほかの人々が悪用することを恐れて、袋と棒を燃えさかる火の中に投げ入れた。
　このとき、茂みの後ろで悪魔が嘲笑った。だが、哀れにも老人の耳には聞こえなかった。年を経て耳が遠くなっていたのだった。
　コケコッコー、コケコッコー。
「雄鶏だ」と死神は言った。そして老人に鎌の一撃を与えると、老人の遺骸を運び去って姿をくらました。

死　者

†

真夜中の葬列

ヴィトリにある、もと聖堂区教会に隣接したサン＝マルタン墓地には、いまでもひどく古びた一軒の家がある。昔、それは墓掘り人とその家族の住居に使われていた。サン＝マルタンの墓掘り人には一人娘がいて、お針女をしていた。娘は田舎の花嫁に衣裳を着せたり、婚約の式や婚礼の席に出席したりしていたので、家にもどるのが夜になることもめずらしくなかった。

ある晩、娘が父親の家に今しがた帰り着いてなにげなく部屋の窓のところにいくと、ちょうど教会の鐘が真夜中を告げていた。不意に異様な光景が娘の眼に映った。いつも見ているような葬列が教会をでて、窓の下を通りすぎていくではないか。

聖職者は大勢いるのに、娘の耳には、かすかな物音ひとつ聞こえなかった。まるで人々の足は墓場の草をわずかにかすめ、小道の砂にはふれていないようだった。

棺の後ろを素裸の男が歩いていた。月明りに照らされた男の顔には、ひどく深い苦

しみが刻まれていた。

行列は墓地のずっと奥の方へ進んでいき、木陰に消えてしまった。

この幻覚がつよく脳裡に焼きついていたので、娘は翌日の夜までそのことを考えつづけた。夜になって真夜中の鐘が鳴ると、勇気をふるってまた部屋の窓のところにいってみた。

同じ行列が眼の下をすすんでいった。娘の恐怖は前夜より大きくなったので、教会の扉が開くとさっそく、最初のミサを聞きにいき、聴罪司祭に会って自分が目撃したことの一部始終を話した。

司祭はしきりに考えたあげく、娘に言った。

「あんたが見たという、棺のあとを歩く苦しげな不幸な男は、だれかに殺されて、遺骸を包む死衣すら与えられないままに土に埋められたにちがいあるまい。その男は経帷子を生きた人間に求めているのだ。そして話しかけている相手はあんたなのだ。

だから毎晩、行列がすすむ場所に棺衣をもっていく必要がある。このようにして、苦しんでいる哀れな魂を慰めてやるがいい。

しかし、このことはあんたの胸にしまっておくことだ。自分が見たことを生きている人に決して洩らしてはならない。さもなければ、あんたの棺衣は返されて、哀れな

不幸な男はまた苦しみ始めるだろう。毎晩あんたは男が墓地に現われるのを見ることになるだろう」
　お針女が聴罪司祭の言いつけ通りにすると、幻覚は止んだ。

＊＊＊

　二年が過ぎ去り、娘は快活さを取り戻してサン＝マルタン墓地の葬列のことなど忘れてしまった。
　ところで、ある晩のこと、娘は家畜小屋に糸を紡ぎ(つむ)に出かけた。若者や娘たちがそこで紡ぎながら話をしたり歌をうたったりすることになっていたのだった。話が娘の番になったとき、紡ぎ手の若い娘が彼女に言った。
「ねぇ、あなた、無口な美しい娘さん、ひと言も口をきかないのね。いったいお腹がからっぽだとでもいうの。でも、こんなふうでないときだってあるんでしょう。だって、婚礼の席では一日中歌っていたし、夜は骨の髄までふるえ上がるような恐ろしい話をしてくれたもの」
　娘は痛いところを突かれて深く考えもせず、つい答えてしまった。
「あなたたちのどんな話よりもこわい、わたし自身の身に起った話を知っているわ」

娘は以前に起ったことを話して聞かせた。

家に戻ると、二年前の夜の出来事がちらっと心に浮かんだが、そのときはただ聴罪司祭の忠告を思い出しただけだった。娘は自分がしたことをひどく悔み、軽卒な振舞いの結果を確かめるために窓のところにいってみた。

ああ、何ということか、この二年間見なくなっていたあの不気味な行列が教会から出てくるではないか。そうして素裸の男が、前より悲しげに、いっそう打ちしおれて行列のあとからついてくるのだった。

翌日、不幸なお針女が以前に帷衣を置いた場所に、同じ帷衣が見つかった。

娘は深い苦しみを味わって病気になり、病床につき、一年後に死んだ。

ヴィトリでは、娘の遺骸はサン＝マルタンの亡霊のために二年間役立てた帷衣に包まれたと信じられている。

シャントルーの鐘(かね)つき

「これからする話はずいぶん古い」旅商(あきな)いの仕立屋のコンスタン・チュアル爺さんはそうわたしたちに言った。しかしセル郡に住む者ならだれでもこの話を知っている。というのも、これはシャントルーで起ったことだからだ。

この聖堂区の首邑(しゅゆう)に一人の若者がいて、教会の鐘つきと聖歌うたいを兼ねていながら、その上に靴工を生業としていた。たいていの楽師がそうであるように（というのは、彼は鐘鳴らしだったから）、大酒飲みで、友だちと一緒に居酒屋に出かけては快くわれを忘れるのだった。

鐘つきという仕事は万聖祭の日には辛いものだ。それというのも、ほぼ一日中鐘を鳴らさなければならず、しかも翌日は死者の日になる。

実をいうと、彼はその町ばかりでなくその地域一帯の村々に住む住民を残らず自宅にたずね、寄付金を集めることで、辛い仕事の埋合せを受ける。このときには、住民

たちは自分たちに親しかった人々を思い出しては悲しい気持に浸っているので、死者のために鐘を鳴らしてくれた者には寛大に振舞う。世間で鐘鳴らしと呼ばれる男は、二スー銅貨や時によっては銀貨でポケットをふくらませて家に帰る。

＊＊＊

ある年のこと、ジャン・デウー（それがその男の名だった）は、聖堂区の住民たちの家をひと回りし、どの農家でも酒を飲んだので、ほろ酔い機嫌だった。

たまたま彼は自分と同じ年頃の二人の仲間に出くわし、ペタンク遊び（南仏の球戯、的球の近くへ球を投げて競う）を提案した。その提案が入れられ、三人はひっきりなしに荷車が通る道では邪魔が入るので、墓地の砂地の並木道へいった。

鐘つきは大酒をくらったあとだったので、眼があまりはっきりと見えず、あわて者がするように、球を抛った。そのために、球は墓に生えている高い草の中に入り込んで見えなくなった。

三人で球を探したがむだだった。

「どこに球があるかおれはちゃんと知っているんだ」ジャン・デウーはそう言うと、教会の門のそばの納骨堂の中に入っていき、頭蓋骨を取ってきた。

仲間たちが非難の声をあげ、そのような冒瀆をさせまいとしたが、酔払いはこう答えるのだった。
「死んでしまった、、、、、、、、、、奴は死んでいるのさ。死んだ人間が首を返せと言いにきても、おれはこわがらないぞ」
で、彼はしばらくこの新種の球で遊んだが、すぐにそれも最初の球と同じ運命になって、茨の中に迷い込んでしまった。
人でなしは蝶番の中から（彼は納骨堂のことをそう呼んでいた）二つ目の頭蓋骨を取りだした。だが、こんどばかりは友人たちがもうそれ以上遊ぶのはまっぴらだと帰ってしまった。彼は仲間たちに対してかんかんに腹を立て、乱暴にも二つ目の頭蓋骨を墓地の片隅に投げつけた。

＊＊＊

シャントルーの鐘つきは酒が好きだったが、だからといって身銭を切るようなことはしなかった。他人からおごってもらった方がよいと思っていたのだ。だから、彼はたんまり金を貯めこみ、おかげで菜園やちょっとした畑付きの一軒家を買い入れることができた。

彼はまるでいっぱしの地主のようだった。それにシャントルーでは、泥をもっている若者、つまり土地を所有している若者は安々と結婚相手を見つけられるのだ。

ジャン・デウーは小作人の娘に結婚を申し込んでいたのだが、その娘は仲々の別嬪だった。そうして彼は娘の承諾をえた。

婚礼はこの上なく華やかだった。三百人以上の人々が出席した。夜、食事が終ると、麦打場でダンスが始まった。

花嫁の両親の小作地を所有する地主の息子は、花嫁に付きまとって離れず花嫁としか踊らなかった。花嫁の方はとくに自分がちやほやされてみるとまんざら悪い気もせず、若者のお世辞をうっとりと聞いていた。

ジャン・デウーは、ダンスを知らない若者たちと相変らず酒を飲み、歌いつづけていた。

ふいに、酔払いたちのいる部屋に一人の男が入ってきて、新郎に面会を求めた。

「わたしはここだが、ご用の向きは何だね」

「二人の男があんたと話がしたいと言っている。男たちはフールの畑のわら敷の納屋の後ろにいる」

鐘つきは、てっきりそれがダンスを踊りたがっているよそ者にちがいないと思っ

た。田舎の結婚式ではよくそんなことがあるからだ。で、彼は二人に会いにいった。
　大きな外套ですっぽり身を包んだ二人の男が、鐘つきを待ちながら辺りを歩き回っていた。
　ジャンは二人の方へ歩いていったが、しかしすぐにぎょっとして後ずさりした。二人の男が外套を脱ぐと、首のない二つの骸骨になったのだ。骸骨が彼の手をつかんだのに、彼は逆らったり悲鳴をあげたりする気力もなかった。それほど彼はひどくおびえていたのだった。妖怪どもは彼を墓地へつれていった。
　午前二時ごろ、ダンスが終って、花嫁が夫を探したが見つからなかった。きっと物置で眠って酔いでもさましているにちがいないと思い、少しも気にかけなかった。花嫁はダンスを踊ってくれた若者の腕を借りて家へ送りとどけてもらった。
　翌日、子供たちが教理問答を習いにいく途中で、墓のそばにシャントルーの鐘つきの死体を発見した。彼は首を切られ、まるでペタンク遊びでもしようとするように、自分の首を手に握りしめていた。

黄金の足

　昔、並はずれて美しい婦人がいた。ある晩、この婦人がろうそくを持たずに家の階段から落ちて、足を折った。夫は医者を呼んだ。
「先生、こんばんは」
「こんばんは、ご主人」
「先生、妻の足を治療してもらいたいのだが。この手当のお礼には、お好きなだけ金銀を差しあげよう」
「ご主人、わたしにせよほかのだれにせよ、この足を治療できる者はおりません。切断しなければならないのです」
「よろしい、先生。お手並を拝見しよう」
　そこで医者は婦人の足を切った。夫は宝石商へ出かけて、妻のために一本の黄金の足を注文した。その足がそれはみごとに作られていたので、婦人はその足を使ってう

まく歩くことができ、杖を使わないでも望みのところへ出かけることができた。
七年後に婦人は死んだ。夫は妻をその黄金の足とともに埋葬するように命じた。夫の意志は実行された。
だが、埋葬が行われた日の夜に、召使がこっそり家をでた。彼は墓地にでかけ、婦人の遺骸を掘り返して黄金の足を奪うと、遺体をもとの場所にもどし、墓穴を埋めた。そうしてなにくわぬ顔でもどり、自分の衣裳戸棚の中に盗んだ足を隠した。彼が床につくと、すぐに墓地で叫び声が聞こえた。
「黄金を、黄金を、黄金の足を返して」
翌朝、朝のお告げの鐘が鳴ったとき、墓掘りが夫に会いにやってきて言った。
「おはようございます、旦那さま。わしは墓所からやってまいりやした。土の下でお眠りの旦那さまの奥さまが呼んでばかりいらっしゃるでね、《黄金を、黄金を、黄金の足を返して》と。奥さまがなにをお望みなのか知るために、どうかだれぞを墓所にやってくだせえまし」
夫は墓地に駆けつけた。
「妻よ、なにが望みなのだ」
「黄金を、黄金を、黄金の足を返して」

「妻よ、おまえが嘆くのはまちがっている。おまえを黄金の足と一緒に埋葬するようにわたしは命じたのだから」
「黄金を、黄金を、黄金の足を返して」
「妻よ、聞分けがないぞ。それ以上に言うことがないなら、帰るぞ。おまえのためにミサを行うとしよう」
夫は家に戻った。だが、一時間たってまた墓掘りがやってきて言った。
「ごめんくだせえまし、旦那さま。墓所からやってまいりやした。土の下でお眠りの奥さまが《黄金を、黄金を、黄金の足を返して》と叫んでばかりいなさるでね。奥さまがなにをお望みなのか知るために、どうかだれぞを墓所にやってくだせえまし」
夫は下女を墓地にやった。
「奥さま、お嘆きになるのはまちがいです。奥さまは黄金の足と一緒に埋葬されたのですから」
「黄金を、黄金を、黄金の足を返して」
「奥さま、聞分けのないお方ですね。これ以上におっしゃることがなければ、帰らせてもらいますよ。ご主人さまが奥さまのためにミサを行ってくださいます」
下女は家に戻った。だが、一時間たってまた墓掘り人がやってきて言った。

「ごめんくだせえまし、旦那さま。墓所からやってまいりやした。土の下でお眠りの奥さまが《黄金を、黄金を、黄金の足を返して》と叫んでばかりいなさるでね。奥さまがなにをお望みなのか知るために、どうかだれぞを墓所にやってくだせえまし」

　夫は例の召使を墓地にやろうと思った。

「旦那さま、とてもわたしにはその勇気がございません」

「行くのだ、臆病者めが」

「旦那さま、とてもその勇気はございません」

「行け、さもないと、銃で撃ち殺してくれるぞ」

やむなく召使は墓地へ出かけた。

「奥さま、何のご用でしょう」

「おまえに用があるのだよ」

婦人は墓穴から出てきて召使を土の下にさらっていき、そうして彼を食べた。

大食(おおぐら)いの娘

　昔、十八歳になる娘をもつ夫婦がいた。この娘ときたらひどく大食いで、ダンスにも美男子にもさっぱり興味を示さず、考えることといえば生(なま)の肉を食うことだけだった。ある日、パン地方の縁日の時期に、娘の父親と母親は必要があってアジャンの町へ出かけた。

「《大食(おおぐら)い》、わたしたちはアジャンへ縁日に出かける。留守番を頼むよ。その代りに、おまえの好きなものを土産にもって帰ろう」

「お土産は生の肉がいいわ」

　父親と母親はアジャンへ発った。二人は用事をすませたあと、その町の肉屋を一軒残らず駆け回り、肉を買おうとした。けれども、縁日には大勢の人々が詰めかけていたし、早々と買物をすませていたので、肉屋にはもう何ひとつとして売る物はなかった。陽が沈みかけた。《大食い》の両親は自分たちの村へつづく道を帰っていった。

「どうしたものだろう」と道々、二人は言った。「生肉(なまにく)を《大食い》に約束したのにアジャンの町のどの肉屋にも肉が見つからなかったからな」
　すると、妻が夫に言った。
「夜になったわ。この墓地に入りましょう。ここには今朝、死人がひとり埋葬されたのよ。それを掘り返して一切れ肉を切り取り、それを《大食い》にもっていきましょう」
　二人は墓地に入り込み、死者を掘り返し、その左足を切り取って家に帰った。
「さあ、《大食い》、ほら、生肉だ。縁日のお土産だよ」
　《大食い》は足の肉に飛びついて、最後の一かけらまで食べた。それが終ると、彼女は父親のナイフを取って骨を砕き、骨髄までしゃぶった。
　寝る時刻になった。その夜は一晩中、「わたしの足を返せ、わたしの足を返せ」という叫び声がこの家で聞こえた。
　翌日、父親と母親は《大食い》をつれて早くから家をでて、畑仕事をしにいった。昼食の時刻がきて、父親がナイフを忘れたことに気づいた。
「《大食い》、家へいってわたしのナイフを探してきてくれ」と父親が言った。
「そんな元気はないわ」

「行けと言っているのだ、いやなら、むりにも歩かせてやろうか」
《大食い》は立ち去った。家の中に入ると、暖炉の自在鉤に左足のない死人が吊り下げられているのに気づいた。
「《大食い》よ、火をつけて、湯を沸すのだ」
《大食い》は火をつけ、そうして湯を沸した。
「《大食い》よ、わたしの右足を洗ってくれ」
《大食い》は右足を洗ってやった。
「《大食い》よ、わたしの左足も洗ってくれ」
「死んだお方、あんたには左足がない」
「では、だれが奪ったのだ」
「知らないわ」
「わたしは知っているぞ。おまえの父親と母親がわたしを掘り返し、わたしの左足を切り取った。そうしてそれを食べたのが、おまえだ」
　そう言って、死者は大食いをとらえ、墓地の墓穴につれていき、娘を食べた。

＝生首に変ったパン＝

昔、二人の男がいた。二人とも同じ聖堂区に住む裕福な農夫で、仲のよい友だちのように見えた。ところが、実際にはたがいに相手の幸せなどほとんど望んでいなかった。一人はフランソワ・カボコといい、もう一人はエルヴェ・ケランドゥフという名だった。

ある日のこと、フランソワ・カボコがエルヴェ・ケランドゥフに言った。

「月曜日にラ・ロシュ＝デリアンの市（いち）にいかないか」

「いいとも」とエルヴェは答えた。「おれは仔馬を一頭買う必要があるので、市にいって必要な馬が見つかるかどうか見てみよう」

「ほほう、おれの方もそうなんだ。雌牛が一頭ほしい。よければ、一緒にいこうではないか」カボコが答えた。

「そいつは願ったり叶（かな）ったりだ」

「では、月曜日の朝早く、きみの家に立ち寄ることにしよう」
「うん、承知した。でも、市に朝早く着けるように、夜明け少し前にきてくれよ」
「よかろう。夜明け少し前に着くようにしよう」
で、フランソワ・カボコが月曜日の朝、まだ陽が昇らないうちにエルヴェ・ケランドゥフの家の戸を杖で叩き、二人は一緒にラ・ロシュ＝デリアンへの道をたどっていった。空がまだすっかり明るくならないうちに――そのときは十一月で、日中はごく短かったからだ――、二人がベルランケンヌの急な坂道を登っていたとき、カボコは突然ポケットからナイフを取りだして刃を広げ、ケランドゥフに向かって言った。
「最後のお祈りをするがいい、おまえも年貢の納め時にきたのだからな」
「きみがそんなふうにしておれを殺そうとするなんて、あろうはずがないよ、フランソワ・カボコ」
だが悪人は、それ以上ひと言も言わずたちまちエルヴェの心臓を突き刺し、即死させた。それからエルヴェの財布から金を奪い、道端の溝に死体を引きずり落としたあと、道を歩きつづけた。
しかしそのときから、彼の頭の回りを一匹の大きな蝿が飛び、ブンブン羽音を立てるのだった。追い払おうとしても、蝿がかならずしつこく舞い戻ってくるので、どう

してもそれから逃げることができなかった。カボコは腹を立て、ひどくののしった。だが、それもまったく徒労に終った。蠅は彼の頭の回りを飛んでブンブンと羽音を立てながら、相変らず彼のあとを追ってきた。彼にはそれが奇妙に思われた。

彼はラ・ロシュ＝デリアンに着き、ケランドゥフから盗んだ金でみごとな仔馬を買うと、それ以上町には足を止めずに取って返して家路についた。蠅は相変らず彼のあとを追ってきて、片時も休みなく彼の頭の回りを飛び、ブンブン羽音を立てるのだった。夜になっても蠅が離れないので、彼はまんじりともしなかった。そのとき彼は恐怖をおぼえ始め、こうつぶやいた。

「きっとこれはエルヴェ・ケランドゥフの魂なんだ。これからの残りの人生をこんな具合に蠅があとを追ってくるとしたら、おれはなんとみじめになるだろう」

翌日、彼はふだんの仕事に精をだし、畑に出かけていった。すると、蠅は相変らず彼につきまとい、どんなに努力してもつかまえられなかった。明くる日も同じことだった。毎日、毎晩が同じだった。そのために、彼は眠ることも食べることもできなかった。憂鬱（ゆううつ）になり心配にもなり、恐ろしいほどに痩（や）せた。ついに彼は意を決して司祭に会いにいき、一切を告白した。蠅の姿こそ見えなかったが、ブンブンという羽音は司祭にも聞こえるのだった。彼が自分の罪を告白し終えると、聴罪司祭は言った。

「その蝿はエルヴェ・ケランドゥフの魂にちがいない。彼の魂が何を望んでいるのかたずねてみるのだ。それがこうせよと言う通りにしてあげるがいい」
そこで、カボコは蝿にたずねた。
「言ってくれ、蝿よ、なぜおまえはそんなふうにおれのあとを追って、昼も夜も一瞬の休息さえ与えてくれないのだ。おまえの望みは何なのか。もしできるなら、話してくれ。そうすれば、おまえの要求することをしようではないか」
するとと蝿が答えた。
「おれはベルランケンヌの坂道での暗殺の仕返しをしなければならない。市の立つ日におれたちが一緒に昼食をするはずだった場所、あのラ・ロシュ＝デリアンでおまえがパンを食べるなら、その最初の一切れがおまえの死の原因となるだろう」
「よし、分かった。パンにしてもほかのものでも、そうやすやすとすぐにラ・ロシュ＝デリアンで食べてなるものか」
ラ・ロシュ＝デリアンにはかなりの金満家の伯父がいたのだが、その伯父がそれからほどなく、子供を残さずに死んでしまった。カボコも一族のほかの者たちと同じように葬式に招かれた。しかし彼が葬式に顔を出さなかったので、親戚筋の者たちは口々に言い合った。

「ほら、フランソワ・カボコを見ろ、自分の伯父さんの葬式にもこなかった。でも、伯父さんの財産分けのことになれば、ふん、そのときにはきっと家にじっとしているものか」

カボコの伯父が残した金と財産を相続人たちの間で分配する時がやってくると、ラ・ロシュ＝デリアンの公証人の家へ出向かなければならない日を、彼のところにも知らせてきた。はじめのうちは、わざわざでかける勇気がなかったので、家族の者に病気だと言わせた。彼の出席がどうしても必要だったために、別の日が選ばれた。今度ばかりは彼もでかけた。それぞれが自分の分け前を受け取り、万事が公証人の家で片付けられると、相続人一同はうち揃って町いちばんの宿屋で夕食をすることになっていた。だがカボコは、彼を引き止めようとするどんなに懇ろな頼みも振りきって、家に帰るためにすぐに発った。彼はパン屋で白パンを少々買い、この町を去ったら、歩きながら旅の途中で食べるつもりで、家をでるときにもってきた袋の中にそのパンを入れた。蠅は相変らず彼の頭の回りを飛び、ブンブンと羽音を立てていた。歩み進むにつれて、左肩に下げていた袋がいっそう重くなるような気がした。やがてそのうちに、袋の中にはパンではなくて何か大きな石でも入っているように思えてきた。

「これはどうしたことだ」と彼は心の中でつぶやいた。

思い切って袋を開いてパンを取りだしてみる勇気はなかった。彼がベルランケンヌの坂にやってくると、袋からポトリ、ポトリと血が踵に落ち始め、蠅はこれまで以上に彼の回りを飛び、ブンブンと羽音を立てるのだった。通りすがりの人々は、そんなふうに血がしたたり落ちるのを見て言った。

「おお、神さま、いったいあの男の袋には何が入っているのだ」

ある者が彼に言った。

「もし、あなた、そんなに血が出ているなんて、いったいあなたの袋には何が入っているのです」

カボコはひと言も答えず歩きつづけた。しかし自分が何かしらひどい恐怖に襲われているのが分かった。

少し先へいったところで、また人にたずねられた。

「そんなに血が出ているなんて、いったいあなたの袋の中には何が入っているのです。あなたは血まみれではありませんか」

彼はやはりひと言も答えなかった。しかし度を失って一目散に駆けだした。彼は捕えられ、袋を取り上げられた。袋を開けてみると、驚いたことに生首が入っていた。パンは人間の生首に変っていたのだった。

死者　184

「これはエルヴェ・ケランドゥフの首だ」だれかが叫んだ。「そうとも、彼の首だ。わたしにはよく分かる。この男が彼を殺したのだ。この男を警察に引き渡すべきだ」

　ラ・ロシュ＝デリアンの警官に通報され、カボコは牢獄に連れ去られた。彼は縛り首と火あぶりの刑の判決を申し渡され、その遺骸はさらしものにされた。

亡　霊

†

死者のミサ

昔、夫に先立たれた女がいた。女は友人や近所の人々に、慣習にならって夫の一周忌の法事を行うと知らせにいった。

その前日、いつものように女は床について寝た。だが、深夜になって目が覚めた。ちょうど冬だったので、ミサの式は夜明けに行われることになっていた。何時かわからなかったので、女は起きあがって窓のところへいき、外を眺めた。

教会は女の家のごく近くにあったせいで、まるでもう大ろうそくがミサのためにともされているように、教会のどの窓も明々としているのがわかった。女は急いで喪服を着て教会に出かけた。

女は教会に入ったが、居合わせた人たちのだれ一人として顔の見分けがつかなかった。いく人かの人々は、彼女と同じように、慣習通りに面にヴェールをかぶっていた。司祭はミサを行った。布施(ふせ)をするときになって、女は自分に金の持合せがないこ

とに気がついた。彼女は結婚指輪をはずし、布施の盆にそれを入れながら、翌日になれば司祭からそれを返してもらって代りに銀貨を一枚入れるつもりだといった。行け、ミサは終れり（イテ・ミサ・エスト）のあと女が去るとき、ミサの司宰者と二人の助司祭が門まで付き添った。司祭がだれだったのか、女には顔の見分けがつかなかった。家に戻ってみると、教会には人気がなく、すっかり元の暗闇に返っていた。陽がまだ昇っていなかったので、彼女はベッドにもぐって寝入った。

朝、女が眼をさますと、もう遅かった。彼女は近所の人々に会うごとに、どうして夫の一周忌のミサに顔を見せなかったのかとたずねられた。

「いたしましたとも」と女はいった。「ちゃんと列席しましたわ。その証拠に、わたしの結婚指輪がこの指にはもうないではありませんか。お布施のとき、お金の持合せがないことに気づいて、司祭さまにあれを差し出したのです。司祭さまは聖母さまの祭壇でミサをなさいました」

近所の人々がだれも教会であなたの姿を見かけなかったと言い張るので、女は主任司祭に会いにいったが、この主任司祭もミサの席で女を見かけなかったと断言した。で、教会に指輪を探しにいくと、亡霊の司祭がミサを行ったあの祭壇の石の中に指輪が嵌込まれているのが分かった。

けちんぼうな女

昔、たいそうけちんぼうな女がいて、自分が口に入れるパンを惜しがり、祈りの時間も惜しむほどだった。

女は夫を亡くした。夫が死んでしばらく経って、豊熟祈願日の儀式が行われた。行列は夜になって進み、少なくとも二時間はつづく。というのも、多くの聖堂区では、行列は村々を通り、多くの畑を横切っていくからだった。けちんぼうな女は時間をむだにしたくなかった。そこで、彼女はほかの人々のあとについていく代りに、真直ぐに自分の畑へいった。陽が昇るとすぐに仕事を始めるつもりだった。プレ＝ラベという所の付近を通りかかると、死者たちの行列に出くわした。死者たちもまた彼らの豊熟祈願日の儀式を行っているのだった。

女は跪(ひざまず)いて行列をやりすごそうと思い、自分の眼の前を死衣を着て連禱(れんとう)を唱えながら行列がすぎていくのを眺めた。その行列は聖堂区のものよりはるかに立派だった。

というのも、生きている人間の行列よりも死者たちの方が大勢だったからだ。それでもようやく、その行列は通りすぎた。

　夫を亡くしたその女が立ちあがろうとしたとき、遠く離れてほかの者たちのあとについてくる哀れな死者が眼についた。だが、その死衣はぼろぼろで、茨(いばら)や棘(とげ)のそばを通るたびに死衣の切れ端が引きちぎれるといった有様だった。

　その死者が自分の前にやってきたとき、女はそれが自分の夫だとわかった。

「おお、まあ、可哀そうに」と女は夫に言った。「なぜあなたは行列のあとから歩いているの。いったい、だれが他人さまのすぐあとから歩けなくさせているの」

「浅ましい女よ、おまえは、どんな小さな茨にさえぼろぼろに引きちぎられてしまうような、すっかり擦(す)り切れた布に包んでわたしを埋葬してくれた。上等な布にくるまれたほかの死者たちは、やぶを突っ切っても引き裂かれることがない。彼らが着ている布地は丈夫だから。それにひきかえこのわたしときたら、引っかからないように避けようとして時間を余計にかけざるをえない始末。そんなわけで、わたしは行列のびりにいるのだ」女は夫の安息のためにミサを行ってもらった。それ以後この地方では、死者を埋葬するときには良質の死衣に包むようになったという。死者が死衣の切れ端をやぶに残さずに、豊熟祈願日の行列に加わることができるように。

亡霊のミサ

万聖節の夜、プレヴノンの教会で一人の女が眠り込んでいたのに、番人は女の姿が眼に入らなかったので、扉に鍵をかけた。

女は眼を覚まして、こんな時刻に教会の中にいるのにわれながらひどく驚いた。だが、女の驚きはそれで終らなかった。真夜中に、祭壇のろうそくがひとりでに点（とも）ったかと思うと、一人の司祭がミサをあげるときのような衣を着けてこちらへ歩いてくるのが見えたのだ。

司祭は祭壇の前で一礼すると、信者席の方を振り返って三度こういった。

「だれかわしのミサに答えてくれる者はいないか」

女はあまりの恐ろしさに口を開く勇気もなかった。司祭はろうそくが消えかかるころ聖具の間（サクリスティ）へ引きさがっていった。

扉が開くと女はすぐに司祭館へ駆けつけ、自分が見聞きしたことを修道院長に話し

て聞かせた。

「それは本当に確かなんだね」と修道院長はいった。「その話が本当なら、あんたは煉獄にいる魂にそれはよい供養ができるのだよ。まだ十歳にもならないあんたの子をつれて教会へいくのだ。その子がミサに答えると、祭司はお礼になにを進ぜようかとたずねるだろう。そうしたら、天国が欲しゅうございますと子供にいわせるがいい」

次の夜、女は子供と一緒に教会に閉じ込もった。真夜中に、前夜と同じように司祭がやってきて、ゆっくりとした重々しい声でいった。

「だれかわしのミサに答えてくれる者はいないか」

「わたしがお答えいたします」といって子供が進みでた。

「坊や、おまえさんがの。では、ここへおいで」

男の子はミサの相手をした。それがすむと、司祭は子供の方を振り返った。

「世話になったのう。この二十五年のあいだ、毎夜わしはここへやってきたのだが、おまえさんのおかげでようやく救われた。坊や、お礼に何を進ぜようかの」

「天国が欲しゅうございます」

「三日後に、おまえは天国へいくことになろう」

さて、その三日目に子供は死んだ。

水晶の城

昔、二人の貧乏人がいた。息子六人と娘一人を抱える夫と妻だった。いちばん末の息子のイヴォンと娘のイヴォンヌは、少し頭が鈍かった。いや、少なくともそのように見えたので、兄たちは二人をしつこくからかうのだった。気の毒なイヴォンヌはそれがひどく辛く、ほとんど笑うこともなかった。毎朝、兄たちは餌だといってそば粉のクレープとか大麦のパンの一かけらをもたせて、妹を広い荒野へいかせ、雌牛や羊の番をさせた。夕方、陽が沈むころにならなければ娘は戻らなかった。ある朝のこと、いつものように娘が雌牛と羊を牧草地へつれていく途中で、一人の若者に出会った。その若者がたいそう美しく輝かんばかりだったので、娘は太陽の化身を見ているような気がした。若者は娘の方に進み寄ると、こうたずねた。

「娘さん、わたしと結婚してくださいませんか」

イヴォンヌはひどく驚き、どう答えたらよいかすっかりどぎまぎしてしまった。

「わたしには分かりませんわ」娘は眼を伏せながらいった。「家では、かなり辛い仕打ちを受けていますから」

「では、よく考えてみてください。明日の朝、同じ時刻に、あなたが通りかかるときにここでまたお会いして、ご返事をいただきましょう」

美しい若者は、そういって姿を消した。その日は一日中、娘は若者のことばかりを考えていた。日が暮れると、娘は家畜を追い、陽気に歌をうたいながら家に戻った。そんな様子を見てみんなは驚き、口々にたずね合うのだった。

「あんなふうに歌うなんて、いったいイヴォンヌに何があったのだ」

娘は雌牛と羊を家畜小屋に戻すと、母親のところへいき、思いがけない出来事を話し、翌日どう答えたらよいのかとたずねた。

「おばかさんだね。何という作り話をするんだい。それに、結婚して幸福になろうなどと思うのは料簡ちがいというものさ」

「いま以上に不幸には決してなりませんわ、お母さん」

母親は肩をすくめると、娘に背を向けた。

翌朝、陽が昇るとすぐに、イヴォンヌはいつものように雌牛と羊をつれて広い荒野へ出かけていった。前の日と同じ場所で、娘は美しい若者に出会った。すると、若者

はまた娘にたずねた。
「ところで、わたしの妻になってくれますか」
「なりたいと思います」娘は顔を赤らめながら答えた。
「では、ご承諾を求めにあなたのご両親のところまでお供いたしましょう」
そうして若者は、娘とともに両親のもとへいった。父親と母親それに兄たちも、こんなにも美しく、こんなにも晴れやかに着飾った貴人が、哀れな羊飼いの女と結婚したがっているのを見てびっくりしたが、だれ一人反対するつもりはなかった。
けれども、母親がたずねた。「でも、あなたはどなたですか」
「婚礼の日になれば、おわかりになるでしょう」貴人は答えた。
式の日取りが決まると、貴人はあっけにとられているみんなを尻目に発っていった。そこで、みんなは婚礼の準備に大童（おおわらわ）になった。
約束の日に、貴人は自分とほぼ同じくらいに美しい、花婿に付き添う少年をつれてやってきた。二人は、四頭のすばらしい白馬をつないだ美しい金色の馬車に乗っていた。その上、彼らばかりでなくその馬車や馬までもたいそう装いをこらしていたので、まるで太陽のように、行く道のすべてを照らしていた。
婚礼の式がいとも華やかに、いともおごそかに行われると、貴人は食卓を立って、

自分の屋敷に案内するので馬車に乗るようにと花嫁にいった。イヴォンヌは衣服を持っていきたいので、ほんの少し猶予(ゆうよ)をくださいと頼んだ。
「それには及びません。わたしの屋敷にいけば、好きなだけ見つけられるでしょうから」と貴人はいった。
そこで花嫁は馬車に乗って夫の横に坐った。出発するときになって、兄たちはたずねた。
「妹を訪ねたくなったときには、どこへいけば会えるのでしょう」
「黒海の向こう側にある水晶の城で会えるでしょう」貴公子はそう答えると、すぐさま出発した。
およそ一年たって、六人の兄弟は、妹から何ひとつ便りがないので、それに妹がその夫とどんな具合に暮らしているかを知りたい気持もあって、妹を探しに出かけることにした。そこで上の五人の兄弟たちは美しい馬に乗って出発した。末の弟のイヴォンも兄たちについていこうとしたが、兄たちはこの弟を留守番させた。
兄弟たちは、たえず朝日の方へ向かって、そうしていたるところで水晶の城のことをたずねまわりながら、歩きに歩いた。だが、水晶の城がどこにあるのか、だれ一人知る者がなかった。多くの国々をめぐり歩いたあと、ある日ついに兄弟たちは、周囲

が少なくとも二百キロメートルはある大きな森のはずれにたどり着いた。彼らはたまたま出会った年老いた樵夫（きこり）に、水晶の城へいく道を教えてくれないかとたずねた。その樵夫はこう答えた。「森の中には、《水晶の城の並木道》という大きな並木道がある。たぶんその道があなたがたのいわれる城に通じているのだろうて。というのは、これまでわしはそこにいったことがないからな」

五人の兄弟たちは森の中に入っていった。彼らが奥へいかないうちに、頭上でものすごい音が聞こえた。それは、まるで雷と稲妻をともなった嵐が木々の天辺（てっぺん）を過ぎていくようだった。彼らは思わず尻込みした。馬も、暴れるのをなかなか抑えられなかったほど、ひどくおびえた。しかし、音と稲妻がまもなく止んだので、彼らは道を進みつづけた。夜が迫り、彼らは不安になってきた。森にはあらゆる種類の猛獣がたくさんいたからだ。兄弟たちの一人が、水晶の城かほかの住いが見えないかどうか、ためしに木の上に登った。

「何が見える」兄弟たちが下からたずねた。

「見えるのは木また木ばかり、……どこを向いても、ずっと遠くを見ても木だけだ」

彼は木から下りてふたたび歩きだした。しかし次の夜、森の中をどこへ向かったらよいか分からなくなった。兄弟たちの一人がまた木に登った。

「何が見える」兄弟たちがたずねた。
「大きな火が見えるぞ、あそこに」
「その火の方向に帽子を投げて、下りてくるんだ」
　そして彼らは、そこにはきっと人家があるにちがいないと信じて、火のある方向へ進んでいった。だが、しばらくするとまたしてもものすごい物音が聞こえた。それは最初の音よりも大きかった。木々がぶつかり合い、バリバリと音を立てて裂け、折れた梢や木片が四方に飛び散った。しかも、雷と稲妻だ……それは恐ろしいものだった。それからふいに静けさが戻り、夜はふたたび静まり返った。
　兄弟たちはまた歩きだし、探し求める火にまでたどり着いた。長いぐらぐらした歯を生やし、ひげのある老婆がたくさんの薪をくべながら、火を絶やさないようにしているのだった。兄弟たちは老婆のいるところまで進み、長男がこんなふうに話した。
「こんばんは、お婆さん。水晶の城へ行く道を教えていただけませんか」
「ああ、いいとも。水晶の城がどこにあるかわたしは知っているよ」老婆は答えた。
「でも、わたしの上の息子が戻ってくるまで待っているがいい。そうすれば、息子が水晶の城についてごく新しい情報をおまえさんがたに教えてくれるだろうよ。だっ

て、息子は毎日あの城に出かけているのだからね。息子はいま旅に出ているけれども、まもなく戻ってくるはずだよ。たぶん森で、おまえさんがたは息子に会ったはずなのに」

「お婆さん、森ではだれにも会いませんでしたよ」

「では、息子の声を聞いたにちがいないさ。息子が通るところにいると、いつも声が聞こえるからね。息子ときたら……そら、息子がやってくる。聞こえるだろう」

するとと事実、森の中で彼らが二度聞いたものと同じ大きな音が聞こえてきた。しかも、前よりもはるかに恐ろしい音だった。

「そこの木の梢の下に隠れるがいい。息子は、戻ってくるときにはいつだってひどく腹を空かせているからね。おまえさんがたを食べたがるのではないかと心配だ」

五人の兄弟ができるだけたくみに姿を隠すと、空から巨人が降りてきた。巨人は足が地面に着くか着かないうちに匂いを嗅ぎ始めながらいった。

「おっ母ぁ、ここはキリスト教徒の匂いがするぞ。奴らを食べなけりゃならん。おれはひどく腹が空いているからな」

老婆は太い棒を取り、巨人にその棒を見せながらいった。

「おまえときたら、いつだって何でも食べたがる。でも、この棒に注意をし。せっか

くわたしに会いにきてくれたわたしの甥たちに、いいかい、妹の息子たちなんだよ、あんなにかわいくておとなしい子供たちに指一本でも触れてごらん、ただじゃおかないよ」

巨人は老婆に脅かされると震え上がり、自分の従兄弟たちには指一本触れないと約束した。

そこで老婆は、五人の兄弟たちに姿を現わすようにいい、息子に五人を紹介した。巨人はいった。

「なるほど、これはかわいい。これがおれの従兄弟たちか。それにしても、おっ母あ、なんて小さいのだろう」

結局、従兄弟たちだというわけで、巨人は彼らを食べないことにしてくれた。

「おまえはこの子たちに指一本触れないだけでなく、この子たちの役に立ってもあげなければならないよ」と巨人の母親はいった。

「おれは何をしてやらなければならんのか」

「この子たちを水晶の城に案内してあげるがいい。この子たちは城にいる妹に会いにいきたがっているんだよ」

「水晶の城までは案内できないが、かなりのところまでなら喜んで連れていってやる

さ。そうすれば、見当もつくだろう」
「ありがとう、従兄くん。ぼくたちもそれ以上のことは頼まないよ」と五人の兄弟はいった。
「では、そこの火のそばに寝てぐっすりと眠るがいい。明日の朝早く発たなければならんからな。時間になったら、おれが起してやるさ」
五人の兄弟は火のそばで、外套にくるまって横になり、眠っている振りをしたが、実際には眠っていなかった。というのも、従兄の巨人の約束をあまり信じられなかったからだ。一方、巨人は夕食にかかり、一口ごとに一頭の羊をぺろりと平らげていった。
真夜中ごろ、巨人は五人の兄弟を起していった。
「さあ、起きるのだ、従弟たち。出発する時間だ」
巨人は火のそばの地面に大きな黒い布を広げ、五人の兄弟に馬にまたがってその布に乗るようにいった。五人はその通りにした。すると巨人は火の中に入り、母親は火を絶やさないように薪をたくさんくべた。炎が大きくなるにつれて、兄弟たちがきたときに森で聞いたのと同じような音がしだいに高まり、五人が乗っている布は人と馬もろともに、地面から少しずつ持ち上がっていった。巨人の服が燃えつきると、巨人は

大きな火のかたまりの形になって空中に舞い上がった。巨人につづいて黒い布も、五人の兄弟と馬を乗せて舞い上がっていった。こうして五人は、空中を突っ切って一緒に旅にでた。しばらくすると、黒い布は五人の兄弟や馬とともに広い草原に下降した。その草原の半分は不毛で、焼き払われていたが、あとの半分は肥沃で豊かに高く伸びた牧草に蔽われていた。不毛で焼き払われた部分の平原には、丸々と肥えて艶のよい馬の群れがいた。反対に、豊かに牧草が茂った部分にはいかにも見すぼらしくやせ細り、辛うじて立っているもう一群れの馬が見えた。馬たちはたがいに争い、相手を食べようとしているのだった。

巨人、いや火のかたまりは、この平原で五人を下ろすと、さらに道を進んでいきながら、こういった。

「これで、おまえたちには水晶の城へいく手がかりが得られた。今こそできるだけ難関を突破するようにするのだ。なぜなら、おれはこれ以上に遠くまでおまえたちを連れていくわけにいかないからだ」

馬は地上に降りたときに死んでしまった。したがって、五人はいまや徒歩だった。彼らはそれぞれがまず、不毛の平原の部分に見える美しい馬のうちの一頭をつかまえようとした。だが、一向にうまくつかまらなかった。そこで、仕方なくみすぼらしく

やせ細った馬で我慢し、それぞれに馬をつかまえて飛び乗った。しかし馬は、平原の一部を蔽っているはりえにしだややぶの中を抜けて彼らを乗せていくうちに、すっかり傷つき、血まみれになって彼らを地面に打ち倒した。こうして、ついに彼らはほとほと困り果ててしまった。

「どうしよう」

「家に戻ろう。あの呪われた城にはとうていたどり着けるはずもない」と兄弟たちの一人がいった。

「まったく、それが最善の道だ」ほかの兄弟たちが答えた。

　彼らはもと来た方へ引き返した。しかし、火を絶やさないように守っていた老婆とその息子の巨人に出会った場所だけは、二度と通らないようにした。

　いく度となくひどい目にあいながら、くたくたに疲れ果てて、やっとの思いで家に着くと、彼らは旅の途中で起ったことを残らず話した。末の弟のイヴォンはいつものように炉の片隅の丸い石の上に腰掛けていたが、兄たちの冒険話や、さんざんひどい目にあいながら結局は妹にうまく会えなかった話を聞くと、こういった。

「こんどは、このぼくが冒険に挑（いど）んでみよう。それにぼくは、妹に会えなければ二度と家には帰ってこないつもりです」

「おまえが？　ばかな」兄たちの一人が肩をすくめていった。
「ええ、ぼくがやってみます。いいですか、妹のイヴォンヌがどこにいようと、かならず会ってみせます」
蹄葉炎にかかった老いぼれ馬、正真正銘の駄馬を一頭だけもらって、彼は一人で出かけた。
彼はたえず朝日の方に向かっていき、兄たちと同じ道をたどり、同じように森へやってくると、水晶の並木道の入口で老婆に出会った。老婆は彼にたずねた。
「そんなふうにして、どこへおいきだい」
「お婆さん、妹に会いに水晶の城へいくところです」
「おやおや、では、いいかい、この道ではなくてあの道を、広い平原に出るまでいくがいい。それから、土の黒い道が見えるまでその平原の縁をたどっていくのだ。その道を通ってどんどんいきなされ。何が起っても、何を見たり聞いたりしても、たとい道が火につつまれていても、何ごとにもおびえず、たえず前方をまっすぐに歩いていけば、水晶の城に着くはずだ。そうすれば、妹さんにも会えるだろうよ」
「ありがとう、お婆さん」イヴォンはそう答えると、老婆が教えてくれた道を進んでいった。

ほどなく老婆の話にあつた平原に出たので、彼がその平原の縁に沿っていくと、黒土の道が見えた。彼は老婆の助言に従ってその道を選ぼうと思ったが、道の入口はもつれ合った蛇がうじょうじょしていたので、ぞっとして一瞬ためらった。彼が乗っていた馬も、その道を進ませようとしてもおびえて後ずさりするのだった。どうしたらよいだろう、彼はつぶやいた。でも、ここを通らなければならないと言われたではないか。

彼は馬の横腹に拍車をかけて、蛇と黒土の道に入っていった。だが、たちまち蛇が馬の脚に巻きつき噛んだので、即座に馬は倒れて死んだ。こうして哀れなイヴォンは、自分の囲りでヒューヒュー音を出しては脅かすように鎌首を持ちあげる恐ろしい爬虫類のただ中を、徒歩で進んだ。しかし彼はそのために勇気をなくしはしなかった。歩きつづけてついに道のはずれまでたどり着いてみると、何の痛みも感じなかった。恐怖を感じただけですんだのだった。

そのとき彼がいたのは大きな湖のほとりだったが、対岸に渡ろうにも小舟一隻すら見当らなかった。それに彼は泳げなかったので、いっそう困り果ててしまった。「どうしたらよいのだろう」と彼はつぶやいた。「といって、いまさら引き返すのもいやだ。えい、どうなろうと、渡ってみよう」

そこで彼は意を決して水の中に入った。最初は膝（ひざ）まで、それから腋（わき）の下、顎（あご）、ついに頭の上までといった具合に水に浸っていった。何が何でも彼が進みつづけると、とうとう苦もなく湖の対岸にたどり着いた。

水から上がると、両側の縁にずっと並び茂る棘（とげ）と茨（いばら）だらけの、狭くて薄暗い、奥深い道の入口に彼はいた。棘と茨は道の両側の大地に根を下ろしているのだった。「まさかこんなところを通れるわけがない」と彼はつぶやいた。けれども彼はひるまなかった。四つん這いになって棘の下にそっともぐり込み、蛇のように這い、ついに通り抜けた。そのときの彼の有様はどうだったか。ああ、体中が引き裂かれ、血まみれになり、しかも服の切れ端ひとつ身についていなかった。だが、ともかく彼は道を通り抜けたのだ。

やや遠くに、みすぼらしくやせ細った一頭の馬が全速力で自分の方にやってくるのが見えた。馬は彼のそばにくると、まるで自分の背に乗れとすすめるようにぴたりと止まった。彼はそのとき、それが死んだものと思っていた自分の馬であることがわかった。生きている馬に再会できて大いに彼は喜び、その背に乗ってこういった。「わたしの馬よ、おまえに多くの恵みがありますように。なぜなら、わたしはくたくただから。もう精根（せいこん）尽き果てた」

彼らが進みつづけると、大きな岩のある場所に着いた。その岩はほかの二つの大きな岩の上に乗っているのだった。馬が足で上の岩を蹴ると、岩はたちまちぐらついて地下道の入口が見えた。中から声がもれてくるのが聞こえた。「馬を下りて入ってくるがいい」とその声はいった。

彼はその声に従って馬を下り、地下道に入っていった。最初は耐えがたい臭い、あらゆる種類の毒蛇の臭いで息が詰まった。その上、地下道はひどく暗かったので、彼は手さぐりでなければ進めなかった。しばらくして、背後でものすごい音が聞こえた。それはまるで悪魔の一隊が彼をめがけて押し寄せてくるようだった。たぶんここで死なねばならないのだろう、彼はそう思った。それでも彼はできるだけ前へ進みつづけた。ようやく前方に小さな光があらわれたので、彼は元気づけられた。すさまじい音は相変らず彼の背後で増大し、しかも近づいていた。だが、彼が進むにつれて光もまた大きくなっていった。やっとの思いで彼は地下道から無事に脱けだした。

すると彼は十字路に立っていた。で、彼はまたもや困惑した。どの道を選んだものか。彼は地下道に向かい合った道をたどり、前方へ真直ぐに歩きつづけた。その道には門がたくさんあって、それも丈が高くて並大抵では越えられなかった。門を開けられないので、柱をよじ登って乗り越えていった。こんどは道が下り坂になり、それが

終ったところではすべてが水晶でできているように思われた。彼の眼には、水晶の城、水晶の空、水晶の太陽が見えた。要するに、彼の眼に見えるものはすべてが水晶でできていた。「話では、妹が住んでいるのは水晶の城ということだ。では、きっとこれでわたしの旅と苦労も終りにさしかかっているにちがいない。というのも、これこそまさしく水晶の城なのだから」彼はうれしそうにつぶやいた。

彼は城の近くにきていた。城は実にみごとで、しかも光に輝いているので、眼もまばゆいばかりだった。彼は中庭に入っていった。そこは何もかもがいかに美しく光輝いていたことか。城にはたくさんの門が見えるのだが、そのどれもが閉じていた。彼は換気窓から地下室にうまくもぐり込み、そこから一階へ上がっていくと、素晴らしく光輝く大広間にでた。六つの扉がこの広間と通じていて、彼が触れるとひとりでに扉は開いた。この最初の部屋から第二の部屋へ通ると、そこはさらに立派だった。ほかの三つの扉が次々に続き、さらにほかの三つの部屋に通じていたが、そのどれもがほかの部屋よりいっそう美しかった。最後の部屋に入ると、美しいベッドで妹が眠っているのが見えた。感歎のあまり身じろぎもせず、彼はしばらくじっと妹を眺めていた。それほど彼は妹を美しいと思ったのだった。だが、妹は眼を覚まさなかった。夜になった。すると、だれかがたえず鈴を鳴らしながらこちらへやってくる足音のよう

なものが聞こえた。やがて一人の美しい若者が入ってきて、真直ぐにイヴォンヌが寝ているベッドの方へいき、ピシャリピシャリと妹を平手打ちにした。それでも妹は、一向に眼を覚まさず身動き一つしなかった。すると、その美しい若者もベッドに入り、妹と並んで寝た。イヴォンは自分が立ち去るべきか、それともそこにいるべきなのか分からずに、ひどく困惑してしまった。このままここにいようと彼は決めた。というのも、その若者が妹を扱う様子が奇妙に思えたからだった。若い夫もその妻の横で眠り込んでしまったのだ。さらにイヴォンが驚いたことに、城の中では物音一つ聞こえなかった。しかもどうやら何も食べないように思われた。彼自身にしても、ひどく腹を空かしてやってきたのに、いまはもうまったく食欲がわかなかった。深い静けさの中に夜が更けていった。夜が明けると、イヴォンヌの夫は眼を覚まし、またしてもピシャリピシャリと妻の頬に三度平手打ちを与えた。しかし彼女はそれに気づかないらしく、相変らず眼を覚まさなかった。夫の方はそれからすぐに出かけていった。

こういったことすべてにイヴォンはすっかり驚き、部屋の片隅でずっと沈黙を守っていた。妹は死んでいるのではないかと思うと不安だった。ついに彼は、そのことを確かめるために妹に接吻することにした。すると、妹は眼を覚まし、眼を開き、自分のそばに兄の姿を見て叫んだ。

「まあ、懐かしい兄さん、お会いできるなんて本当に嬉しいわ」
　二人はやさしく抱きあった。
　そこでイヴォンがイヴォンヌにたずねた。
「で、おまえの夫はどこにいるんだね」
「旅に出ているの」
「長いあいだ家を留守にしているのかい」
「いいえ、とんでもない、長いことではありません。あの人はつい今しがた出かけたばかりですわ」
「彼と一緒にいておまえは幸せでないのかい」
「あの人と一緒にいられてとても幸せよ」
「でも、きのうの夜、着いたときに三度、それに今朝出かける前にまた三度、彼がおまえを平手打ちするのを見たんだよ」
「まあ、何ということをおっしゃるの。平手打ちだなんて。あの人は夜と朝にわたしに接吻してくれるんだわ」
「奇妙な接吻だな。だが、とにかく、おまえが不満に思わないのだから……。ところで、いったいここでは食事をすることがないのかい」

「お兄さん、ここにきてから、空腹も渇きも、寒さも暑さも、どんな欠乏や不満もまるで感じなくなったの。お兄さんはどう、お腹が空いていて」
「いや、本当にそうだ。それでわたしも驚いているんだよ。この美しい城には、おまえとおまえの夫しかいないのかい」
「まあ、いますとも。ここには人がたくさんいるのよ。ここに着いたとき、城にいる人たちみんなに会ったわ。でも、その後は一度も会っていないの。禁じられていたのに、わたしが話しかけてしまったからよ」
二人は城を歩きまわったり、自分たちの両親や故郷やそのほかのことをお喋りしてその日を一緒にすごした。夜になって、いつもの時刻にイヴォンヌの夫がやってきた。若者は妻の兄だとわかると、再会できたことを喜んだ。
「では、義兄さん、わたくしたちに会いに来てくださったのですね」と夫は言った。
「そうだとも。大して苦労がなかったと言えば嘘になるがね」
「そうでしょう。だれでもここまで来ることができないのですから。でも、家にお帰りになるときはもっと簡単ですよ。厄介な道はわたしがご案内しますから」
イヴォンは数日間、妹と共にいた。彼の義弟は毎朝どこへいくとも言わず、日中をずっと留守にした。そんな振舞いを不審に思ったイヴォンは、ある日、妹にたずねた。

「いったいおまえの夫は、毎朝あんなふうにしてどこへ出かけるのだ。それに彼の仕事は何なのだ」
「知らないわ、お兄さん。そのことについては何ひとつ話してくれたことがないの。わたしの方からあの人にたずねたことがないのも事実よ」
「そうか、彼にお供をさせてほしいと頼んでみたいものだ。毎日あんなふうにして彼がどこへいくのか、知りたいからな」
「ええ、お兄さん、あの人に頼んでみるといいわ」
翌朝、イヴォンヌの夫が出かけようとしていたとき、イヴォンは彼にいった。
「ねえ、きょうはあなたのお供をさせてもらって、この国を見物したり新鮮な空気を吸ったりしてみたいのだが」
「いいですとも、お義兄さん。でも、何ごともわたしのいう通りにしていただくという条件つきですよ」
「約束しよう、何ごともあなたの指図を受けると」
「では、よくわたしの言うことを聞いてください。まず、あなたがどんなことを見たり聞いたりしても、何ひとつ触れず、ただわたしにだけ話しかけることです」
「何ひとつ触れず、ただあなたにしか話しかけないと約束しよう」

「結構です。では、出かけましょう」

そこで二人は連れ立って水晶の城をでた。はじめは狭い小道を歩いたが、その道は二人が横に並んでは歩けなかった。イヴォンヌの夫が先に立って歩き、イヴォンはそのすぐあとからついていった。こうして二人は、かさかさに乾き焦げついた、大きな砂地の平野にでた。ところが、そこには丸々と肥って艶のいい雄牛と雌牛が砂の上に寝そべり、おとなしく反芻していて、いかにも幸福そうに見えた。それを見てイヴォンはひどく意外に思った。だがそれでも、彼はひと言もいわなかった。

さらに進むと、もう一つの平野に着いた。そこには高く豊かに茂った牧草がたっぷりとあるのに、そのくせみすぼらしくやせ細った雌牛や雄牛がいて、たがいにいがみ合っては哀れを催すような鳴き声を出すのだった。イヴォンはこうしたことがどれもひどく奇異に思えてならなかったので、義弟にたずねた。

「これはいったい、どういうことなのだろう。こんなことは見たことがない。砂と石しかないところには、血色がよくて脂肪で色艶のよい雌牛と雄牛がいて、一方、腹まで牧草に包まれるような美しい牧草地では、雌牛と雄牛が気の毒なくらいにやせ細っていて、いまにも飢え死にしそうな様子だ」

「それはこういうことなのですよ。かさかさに乾いた砂地の平野にいる肥って艶のあ

る雌牛と雄牛は、神さまが作った運命と身分に甘んじて他人の幸福を羨望などしない貧しい人々です。腹まで牧草に包まれるような牧草地にいて、始終たがいにいがみ合い、いまにも飢え死にしそうに見えるみすぼらしい雌牛と雄牛は、自分がもっているものだけに決して満足せず、他人を犠牲にしても富をかき集めようといつも躍起になり、たえず角突き合せていがみ合う金持なのです」

さらに進んでいくと、小川のほとりに二本の木が見えた。二本の木はたがいに激しくぶつかり合い殴り合い、木の皮の切れ端や木片が遠くへ飛び散るほどのすさまじさだった。イヴォンは手に棒をもっていたので、二本の木のそばにいくと双方の喧嘩相手のあいだに棒を差し入れながらいった。

「そんなふうにたがいに虐待し合うなんて、いったいどうしたことなのだ。傷つけ合うのは止めるがいい、そして平和に暮らすのだ」

彼がこういい終るか終らないうちに、驚いたことに二本の木はたちまち二人の人間に、男と女に変り、口々にこういうのだった。

「あなたに祝福あれ。わたしたちがこんなふうに激しく殴り合うようになってから三百年も過ぎました。わたしたちに同情してくれる人も言葉をかけてくれる人もいませんでした。わたしたちは夫婦で、現世にいたときにはたえず口喧嘩をし合い、殴り合

っていました。そこで神さまはわたしたちを罰するために、だれか慈悲深い人が同情してやさしい言葉をかけてくれるまで、ここでも殴り合いをつづけるようにわたしたちに言い渡されたのです。あなたは先ほどのように振舞い話しかけて、わたしたちの責苦を終らせてくださいました。これからわたしたちは天国にまいります。いずれそこであなたにまたお目にかかれるものと信じています」

　そうしてその夫婦はすぐに姿を消した。

　そのときイヴォンは、すさまじい音、叫び声、呪い、吠え声、歯ぎしり、鉄鎖の音を聞いた。それは血も凍るほどだった。

「これはどうしたことか」彼は義弟にたずねた。

「ここは地獄の入口なのです。しかしわたしたちは、これ以上先に一緒にいくわけにはまいりません。なぜなら、あなたはわたしに背いたのですから。旅のあいだわたしよりほかのだれにも触れず話しかけないよう、わたしはたしかに忠告しましたね。それなのにあなたは小川のほとりで殴り合う二本の木に話しかけ触れてしまいました。妹さんのところへお戻りなさい。わたしは先へ歩きつづけましょう。いつもの時刻に帰るつもりです。そうしたら、お家へ帰る安全な道にあなたを連れていくことにしましょう」

イヴォンは一人で、すっかり恥じ入って水晶の城に戻っていった。一方、彼の義弟は先へ歩きつづけた。

妹は兄が戻ってきたのを見ていった。

「もう戻ったの、お兄さん」

「ああ、そうだよ」彼はすっかり打ちしおれた様子で答えた。

「で、一人で戻ったの」

「ああ、一人で戻ったよ」

「きっと、わたしの夫の言いつけに何か背いたのね」

「そうだ、わたしは小川のほとりで激しく殴り合う二本の木に話しかけ、それに触れてしまった。それでおまえの夫は、城に帰らなければならないとわたしに言ったのだ」

「それならば、あの人がどこへいくのか知らないのね」

「ああ、どこへいくのかわからない」

夕暮れ時に、いつもの時刻にイヴォンヌの夫が戻り、イヴォンにこういうのだった。

「あなたはわたしとの約束に背きました。何もしないようにとのわたしの忠告、何も

しないとのあなたの約束に反して、あなたは話しかけ触れました。これであなたは、ご両親に会いにまたほんの少しお国に戻らなければなりません。まもなくここに帰ってくるのです、そのときこそ永久に」

イヴォンは妹に別れを告げた。すると彼の義弟は、彼が国に帰れるように安全な道に連れていっていった。

「もう心配せずにいってください。またお会いしましょう。ほどなくあなたは戻っておいでexcept でしょうから」

イヴォンは義弟に連れてきてもらった道から歩きだした。そんなふうにして戻るのがちょっぴり悲しかった。旅のあいだ、何ひとつ彼を邪魔するものがなかった。何よりも驚いたのは、腹が空かず、喉も渇かず、眠くもないことだった。昼夜を分かたず、休みなく歩いたので——というのも、彼はまた疲れてもいなかったからだ——、ついに彼は自分の故郷に着いた。父の家があるはずだと思う場所にいってみたが、驚くことに、そこにはぶなや柏の老木が生えた牧場があるのだった。

「でも、たしかにここだ。でなければ、わたしの勘違いだろうか」と彼はつぶやいた。

彼はそこからほど遠くないとある家に入り、自分の父親イヴァン・ダゴルヌの住むところをたずねた。

「イウァン・ダゴルヌだって……この辺りにはそんな名前の人間はいないよ」と相手は答えた。
　けれども、炉端に坐っていた老人がいった。
「そういえば、わたしの祖父がイウァン・ダゴルヌとかいう人について話しているのを聞いたことがある。しかしずっと以前に彼は死に、その子供や子供の子供たちもみんなやはり死んでしまった。だから、この地方にはダゴルヌという人間はいないのだ」
　哀れなイヴォンは自分が耳にすることにひどく驚いた。その地方ではだれ一人として知合いがなく、まただれ一人として彼を知る者がないので、もう自分になすべきことはないのだ、最善の道は肉親のあとについて肉親がいったところへいくことだと思った。だから、彼は墓地に出かけていき肉親の墓を見たが、そのうちのいくつかはもう三百年もの歳月を経ていた。
　そこで彼は教会に入り、心から祈り、そしてたちまち死んだ。たぶん水晶の城へいって、ふたたび妹に会ったのだろう。

あとがき

「伝承文学は、全部が一挙にというのでなく徐々にではあるが、消滅する傾向にある。今こそせめてその残骸を救い上げる時である」

今からおよそ百年ほど前に刊行された三十巻の叢書『世界の民話』の編者の一人であるポール・セビヨは、第一巻の序文でこう書いている。一八四三年生まれのこの編者が幼年期のころにふつうに語られ、女たちのだれもが知っていた民話がもはや半ば忘れられていることを知って愕然（がくぜん）としたというのである。伝承文学の収集は、それが文字に書き残されていないだけでなく、特定の土地に集中されているのでもないために困難をきわめたようだ。したがって、十九世紀末に企てられたこの『世界の民話』は、文字通り民話の宝庫と呼んでさしつかえないと言える。

民話、伝承、伝説、小唄、諺、なぞなぞ、迷信といった副題をもつこの叢書の正確な表題は『民間伝承文学世界国尽し』とでも訳しうるものであるが、「世界」とはいうものの、大半の巻はフランス各地の民話などにあてられており、「フランス民話集

成」の性格が濃い。訳者は奥平堯君とともに、この叢書の中からフランスの民話としてまとまりのよいと思われるものを精選し、幻想物、笑話物、小ばなし物、妖精物の四つに試みに分類してみた。それぞれの民話は古いものもあり、また比較的に近代のものと憶測されるものもあるが、時代を特定することがとうてい不可能であることは言うまでもない。ただ、伝承の過程でキリスト教道徳の影響を受けて原型があまりにも教訓的に変容され、民話としての感興を殺ぐと思われるものは極力はぶくことにした。本篇に訳出したのは、このうち幻想的民話に属するものである。

幻想文学の世界はわれわれの住む現実の外にあるのではない。反対に、現実の中から理解しがたいものとして突然浮かび上がってくるものである。「われわれの世界の前に別の世界が築かれているのではなく、逆説的な言い方だが、われわれの世界が姿を変え、崩れ去り、別の世界となる」（ルイ・ヴァックス著、窪田般弥訳『幻想の美学』）この定義を本篇の民話にゆるやかに適用しても、あながち無謀とは言えないと信じる。

日本における展覧会を目前に控えてきわめて多忙な身であったにもかかわらず、訳者の頼みを快く引き受け、本篇の表紙にみごとな絵を寄せてくださった、フランスの

画家ベルナール・ルエダン氏（Bernard Louédin）に感謝しなければならない。ルエダン氏は一九三八年にブルターニュ地方の県都レンヌで生まれた。幼少年期をモン＝サン＝ミシェルの沼沢地と砂地を眺めて過し、ルオー、ヴラマンクの絵で開眼して画家を志し、一九六三年ごろからレンヌ、ナント、エヴィアン、パリ、ボルドー、ストラスブール、ナンシー、リール、トゥールなどフランス各地のほか、ブラッセル、スイス、オランダなどの諸外国でも精力的に個展を開く一方、多くの画家、詩人、作家たちと交り、詩集や文学雑誌をエッチングで飾り、旺盛な活動をつづけて注目を浴びている画家である。ルエダン氏を魅了してやまないブルターニュの海と花崗岩に蔽われた海岸とは、同氏の絵の基調となっているように思われる。

私事にわたって恐縮だが、訳者がはじめてルエダン氏に出会ったのは、一九六九年の初秋であった。ブルターニュ旅行を思い立って乗った汽車は満席で、私はデッキに立っていた。汽車が動きだしたころ、一人の青年が背広の上着を小脇にかかえ、息をはずませながら跳び乗ってきた。やがて、車掌が乗客の切符を検札にきたが、慌てていたためであろう、青年は上着のポケットのあちこちに手を入れては空しく切符を探していた。苛立った車掌は非難めいた態度でせっかちに催促した。青年の当惑を見かねて私が当てずっぽうにワイシャツのポケットを探すように勧めると、計らずも切符

はそのポケットから出てきた。青年は私に礼を述べ、しばらく雑談したあとで私の名をたずねた。私が「ウエダだ」と答えると、青年は一瞬、意外な顔をして「まさか」と言うのだった。私がその理由をきくと、「私の名はルエダンだ」と言って愉快そうに笑いだした。なるほど、そういえば、彼の名は私のウエダの名にフランス語の定冠詞を付けたようなものだ。こうして私たちは友人になり、私は勧められるままに三日間、彼の家に厄介になり、落着いた小都市トレブールダンの町並みと花崗岩に蔽われた美しい海岸とを案内してもらった。別れるときに、彼は一枚の自作の油絵と海岸で拾ったきれいな花崗岩の小石を記念に贈ってくれた。そのときの出会いと友情を彼は十一年後のいまも忘れてはいなかったのである。ちなみに、本篇の民話のいくつかは、ルエダン氏の住む町の近くが舞台となっているという。

なお、訳出に当って使用したテクストは、早稲田大学文学部比較文学研究室所蔵の Les littératures populaires de toutes les nations, paris, G.-P. Maisonneuve & Larose, 1881–92, 30 vol. であるが、この叢書はこの三十巻のほかに増補版とも言うべき四十七巻が一八八一年から一九〇二年にかけて刊行されている。この「増補版」を利用できたのは日本女子大学の畏友、戸板俊敬氏のご好意によるものである。両大

学の研究室にお礼申し上げたい。

最後に、適切な助言を訳者に与え、またルエダン氏との交渉を推進してくださった編集部の高崎千鶴子氏に深く感謝したい。

一九八一年三月

植田祐次

訳編者略歴

植田祐次（うえだゆうじ）

1936年　旧満州国営口市に生まれる

1965年　早稲田大学大学院博士課程満退

《現在》　青山学院大学文学部教授

《著訳書》　レチフ『パリの夜』トゥールニエ『魔王』（共訳）『フランス文学史』（共著）トーリーヌ『物語ローマ誕生神話』（共訳）ほか

《現住所》　東京都世田谷区喜多見9—5—11

現代教養文庫　1047　フランス幻想民話集

1981年4月30日　初版第1刷発行

1991年5月30日　初版第16刷発行

訳編者　植田　祐次

発行者　宮川　安生

発行所　株式会社　社会思想社

（113）　東京都文京区本郷3の25の13

電話（03）3813－8101（代表）

振替東京6-71812

ISBN 4—390—11047—0

横山印刷・田中製本所

文学・芸術・読物（背マーク＝白D）

◈読物・ノンフィクション

世界の奇談　庄司浅水
世界の秘話　庄司浅水
海の奇談　庄司浅水
世界の奇跡　庄司浅水
世界の七不思議　庄司浅水
奇談千夜一夜　庄司浅水
世界の神秘　庄司浅水
怪談 民俗学の立場から　今野圓輔
日本怪談集〈幽霊篇〉　今野圓輔
日本怪談集〈妖怪篇〉　今野圓輔
日本伝説集　武田静澄
日本笑話集　武田明
沖縄民話集　仲井真元楷
中国神話伝説集　松村武雄編
中国奇談集　鈴木了三編
中国笑話集　村山吉廣編
中国の民話　沢山晴三郎編

中国宰相列伝　守屋洋
探偵小説の謎　江戸川乱歩
ユダヤ笑話集　三浦靱郎編
ユダヤの笑話と格言　ラントマン編
世界の民話　矢崎源九郎編
新編ユダヤ笑話集　S・ラントマン
アメリカ黒人昔話集　J・レスター
ベトナム民話集　矢野由美子編訳
東京の民話　小池・万代
インドとんち百話　渋沢青花
信念に生きる 石建虎究栄の生涯　片岡薫
インド民話集　渋沢青花
エピソード魔法の歴史　ジェニングズ
ユダヤ民話集　M・ゴリオン編
朝鮮民話集　渋沢青花
フランス幻想民話集　植田祐次訳編
フランス妖精民話集　植田祐次訳編
フランス笑話集　奥平堯訳編
フランス小ばなし集　奥平堯訳編
フランスことわざ歳時記　堀田郷弘他訳編

古代文字の謎　C・H・ゴードン
続日本笑話集　武田明編
インドネシア民話集　花岡泰次他訳編
星の神話伝説集　草下英明
徳川家康 乱世をいかに生きぬいたか　江崎俊平
織田信長 決断と行動の武将　江崎俊平
豊臣秀吉 天下取りの機智と戦略　江崎俊平
名城伝説　江崎俊平
フェアリーのおくりもの　T・カイトリー
マヤ・インカ神話伝説集　村松武雄編
西洋史こぼれ話　関楠生訳
フランス中世艶笑譚　森本英夫訳編

新編世界むかし話集 全10冊　山室静編
①イギリス編
②ドイツ・スイス編
③北欧・バルト編
④フランス・南欧編
⑤東欧・古代編
⑥ソ連・西スラブ編
⑦インド・中近東編
⑧中国・東アジア編
⑨アフリカ編
⑩アメリカ・オセアニア編

フランス幻想民話集

植田祐次訳編

教養文庫

1047

D
597

￥440
(427)

ISBN4-390-11047-0 C0139 P440E

社会思想社　定価440円（本体427円）

現代教養文庫